
StrangeVampire's Journey

妖氣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Stranger Vampire's Journey

【NZード】

N7065R

【作者名】

妖氣

【あらすじ】

吸血鬼は旅をする。理由など特に無い。ただ、旅を続ける。それが吸血鬼の日常なのだから。

プロローグ（前書き）

この小説には一次創作が含まれます。
それが苦手な人は見ないことをおすすめします。
また、グロテスクの表現もあると思うので
それも苦手な人は見ないことをおすすめします。
また、更新は気が向いたら程度です。

プロローグ

今、俺は現状について理解できないでいる。

16歳である俺はいつものように自分の部屋でアニメを見ていたら後ろから刀で貫かれた。

「ごめんなさい。」

そして後ろから声が聞こえた。それは女の子の声だった。

「ごめんなさい。」

また声が聞こえた。声から想像するに絶世の美少女なんだなど、死にかけの思考で下らない事を考えて後ろを見ると、そこにはやっぱり絶世の美少女がいた。

歳は14歳位か。まだ、あどけなさが残る顔は美しいというより可愛いの部類に入るのだろう。背も低めで胸は小さめだろうか。視界はすでに白黒になつて色は識別できないが髪は肩に軽く掛かる程度だった。

服装も普通の一般の中学生が着る様な服装だった。

ハツキリ言つて見るものを保護欲全開にさせるような女の子だが、今はその子に殺されかけていた。

「ごめんなさい。」

そんな彼女は俺に向かい悲しそうな表情で涙を流しながら謝つていた。だから薄れ逝く意識の中、少女に向かいこう言つた。

「ゆ・・ゆるさ・・ない。」

それが俺の最後の言葉だった。そして完全に意識が途絶えた。

その様子を見て、少女は両手から刀を放し、力が抜けたように崩れるように床に座り泣き続けた。頭を抱え、ごめんなさいと、ごめんなさいといつまでも・・・

「ユリは、どうだ。」

小年は赤黒い水の上を歩き続けていた。赤黒い水は鉄とむせ返る様な甘つたるい匂いがしてくるが、今は何故かそれが心地よい香りとなっていた。

「俺は確か殺されたんだよな。ところどころは、ここには三途の川なんか。」

死んだというのに小年は冷静だった。いや、冷静すぎた。そんな彼にどこからか声がかけられる。

『汝、何を望む。』

「誰だ、って言つても意味無いよな。」

『汝、何を望む。』

どうやら声の主は同じ事しか言わないらしい。

『汝、何を望む。』

「はいはい、分かった分かった。望みを言えばいいんだな。」

そして小年は望みを言う。

「力が欲しい、俺を殺した少女を殴れる力を。蘇りたい、俺を殺した少女を殴るために。」

それが小年の望みであった。その言葉を聞き、声の主は応える。

『聞き届けた、汝の願い、叶えよう。汝の思う力、汝に与えよう。』
その言葉と共に今まで歩くたびに波紋しか起こさなかつた赤黒い水が動き出し、小年を包み込んでくる。

『汝に受けよう、我が体を。汝に託そう、我が魂を。汝の行く末、我が思いと同じ。汝に願おう、汝の行く先、吉凶があらんことを。』
小年は相手の声を聞く最中、包み込んでくる水が何なのか分かつた。血である。赤黒い水全てが血であつた。その液体が体を包み込み、浸透していくつても小年は冷静だった。小年にとってこれは些細な事だと言わんばかりに。そして小年は言葉を紡ぐ。相手に対して、それが礼儀であるかのように。

「あなたの言つてる事、全て理解できないが言わせて貰う。お前はお前、俺は俺だ。お前の思いや願いは俺に託すな。俺の願いや思いは俺が決めることだ。」

『聞き届けた、ならば祈ろう汝の思いや願い、吉となりんことを。
その言葉を聞き、小年の意識は途絶える。これから先、何が起る
のかも知らずに。』

旅の始まりは紅魔館 最初の出会いは悪魔の妹

目が覚めた後、小年は自分の現状を把握しようとした。

「この体が俺なのか。」

目の前には大きな鏡が宙に浮いて、そこから見える小年の姿は異質だった。

顔面には包帯が幾重いくえにも巻かれ、右耳だけが布の間から覗いていた。全身も頭部と同じように包帯がきつく巻かれており、まるでミイラ男のようだった。

露出している部分は、せいぜいセミロングを逆立てたような灰色の髪の毛と、首とへその周囲ぐらいしか存在してなかつた。そして、男なのか女なのか全く分からぬ状態だった。

「これが、俺の望んだ物。」

この姿は、小年が憧あこがれていた吸血鬼そのものだった。

ただし、一つ違う所は包帯の色は黒ではなく灰色だという所である。自分の姿をまじまじと見ていると、急に鏡に文字が浮かび上がってきた。

【汝、望んだ姿なり。汝、望んだ力は複数なり。汝、我と共に旅をする。汝、この鏡を通るべし。さすれば汝の旅が始まる。】

文字を読み終わると同時に、鏡が輝きだした。

「俺は、俺を殺した女性を殴れば良いだけなんだが。」

その弦ゆくくと、頭の中に声が響いてきた。

『汝を殺した者、行方知れず。我、汝を殺した者の場所、今は知らぬ。』

「そうですかい。なら行きますか、人探しの旅へ。」

そう言い、輝く鏡の中を通り抜ける。そういえばと小年は思つ。鏡の向こうから爆発音等が聞こえるがその向こうでは一体何が起つているんだ？

Q・鏡の向こうでは何がありましたか？

A・出会いがありました。

「あなたは誰、遊んでくれる人？」

鏡から出た俺の目の前には、薄い黄色の髪をした七色に輝く特徴的な翼を持つゴスロリの女の子がいた。どうやらここは見渡すかぎり部屋の中らしい。

「遊ぶのは別に構わんが、こんな姿のと遊ぶのかい。」

小年はこんな状況でも冷静だつた。

「うん、遊んでくれるなら包帯さんでも気にしないよ。」

「そうかい、なら何して遊ぶんだ。おままでとか？」

その言葉に田の前の女の子は首を横に振り答える。

「ううん、弾幕ごっこ」

その瞬間、大小様々な弾の雨が飛んできた。その弾幕を紙一重で避けながら小年は言つ。

「おいおい、危険な遊びだが大丈夫なのか。お家が壊れても知らんぞ。」

そんな冷静な質問に少女は無邪気に笑いながら答える。

「うん、大丈夫。咲夜が後で片付けてくれるから。」

「その咲夜という人は誰なのか分からんが、こんな危険な遊びは家の中でやるもんじゃない。」

そう言つと小年は執事のようなお辞儀をして、相手に注意をする。

「外でやるものだ、安全を含め気兼ねなくやる為に。」

次の瞬間、壁から床から、様々な場所から蝙蝠^{（こうちやく）}が湧き出て、飛び跳ねていく。中からでは分からぬが外から見ると更に圧巻^{（あっかん）}だった。屋根からも館を囲む堀^{（堀）}からも蝙蝠が飛び出し、天に向かい飛んでいく。一分後、蝙蝠は出なくなつた。館・・・紅魔館は消えてしまつたのだから。残つているのは建物が在つた跡ぐらいだつた。

小年は空を見て笑う。小年の顔から唯一見える右目が爛々（らんらん）と輝いていた。

「雲一つない良い満月だ、こんな夜は外で遊ぶのが一番だと思わんかね。」

最初、少女は何が起こったか分からなかつたみたいだが次第に理解して目を輝かせた。

「すごいよ包帯さん、これなら思いつき遊べるね。」

「ああ、思いつき遊べるぞ。まあ始めようか、吸血鬼同士の遊びを。」

「包帯さん、吸血鬼だつたんだ。気付かなかつたよ。」

「別にそんな事どうでも良いじやないか、今は楽しく遊ぶ、それだけだ。」

小年の言葉に少女は同意して笑う。小年も笑う。小年はこの遊びを使い自分の力がどの位なのかを確かめようと思つ。ビニ�回でも小年は冷静だつた。

そして小年はどこからか玩具の拳銃おもちゃの拳銃 S·A·Aを取り出し、少女に向ける。それが遊びの合図になつた。

紅魔館の図書館で本をいつもの奴に盗まれたパチュリー・ノーレッジはため息をつきながら小悪魔と一緒に散らかつた図書館を片付けていると、どこからか蝙蝠が現れた。どこから現れたのか不思議に思つていると小悪魔の悲鳴が聞こえた。

「どうしたの小悪魔、変な声を出して。」

不思議に思い小悪魔の居る向いの本棚に行こうとして、その必要が無くなつた。

蝙蝠が生まられてきているのだ、床から、天上から、本棚から本からも大量の蝙蝠が。いつの間にか蝙蝠は足元からも生まれてきていた。何がなんだか分からなかつたが危険が迫つてきてる事は理解できた。

「小悪魔！－、生きてたら返事をして！－。」

蝙蝠の羽ばたきで聞こえなかつたのか返事は返つてこなかつた。駆け寄るうとしてても蝙蝠が行く手の邪魔をし、前に進めない。パチュリーは焦つていつた。そして転びそうになつた時、気がついたら館の外にいた。となりにはレミリア・スカーレットと十六夜咲夜、そして蝙蝠を手に乗せて撫でている小悪魔^ながいた。

「パチュリー様、お怪我は在りませんか。」

「・・・」

咲夜の問いかけを無視して小悪魔の後ろまで歩き一発殴つた。

「あいた？！、酷いですよパチュリー様、いきなり殴るなんて。」

「返事をしなかつた罰よ、次に返事をしなかつたらロイヤルフレアだから。」

小悪魔は反論を述べようとしたが、パチュリーの顔を見て何も言えなくなつた。パチュリーは泣いていた。小悪魔はパチュリーによつぽど心配せた事を理解して、素直に謝るしかできなくなつた。

レミリアはどんどん消えていく我が家を見ながら呟く。

「咲夜、フランはどうしたの。」

「すみませんお嬢様、フランお嬢様の部屋の周囲の蝙蝠の量が一番多すぎて私でも近づくことができませんでした。」

そして館が消えて蝙蝠が全て天に昇ると、残つた跡地にはフランドール・スカーレットとミイラが居た。

何か会話をしてるようだがミイラの方が拳銃らしきものをフランに向けた。その瞬間、戦いは始つた。

「咲夜、あのミイラが私の館を消してパチエを泣かせたので間違いないわよね。」

「はい、十中八九、間違いないかと。」

その言葉を聞き、永遠に紅い幼き月は天を見る。

「雲一つない・・・良い満月ね。」

雲一つない良い満月だった、こんな夜なら全力でのミイラを殺せる。

旅の始まりは紅魔館 最初の出会いは悪魔の妹（後書き）

妖氣「やつちやつたねミイラ、紅魔館を敵に回しちやつて。」

ミイラ「大丈夫だ、俺の思つてる力がそのまま使えるなら俺は誰にも負けない。」

妖氣「いやいや、人の繋がりを大事にしようよ。」

ミイラ「そんなの死んだ人間には必要ない。」

妖氣「・・・。」

ミーラは吸血鬼を塵とす

小年は弾幕を避けながら玩具の拳銃から弾丸をばら撒いた。

「包帯さん、なんで玩具から弾が出るの？」

目の前の少女は不思議そうに聞いてきた。隠す理由も無いので小年は少女の弾幕を避わしながら答える。

「弾丸は蝙蝠なんだ、自分の体から分離させて作った蝙蝠を高速回転させて銃弾として打ち込む。だから弾切れも装填の心配もない。」

「なら、貴方を殺せば弾は出なくなるということね。」

唐突に小年の真上から声が聞こえた。見上げると真上で槍のような何かを振りかぶつてる女の子がいた。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』……」

「うおつと。」

真上から来た攻撃にすぐに避けようとしたがギリギリの所でまた別の攻撃がきた。

「幻幽『ジャック・ザ・ルビドレ』」

突然、大量の弾幕とナイフが現れた。更にナイフはこすりに向かって飛んできている。

そして一人の攻撃によって巻き起しつた土煙によって小年は見えなくなつた。

「お姉さま、今始まつたばかりなのになんで止めるの。」

フランドール・スカーレットは不満そうに言つた。他の人と遊んでいる時にお姉さまが来ると遊びはそこで終つてしまつから。だからフランは不満を漏らした。ただ、今回は違つた。

「違うわ、フラン。私も混ざりにきたの。今日ばかりは本気で遊んでいいわよ。」

予想外の言葉にフランは目を輝かせる。本気で遊べるのは久しぶり

なのだから。

「ほんとに、ほんとにおもいつきり遊んで遊んでいいの。」

その質問に答えたのは姉ではなくメイド長の十六夜咲夜だった。

「ええ、フランお嬢様。おもいつきり遊んで構いません。」

咲夜は淡々と答えた。今のフランと咲夜・レミリアの温度差は大きく違つたがフランは気付かない。別に気付いても何も起こらないのだが・・・

そして煙が晴れるとそこには左腕を失つたミイラが立つていた。そんないラに向けて紅魔館の主は言つ。

「貴方、さつきの攻撃を左腕だけで済ませるなんて驚いたわ。まあ、続けましょう、この遊びを。この紅魔館と私の大切な友に手を出した事、後悔させてあげるわ。」

その言葉にミイラは少し考えるそぶりを見せながら言つ。

「この館が紅魔館というのは、なんとなく理解できたがお前の友達に手を出した覚えは無いけどな。まあいいか、そちらは一人追加ね。さつきのを見るに、じりやあ出し惜しみしてると俺が死ぬな。」

そう言つと、唐突に、唐突にミイラの体は霧散した。

「『一一代目領主』のレリック、『幸せの黄色い弾丸』のブリジストンときたから、ここは出し惜しみせず『藍影』の石橋で行くか。」

何処からともなく聞こえたミイラの声にレミリアは言葉をかける。

「一体何を言つてゐるの、それに何で霧散したの、まさか逃げるつもり?」

「いや、一番のポジションに陣取るだけだ。」

その言葉と共に霧となつていたミイラの体は月をバックに宙に集まつていいき、左肩の再生したミイラが現れた。どうやつたのか包帯まで元通りの状態で。

「咲夜、フラン、一斉に攻撃して引き摺り下ろすわよ。あのミイラ、何を考へてるか分からないけどあまり良い予感はしないわ。」

「分かりましたお嬢様、引き摺り下ろせば良いのですね。」

「分かつた、あの包帯さんにフランのとつておきを見せてあげる。」

そして三人同時にスペルカードを放つ。

「幻世『ザ・ワールド』」

「『紅色の幻想郷』」

「QED『495年の波紋』」

「なつ？！」

驚きの声が上がった。まさか攻撃されるとは思っていなかつた。そういう声が聞こえた。

「なんで・・・なんで私達を攻撃したの咲夜！！」

そう、攻撃されるとは思つていなかつた。まさか信頼している十六夜咲夜がレミリアとフランを裏切るとは思わなかつた。

あの時、三人はスペルカードをミイラに向けて放つていた。そこまでは普通だつた。そして次の瞬間には時間を止めた咲夜がミイラを庇うようにこちらに対面し時が動き出すと同時にスペルカードをレミリアとフランに放つていた。

スカーレット姉妹は突然の出来事ながら避けようとしたが動けなかつた。

なにせ気がついたらミイラの影が**実体を伴い**、更にその影から別の手の影が実体を伴い生まれて姉妹の両手両足を拘束していたのだから。しかも、影に重さは無いので、二人は動くまでまつたく気付かなかつた。

つまり何故ミイラが月をバックにしたかというと、影を最も大きくして自分の影の中に入れる事により気付かれない内に拘束するためであつた。もしも、スカーレット姉妹を影の中に入れないで今の技をやろうとすると確実に気付かれたであろう。よつて、ミイラの一番のポジションに陣取るという意味はこの事で

あり、ミイラが月をバックにした時点でミイラの勝ちは決まっていた。

「なんで・・・なんで私達を攻撃したの咲夜！！」

レミリアとフランは、碌に回避も防御もできないまま咲夜のスペルカードを喰らった。そのせいで体の至るところにナイフが刺さって、フランは氣を失いレミリアも満身創痍だが、それでもレミリアは咲夜に向けて叫んだ、叫ばずにはいられなかつた。だが、その声は届かない。

ミイラを庇つように宙に浮かんでいた咲夜は一人分のスペルカードを受けたが、その表情は苦痛ではなく何者かに操られたように無表情だった。

「ただ俺が操つただけだ。霧化した時に俺の体の一部、まあ霧の一部をメイドに吸い込ませた。だからそいつはお前達を裏切つてない、安心しろ。」

レミリアの叫びをミイラが代わりに答えた。その言葉を聞いてレミリアはミイラを先ほどまでの殺意に加え憎悪の表情で睨んでこいつ言った。

「絶対に、絶対に貴方をゆるさない！！」

ブチンとレミリアは満身創痍の中、影の手を全て引き千切り最後の力を振り絞つて宙にいるミイラ田掛けて突つ込んでいく。右手に全ての力を注ぎこみ実力の差を知りながら一矢報いようと突き進む。だが、それはできなかつた。レミリアは腹部を襲う衝撃で突き進めなくなつた。

なにせ、ミイラの体から放たれた高速回転した蝙蝠が、レミリアの腹部を撃ち抜いたのだ。その単純な出来事でレミリア・スカーレットは止まってしまった。

自分の腹部から滴り落ちる血を見てレミリアの意識は朦朧としてきた。

そして、意識が途絶える前にこんな言葉が聞こえた。

「だから言つたる、弾切れも装填の心配も無いと。それにしても、

今夜は本当に良い満月だ。」

その言葉でレミリアは空を見上げ、そのまま後ろへ倒れこむように落下していく。

本当に今夜は、良い満月ね。

レミリアは意識が途絶える最後の瞬間、涙が流れてることに気付かず、月を見続ける。そしてそのまま、宙から落ちていった。最後まで涙に気付かず、そして意識はブツリと途切れた。

//マーラは吸血鬼を壊とす（後書き）

妖氣「やりすぎだ。」

ミイラ「そうか、これでも手を抜いたが。」

妖氣「いや、これでもやりすぎだ。」

ミイラ「・・・分かつた、次から自重しよ。」

妖氣「まつたぐ、ほんとに次から丑重しや。」

ミイラ「・・・」

早すぎる新たな旅立ち

「夢・・・だつたの?」

目が覚めるまでラウンジのテーブルでうつ伏せの状態で眠っていたらしい。飲み掛けの紅茶も咲夜作ってくれた一切れのクランベリーパイもそのままだつた。

レミリアは周りを見てみた。今の明るさと太陽の位置を見るにお昼の時間らしい。他にも何か無いか周りを見渡してみる。

庭も堀も館もいつも通りだつた。自分の体も確かめてみたが腹部に穴は開いてないし、どうやらあれば本当にただの夢だつたらしい。

「嫌な夢を見たわ。やっぱり前日のミーラのホラー映画が原因かしら。」

そんな事を考えながらレミリアは呼び鈴を使い咲夜を呼んだ。しかし、待つても咲夜は来なかつた。

「買い物に行つたのかしら。」

確かに今日、咲夜は買い物で人里に行くと言つていたはずである。仕方ないと想い、レミリアは冷めた一切れのクランベリーパイを食べてから、図書室に向かつた。

途中、廊下で小悪魔と会つた。

「おはよう小悪魔。パチエは今も本の片付けかしら。」

「おはようございます。パチュリー様は今は人里の方へ行つてます。」

「珍しいわね、パチエが外を歩くなんて。」

本当に珍しかつた。いつも図書館に引き籠もつてゐるパチュリーが人里に行く事は滅多になかつたのだから。

「それにしても、今日は良い日差しだな。そう思うだろ。」

「基本吸血鬼は太陽が苦手じやなかつたかしら。」

眩まぶしすぎる太陽の光にげんなりしながらパチュリーは隣を歩く灰色のミイラに突つ込みを入れた。

「吸血鬼全ての弱点が太陽という訳ではない。俺はただ耐性があるだけだが、他の奴では光合成をしなければ生きていけない吸血鬼もいる。」

それは吸血鬼なの？と疑問に思いながらパチュリーは道案内をする。

「（まつたく、こんな奴にレミイ達は負けちゃったのね。）」

落ちていくレミリアを急いでミイラは空中で抱きかかえた。

「この程度で遊びは終りか。実際に使ったかった力はまだあつたが仕方ない。それにこれ以上は後味悪いな、下手へたしたら向こうの一人が泣いて土下座してくるかもしね。」

ミイラは心臓から聞こえてくる声にため息をつくと自らが操つていてメイドにレミリアを託しメイドの支配を解く。

「これは・・・全身が痛いってレミリアお嬢様！？」

自らの腕の中で重傷を負っている主に驚き、次に地面で横になつているフランに気付いて驚き、最後に近くにいるミイラに気がつき咲夜はミイラを睨む。

「よくもお嬢様方を！..。」

実際二人に手を下したほどんどが、意識の無い咲夜がやつたことだが、あえてミイラはその事を言わず、更に悪役になる事にした。

「やめとけ、お前じや俺に勝てない。それと紫の女の子に感謝しそう。あいつの声が無かつたら今頃三人仲良く死んでいたぞ。」

実際は殺す気は無かつたが、脅し程度で言つた。しかし、目の前のメイドは臆おくするどころか殺さんと言わんばかりの表情で睨んでくる。

「眠れ。」

やれやれいつた雰囲氣でミイラが首を横に振ると今までとは違う威

圧のある声で呟いた。

その瞬間、唐突な眠気に咲夜は襲われて、眠ってしまった。もちろん宙に浮かんでいたため抱きかかえていたレミリア共々落ちていく。それをミイラは影を使い受け止めた。

「さて、何もかも元に戻すか。」

小悪魔はパチュリーを抑えていた。

「パチュリー様、今行つたら危ないです。」

「離して小悪魔、今ならまだ間に合う！！ 間に合うのよーー。」

実際は間に合わない事はパチュリーは分かつていた。しかし、ただ黙つて見ている事はできなかつた。

『そこの女性の言つとおり、今行つたら危ないから一分だけ待つてくれ。二分たてば全て終るから。』

唐突に、後ろから声が聞こえた。一人は後ろを振り向いてみると、声を発しているのは先程まで小悪魔が撫でていた蝙蝠じゅうじだった。

「お願ひです、何でもします、何でもしますからあの三人だけは助けてください。」

パチュリーは蝙蝠に駆け寄り、切実にお願いした。つられて小悪魔もお願いをした。それを見て、蝙蝠は呟く。

『だから二分たてば全て終ると言つているんだが、まあいいか。じやあ何でも言う事は聞いてもらつ。』

その時、空から大量の黒が落ちてきた。バサバサと羽音を立てながら。

それは蝙蝠の大群だつた。蝙蝠の大群は紅魔館跡目掛けて落ち、そして集まつていく。そして一分後には何の傷も無い、いつも通りの紅魔館が建つていた。

二人はその光景を見て言葉を失つた。何もかも元通りになつていたからだ。そんな二人に蝙蝠は言葉を放つ。

『さて、館も元に戻した、三人の服も怪我も治した。約束だ、こち

らの言う事を聞いてもらおう。後、一応言つとくけど三人はさつままでの出来事を夢だと思うように暗示をかけといたから。』

太陽に目を細めながらパチュリーは思い出す。ミイラは一人にこう言つた・・・

『言う事を聞いてもらうが、さつきも言つた通り三人は俺の暗示により先程までの出来事を夢だと思つてゐるから、一人は暗示が解けないようによつも通り普通に過ごしてくれ。後、そこの紫の女の子は明日の昼、人里まで道案内をしてくれ。』

隣を歩くミイラは何を考えているのか分からなかつた。しばらく歩き、人里にたどり着いた。

「ここが人里だわ、それで案内してもらいたい場所はどこ。」

パチュリーはミイラに質問すると、ミイラは自分の腕をどこからか出した刃物で少し傷つけ、血液を空氣中に蒸発させた。

「何してるのあんた。」

ミイラは少しだけ黙つていたが、次には理解不能な事を言つた。

「効き目は抜群と。それとこの世界には俺の求める女はいないと。それだけ言うと、霧散をしてミイラは消えていく。」

「ここまで付き合つてくれてありがとな。また遊びに行くと思うから次は穩便に出会いましょう。じゃあな。」

そしてミイラは完全に消えた。パチュリーはポツンと一人きりになる。

「なんなのよ、一体・・・」

「パチュリー様、こんな所で何をしているのですか。」

横を見るとそこには咲夜がいた。咲夜の質問にパチュリーはこう答えた。

「もう、何がなんだか分からぬわよ。」

「?」

パチュリーの言葉に咲夜は首を傾げた。

この幻想卿に現れたミイラは表れた次の日には幻想郷から鏡を使い去っていった。

早すぎる新たな旅立ち（後書き）

ミイラ「次の世界は一体どこなんだ。」

妖氣「どんな場所が良い？」

ミイラ「タバコが吸えて、死体がいっぱいあるところ。」

妖氣「・・・、考えとく。」

主人公紹介

名前	ミイラ（偽名）
年齢	16歳
出生日	6月27日
外見	全身を灰色の包帯で縛つており、見える箇所は右目と首とへその周囲とセミロングを逆立てた髪型だけ。
性格	冷静
能力	不明
自室	でテレビを見ていたら後ろから女の子に刀で殺された小年。外見がミイラなのは小年が ^{あこが} 憧れていた者の姿のため。
基本	、人間には興味が無く興味があるとしてもそれは仲間だけである。
転生後	は吸血鬼になつたが、吸血鬼としての弱点が全く無い。
死体	に関する話や出来事などがおこると、その時だけテンションが上がる。
好きな物	はタバコである。
転生前	は葬儀屋として暮らしていたが、家族はいない。
今の時点まで	で使つた技

・**蝙蝠化**
ひつばつか

体を無数の蝙蝠に変化させる同じみの技だが、ニアラの場合は他の人や建物すらも蝙蝠化させることができる。

・**霧化**
むか

体を霧状に変化させる技。霧の一部を人間に吸い込ませて操る事もできる。

・**撃ち放つ**

体の一部を蝙蝠にして高速回転させて撃ち出す技また、全身を蝙蝠化して突進する技もある。

・**影を操る**

影に実体を持たせ、さらにはその影から新たな実体を持つ影を生み出す技。

攻撃から防御にまで使える。また、影を強酸化させることも可能。

・**空気感染**

内容不詳

他の技が出た場合、後書きで説明する予定。

ニアラ「と、いって、妖氣、なんで空気感染だけ不詳なんだ。」

妖氣「いや、そもそも空気感染の能力はまだそぶりだけを見せただけで公開されてないだろ。」

ニアラ「なら仕方ない。それで次に行く世界は。」

妖氣「魔法がある世界だ。」

ミイラ「なら人が死ぬのか、そつなのか！！」

妖氣「テンション上がってる所悪いが、平和な世界だ。」

ミイラ「そつか、残念。」

妖氣「まあ、評判の喫茶店とかあるから。あと、運が良けりや培養液の中の死体が見つかるかもな。」

海鳴に現れたミイラ 魔法少女と出会った小年

鏡の中から抜けたミイラは周りを見渡した。今は夜らしい。

「ここは、どこだ。」

ミイラはビルの屋上に立っていた。男女の一般人らしき人がいるが気にしなかった。人には興味ない。

『この地、海鳴市という名。汝、この地にて何を求める。』

頭の中に声がかけられる。どうやらここは海鳴市といつらじい。しかし、何を求めるつて俺は偶然ここに来ただけだが。

「お前、なんだ？」

と、一般人一人が寄ってきて男のほうが質問してきた。中肉中背の黒いサングラスをかけた銀髪の二十歳位の男だった。面倒になりそうなのでさつと立ち去ろうとしたら、男がこう質問してきた。

「もしかして、転生者か。」

その瞬間、ミイラは男に忍ばせていた玩具の拳銃を突き付けた。女の方は慌てて止めに入ろうとするが男は右手で制止した。

今更ながらに思うが、目の前の男が黒いスーツを着ているのに対し、女の方は黒いフードで全体を隠すという変わった服装であった。

「おいおい、俺は戦闘は苦手なんだ。穩便にいこうや、転生者さん。」

その言葉にミイラは銃をおろした。

「銀髪、なんで俺が転生者だと分かった。」

「いや、俺は転生者兼情報屋兼商人をやつていてな。まあその長年の勘だ。それで、あなたの名前は。」

その質問にミイラは偽名としてミイラと答えた。

「安直なネーミングセンスで。」

「別に良いだろ。お前には関係ない。」

向こうにも転生者らしい。それで、何故自分の正体が分かったのかの

謎が解けたため、今度こそ去ろうとして、歩みを進める。

「おい待てミイラ。俺の名前はまだ言ってないだろ。」

そんなのどうでも良い。興味ない。まあ、殺されかけたのに自己紹介をする心境には興味があるが。

「ルシフィイ、ルシフィイ・トリークス、通り名は『災厄伝承』だ。ここで会つたも何かの縁、情報をサービスするよ。」

その言葉にミイラは歩みを止めた。正確には『情報』という言葉で。『手短に言つてくれ。内容によつてはこれからは情報を買つていこう。』

もし有能な情報屋なら今度依頼して、自分を殺した女の子がどこにいるのかを調べさせるのも良いかも知れない、そう思い立ち止まつた。

「これは今は俺だけが知つていて、新入り以外の転生者なら分かると思うが、葬儀屋が死んだよ。」

その言葉にクツクツとミイラは笑つた。まさか、その情報が出るとは。殺されたのは昨日なのに、正確にはまだ一日すらも経つてないのに。

「合格だ、これから情報を買つていこう。そつそく一つ依頼をするが、そいつを殺した奴は今どこにいる。」

ミイラは紅い宝石を投げ渡しながら情報屋に依頼する。赤い宝石は紅魔館からパクつてきた。

そして、情報屋は早くも情報を伝えた。予想外の情報を。

「今は病院で意識不明の重体だ。左腕と、両足が切断された状態でな。」

二時間後 深夜

先程の屋上にはミイラと話していたルシフィイとその付き人の女がいた。ちなみにミイラはもう何処かへ消えていた。

「山猫、先に帰つてちょっとアレを発動させてくれ。」

その言葉に山猫と言われたフードの女性は転移魔法を使いどこかへ消えた。

それと同時に、ルシフィイの前に魔法陣が現れ、そこから金髪の女子と色の変わつた狼が現れた。

「情報を買つてくれたプレシア様の使いの者で間違いないですね。ルシフィイがそう質問すると女の子は頷いた。

「では、これがこのマンションの部屋の鍵です。他にも御用いのつかいがありましたらそちらに渡してある番号に連絡ください。追加料金ですが誠意せいいを持って対応させていただきます。では。」

そう言つと、ルシフィイは転移魔法を使い消えた。

少女、フェイト・テスタークサはアルフと共に部屋の中に入った。家具や家電が一式揃つてあつた。

「それにしてもフェイト、あの情報屋じょうぎやって信用できるのかね。」

アルフがそう聞いてきた。確かにあの情報屋は何を考えているか分からなかつた。だけど、これも母さんのため、絶対にジュエルシードを集めなければいけない。

そう考えているとテーブルの上に青い宝石と書置きがあつた。

「「えつ？」」

近寄つて書置きを読んでみる。

【お客様へ、情報を買つていただいたサービスとして偶然見つけたジュエルシードを一つお送りします。今後とも御観覧に。】
どうやら情報は信用できるらしい。ただし、予想外の事なのでフェイトとアルフはしばらく固まつていた。

ピンポーン

チャイムの音に気が付いて起きたら毎になつていた。どうやらソフ

アで眠つてしまつたらしい。大きく伸びをして今も寝ているアルフを起こさないように玄関に向かう。

扉を開けるとそこには優しそうな顔つきの十六歳位の小年がいた。

「あの、どちら様で。」

その言葉に小年は礼儀良く答える。

「始めてまして、このマンションに住んでいる葵井元樹あおいじゅもとじゅです。挨拶に

来ました、よろしくお願ひします。」

どうやらこのマンションの住人らしかった。なのでこちらも挨拶をする。

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

その後、小年は何か困った事があつたら下の階に住んでいるのでいつもでも来て下さいと言つて帰つていった。

部屋に戻ると、アルフが起きていた。

「「めん、起こしちゃつた。」

「つうん、今起きたところ。それよりさつきの人はお客さんかい。」

「うん、このマンションに住んでる人で優しそうな人だつた。これから買い物に行くけどアルフも行く？」

フェイトの言葉にアルフも行くと元気良く答えて人型になった。

夕方、フェイトとアルフが買い物から帰つてきてソファに座つてい

る間、葵井元樹は台所で料理を作つていた。

どうしてフェイトとアルフの部屋に葵井元樹が居るのかといつと、買い物の途中に偶然会つたのがきっかけである。

食品売り場でフェイトとアルフがインスタントや冷凍食品、菓子パンなどすぐに食べれるような物を買つていると丁度良いタイミングで葵井元樹が通りかかった。

フェイトは葵井元樹にアルフを保護者だと嘘の紹介をすると、葵井元樹は礼儀良く挨拶をした。

その後、葵井元樹は買い物が行つたらしく、大量のインス

タント等を見て、次にアルフの事を見て何か理解したような表情になりこつ言つた。

「アルフさん、フェイトさん。」迷惑じゃなかつたら今日はそちらの部屋で親交をかねてご飯を食べませんか。こちらで料理は作るので。」

急な言葉に一人ともポカンとしました。

そして今に至る。

最初は断ろうとしたが相手の善意に断りきれず、結局一緒に食事をすることとなつた。

今は台所からカレーの香りが漂つてきている。

（アルフ、葵井さんってなんでここまでしてくれるのかな。）

（うーん、多分お節介でやつてると思うよ。下心とかも感じないし。）

そんな風に一人が念話で会話してると葵井元樹がお盆に三人分のカレーライスとスプーンを載せて歩いてきた。

「じゃあ、出来ましたし食べましょうか。熱いので気をつけてくださいよ。」

そう言い、テーブルの上にお盆を載せて、何気ない手つきでテーブルの上の物を掴んだ。

「あつ。」

「これ、どこに置けばいいですか。」

掴んでしまつた、葵井元樹はジュエルシードを。そしてジュエルシードは輝きを放ち始めた。

フェイトとアルフは後悔した、なんで見つけた時にすぐに封印をしてバルディッシュの中に仕舞わなかつたんだろうと。

「えつ、何これ？！ アルフさんフェイトさん、これって何ですか？！ つてあれ？」

ジュエルシードは葵井元樹の手の中に入り消えた。そして葵井元樹は気を失つて倒れた。

「葵井さん……」

フェイトはすぐにバルディッシュを展開する。

「アルフ、お願ひ。結界を張つて。」

「ああ、分かつたよ。」

「いやー、わざわざ面白こじになつてきただかな。そつ思つだら山猫。」

アジトの一つで一休みしていたルシフィと山猫は、フェイト達の部屋に設置しておいた非常事態で反応する緊急信号メールを携帯で確認した。そしてルシフィは山猫にそう言つたが、返事は無かつた。

「山猫、どうした。」

後ろを振り向くとそこは山猫はいなかつた。そして近くから爆音が聞こえた。

「あの野郎、商品のバイクで現場に向かおうとしてんじゃねえええええ！」

ルシフィは急いで止めに行く。とこか止めないとヤバイ状況だつたりする。

海鳴に現れたミイラ 魔法少女と出会った小年（後書き）

ミイラ「さつそく俺を殺した女の子の居場所が分かつた。」

妖氣「そうだな。それにしてもあの情報屋兼商人、お前的にはどう思つ。」

ミイラ「気に入った。これからは有効に活用しようと思つ。」

妖氣「人を物扱い。」

ミイラ「俺的にはあの金髪の女の子の方が気になる。」

妖氣「お前、ロリコンか？」

ミイラ「違う、アイツは人とは違う気がする。」

妖氣「（確かに普通の人とは生まれ方は違うが・・・）」

ミイラは名も無き病院へ 小年は少女を義妹と重ねる

ミイラは情報屋から買つた情報を元にある病院に着ていた。現在、霧化の状態で移動してたため誰にも見つかる事無く移動できた。そして、目的の部屋の前にたどり着いた。

「面会謝絶か。」

扉には面会謝絶の張り紙が張つてあり、扉には鍵が掛かっていた。しかし、今は霧化しているため面会謝絶の文字を無視して扉の隙間から入つていった。

「・・・、これが俺のしたことか。」

霧化から元の体に戻つたミイラが見た光景は、ベットで仰向けになつている惨たらしい状態で呼吸器を着けた少女の姿だつた。どうやら手術が終つて間もないらしく、脈を計る機械なども設置されていた。

その少女の状態は左腕は肘の所までしか無く、左足は付け根からスッパリと、右足は膝の部分からスッパリと切断されていた。そして、切断面を隠すかのようにギプスで覆おおわれていた。

「これじゃあ、殴るに殴れねえよ。」

ミイラは基本人間には興味ない。しかし自分を殺した少女がこのようない姿になつて何も感じないほど無機質ではなかつた。

しばらくの間、少女を見つめていると少女が薄く目を開けた。どうやらまだ麻酔はまだ効いているらしく目の焦点は合わさつてなかつた。そしてミイラを見るなり少女はミイラに向てこう言った。

「私に、左腕は、あり、ますか。両足は、あり、ますか。」

「・・・。左腕も、両足もない。」

ミイラは少女に事実を言った。

「やっぱり、ですか。それと、やっぱり、生きて、いたん、ですね。葬儀屋、さん。」

少女は微笑んでいた。全てを失つたような表情で。

「いや、死んださ。今の俺は葬儀屋じゃない、ただのミイラだ。」

「そう、ですか。声が、似ていた、ので、もしかし、たらと、思つたん、ですが、やっぱり、当たつて、ました。あの、葬儀屋、さん。

弱々しい声で少女はミイラに声をかける。

「だから俺はもう葬儀屋じゃない。今の名前はミイラだ。」

「そう、ですか。なり、ミイラさん。聞いて、くれますか。今から、話す、私の、愚かな、過ちを。」

その言葉にミイラは頷く。その様子を見て、少女は自嘲氣味に微笑みながら話し始めた。

フェイトとアルフと葵井元樹は沈黙の中、カレーライスを食べていた。

話は少し戻る。

氣絶している元樹の体に宿つたジュエルシードを封印及び回収したフェイトとアルフ。

さてどうやつて誤魔化そうか考えていたら葵井元樹が目覚めて起き上がつたのでフェイトとアルフは慌てた。そんな二人に元樹はこう言った。

「食べようか、カレーライス。」

そして今に至る。

フェイトとアルフはカレーライスを食べながら念話をしていた。
(アルフ、なんで葵井さんはさつきの事を聞いてこないんだろう。
(もしかしたらジユエルシードの影響で忘れてるかもしれないねえ。)

)

(だと良いけど。)

確かに一般人があんな光景を見ても夢と判断するかもしれない。けど、葵井さんは直覚めてすぐに『食べようか、カレーライス。』と言つた。

それが腑に落ちなかつた。そして沈黙の中三人は同時にカレーライスを食べ終えた。

そして葵井さんは両手を合わせてこう言つた。

「いじりをままでした。じゃあ先程までの出来事を説明お願いします。」

やつぱり気付かれてました。

フェイトとアルフは誤魔化す事ができないと思い説明した。魔法の事、ジュエルシードの事、母さんの手伝いでこの世界に来たこと、話せない事以外は全て話した。葵井さんは真面目に聞いてくれた。「やうだつたのか、いまだに信じがたいことのオンパレードだが信じるよ。それで、俺は何を手伝えば良いんだ。」

説明を聞いて葵井さんは何か手伝える事はないか聞いてきた。

「ごめんなさい、探す手伝いはしなくていいです。かえつて邪魔になるとと思うので。」

一般人を巻き込んで危険な田にあわせたくない。そう思いフェイトは断つた。しかし、葵井元樹は首を横に振つた。その様子にアルフも言葉を掛けた。

「フェイトはあんたのためを思つて言つているんだ。悪いけど、あんたにジュエルシードを探す手伝いをさせる事はできないよ。」

その言葉に対しても葵井元樹は首を横に振つた。そして葵井元樹は口を開いた。

「なにか誤解してるのでだから言つたけど。俺もその探し物は危険だと分かっている。」

「なら、」

フェイトが言いかけたところで葵井元樹は右手を前に突き出し静止のサインを出した。

「話は最後まで聞こうな。まあ言いたい事は分かってるから敢えて言つけど、俺が手伝える事は家事洗濯及び食材の買出しなどだ。^あ危険物を探す手伝いはやらないから安心してくれ。^{ジュー}」

その言葉にフェイトとアルフの一人は拍子抜けしてしまった。てっきり危険だと分かってる上でジュエルシードを探すのを手伝つと言つと思っていた。

そんな二人の考えは露知らずで葵井元樹は一人自分の世界に入り込んでいた。

「うん、最低でも育ち盛りのフェイトさんのために栄養のある物を作らないといけないな。それに一人とも探し物で街中を捜索するから洗濯などもしなくてはいけないし」

「あ、あの、葵井さん？」

フェイトの呼びかけに葵井元樹は全く反応しなかつた。それどころか、どこか遠くの世界に行つていた。

「フェイト、しばらくそつとしといた方がいいよ。」「で、でも。」

「ということは今日から計画表をたてないとな。うん、お母さんのためにフェイトさんは手伝いをしてるのに自分は悠々と過ごしていられないし。お兄さん張り切つちゃうな。」

どこか遠くの世界に旅立つていた葵井元樹の表情は、フェイトとアルフの一人には生き生きとして見えた。

フェイトとアルフは知らない。葵井元樹はフェイトを妹と重ねてしまった事を。

そして葵井元樹の妹はすでにこの世を去つていた。^{せいさん}死因は母親による虐待、フェイトが受けれるよりも凄惨な虐待であつた。

虐待の理由は簡単で血が繋がっていないからだつた。つまり養子と

して来た子であった。

また、この世を去った時の年齢は9歳、フロイトと同じ年齢であった。そして悲しき事に、その日まで葵井元樹は妹が虐待を受けていた事を知らなかつた。

そして、あの過去の自分のように葵井元樹は目の前の少女が虐待を受けている事を知らない。

ここまで偶然が重なれば、これは偶然と呼べるだらうか。

もしかしたらこれは、偶然ではなく必然なかもしれない。それを知る術は無いのだが・・・

『マーラは名も無き病院へ 小年は少女を義妹と重ねる』（後書き）

妖氣「まさか葵井さんがあんな辛い過去を持つとは」
ミイラ「・・・」

妖氣「どうしたミイラ。」

ミイラ「いや、なんでもない。思い出に干渉しただけだ。」

妖氣「？」

ミイラ「（・・・）めんな。」

妖氣「何か言つたか。」

ミイラ「いや、何も言つてないが。」

ミイラは魔法少女を見ていらない

「ふう。肺に染みる。」

とある病院から海鳴市に戻っていたミイラは神社の石段に座り口元の包帯をどかし、タバコを吸っていた。

（・・・どうしたんだか、俺を殺した女を気にするとは。）

病院で話を聞いてからミイラは何かを感じていた。別に罪悪感は感じない、同情もしていない。好意なんてのは全くといつていいほど感じてない。

ただ、何かしら感じていた。その何かが分からぬ。それが、もどかしい。

「ふう、美味しい。」

だからタバコを吸う。その何かを忘れるために。これは転生者になる前からの習慣だった。何かあつたらタバコを一本吸う。別に中毒ではないがミイラはタバコが好きだった。

「ふう、もう終りか。」

タバコはフィルターだけになってしまった。そのフィルターを右手で握り、再び拳を広げるとそこから一羽の小さな蝙蝠（じゅうじつ）が現れ、天高く飛んでいった。

（下から子犬連れの女性が一人か。なら興味ない。）

蝙蝠から得た視覚情報では子犬を連れた女性が石段を登つて着ていた。別に自分の姿を見られても変な視線で見られるだけだからなんともないが。

『汝、姿を隠せ。』

と、なんか姿を隠せと命令された。そういうばいいつの名前は何だつたか。

「・・・めんどくさい。」

『汝、姿を隠せ。』

どうやら拒否権はないようだ。仕方ないのでミイラは霧散（むさん）した。

（隠れろってあの女がなんなんだ。もしかして『食鬼人』のかつてそれはないか。あれは見るかぎり犬を含めて感染済みだ。）

ミイラは女性と犬を分析しているうちに、女性は石段を登りきつた、子犬が地面に落ちている石を咥えた。その石はミイラには見覚えがあった。

（あれは確か、ジュエルシードだつたか。何でも願いを叶える宝石だつたはず。）

そんな風にミイラが考えていたらジュエルシードが輝いて犬を取り込んだ。女性は何がなんだか分かっていないようだ。

（あつ、この場合は犬に取り込まれたが正解か。）

しうもない事を考えていると子犬が進化しました。黒い四つ田の怪物に。

（この場合は田は背中についた方が全方位を見渡せるのに。それに変なところに牙が生えてるし、親知らずなのか？）

冷静に欠点を指摘してると女性が怪物に恐怖して氣絶した。しかしミイラは今は怪物にしか目が行つてない。人間には認めた奴以外とことん興味ないがそれ以外なら興味がある、それがミイラだつた。（しかし進化したことにより凶暴性は大幅に上回つてるか。それに関節が強靭になつてると見ると瞬発力なども上がつてると見える。さらに進化したことにより感染まで解けているか。）

『汝、姿を現せ。』

（黙つてろ、今はこの興味深い生物をじつくりと観察するのが先だ。）

『汝、姿を現せ。』

（・・・、納得の行く理由を言えと言つても教えてくれないんだる。ならせめて教えろよ、何故死んだ俺の体を使ってあの女の左腕と両足を切断したかを。あの元子犬を何とかした後にな。）

飼い主を襲おうとした犬の怪物の目の前に、目に見えぬ霧は集まり

だす。

霧は集まるたびに色が付けられていく。それはミイラの纏^{まとい}つ包帯の色ではなく、真っ赤な真っ赤な血の色に。

その様子を見て犬の怪物は怯えだす。まるでそこに死が迫^{せま}っているかのように。

そして徐々に血の色に灰色が混ざり、人の形となつていく。

「グルアアアアアアアアアアアア！」

犬の怪物は死に抗おうと赤と灰色の人の形をした物体に突撃した。

「狼は喉笛に喰らいつく『my body is chew to
vital organ』」

声が響き渡ると同時に、人の形をした霧の腕の部分が狼の頭になり犬の怪物の喉笛に深く深く牙を突き立てた。そしてそのまま引き千切る。そして怪物は元の子犬の姿に戻った。喉から血を溢^{あふ}れ出させながら、痙攣しながら。

「good by 良い眠りを。」

完全な姿になつたミイラは腕を狼の頭から人の腕に変えながら別れの言葉を口にした。その手にジュエルシードを握りながら。

「あつ」

声が聞こえたので石段の方に視線を向けると、そこにはフェレットのような動物を引き連れた女の子がいた。

「なんで・・・どうしてこんな酷い事を。」

女の子は倒れている女性と死体になりかけの犬を見て表情を強張らせながら言った。その言葉にミイラは女の子に近づき、通り過ぎた。

石段を上がりきつたら、そこには気を失つて倒れている女性と首から血を流している子犬、そして両者の間に立つ灰色のミイラの後姿がありました。そして、ミイラの手にはジュエルシードが握られていました。

この酷い光景を見て、思わず声が出てしました。その声に気付
き、灰色のミイラはこちらに振り向きました。振り向いた灰色のミ
イラは右田以外を全て包帯で覆つっていました。

「なんで……どうしてこんな酷い事を。」

その言葉に、ミイラはこちらに近づいてきました。それを見てユー
ノ君は私に念話で話しかけました。

（なのは、レイジングハートの起動を。）

（えつ？、起動って何だつづ。）

（私は使命をから始まる起動パスワードを）

（あんな長いの、覚えてないよお。）

そんな事を話していくうちに灰色のミイラは田の前まで來ました。
そしてそのまま、灰色のミイラは通り過ぎていきました。そして灰
色のミイラは何事も無かつたかのように石段を降りていきました。

「待つて！！ まだ話しが

その言葉に、灰色のミイラを止まらず振り返りながら二つ三
回いました。

「興味ない。だが、もし話を聞いてもらいたかつたら普通と違うこ
とを示すんだな。」

そう言いながら灰色のミイラは再び歩き始めました。慌てて追いか
けようとして体が動きませんでした。まるで命令を受け付けてい
ないかのように。

「なんで、なんで動けないの！？」

ユーノ君も同じで動けないようでした。

「感染済み、お前が普通である証だ。」

その言葉にユーノ君が怒鳴りました。

「待つて！！ これは一体なんなんだ。それにジュエルシードをど
うするつもりだ。」

その声を聞き、灰色のミイラはまるで凄い勢いで振り返りユーノ君の
目の前に立ちました。

「驚いた、喋るフュレットだとは、名前はなんという。」

「僕の名前はユーノ・スクライア……じゃなくてジュエルシードをどうするつもりだ！！」

その言葉に灰色のミイラは「

そう言うと「一ノ君の前にジユエルシードを置き

「ユーノ・スクライア……その名、覚えたぞ。じゃあな。」

そう言つと、再び灰色のミイラは石段を降りて行きました。私には

目を向かないで・・・

キューン、キャンキャンキャン

唐突に聞こえた鳴き声の方向に視線を向けると死に掛けていたはずの子犬が飼い主らしき女性に近づき鳴き声を響かせていました。まるで何事も無かつたかの様子でした。

時刻：夜
場所：高町家

お風呂から上がつてユーノと自室に入つたのはは、携帯にメールが入つていたので見てみた。

差出人は『翠屋』のアルバイトとして働くのは友達の紅美鈴からだつた。

こんばんわ、
なのはちゃん。

こんな時間でちょっと変な質問をするけれど、何か変わった事つて起きてないよね。

起きてなければ良いんだけど。起きていた時は気をつけてね。
特に【災厄伝承】といつている人が居たら近づかないことです。
じゃあ、お休みなさい。

PS・昨日のフューレットさん、ゴーノって名前ですよね。その子とは仲良くやっていますか？

探し物の手伝いは危険だと思つたけど頑張つてね。お姉さんも手伝える時は手伝いますから。

「えつと・・・【災厄伝承】ってどうゆうこと、なのかな。」「僕に言われても・・・まあ、もし会つたとしても近づかなければ良いと思うよ。」

ゴーノはなのはにそり言つた。

「うん、そうだね、ゴーノ君。」

ゴーノに返事をしたのは、そこである事を思い出す。灰色のミイラの事を。

「えつと、ゴーノ君。【災厄伝承】ってもしかして、灰色のミイラさんの事かな。」

「あつ・・・。」

一人は少しの間、固まってしまった。

二人は誤解していた。灰色のミイラが【災厄伝承】でないことを・・

ミイラは一人、ビルの屋上から海鳴市を見下ろしていた。

『汝、転生するには血肉が必要であった。汝に虚言を吐いたのは特に理由はない。』

「特に理由は無いって、別に嘘を吐かなくても俺は気にしなかったぞ。」

『汝、他に聞きたい事は。』

「他に聞きたい事はつて・・・。」

その言葉にミイラはため息をついた。聞きたい事など山ほどあるこ

決まつていいのだが、全て質問するとキリが無いので一つだけ質問することにした。

「Who are you. お前の名前を教える。」

その言葉に相手は答えてくれなかつた。

「・・・、黙秘か。じゃあもう一つ質問する。この街で一体何が起ころる。」

その言葉にも相手は沈黙を保つだけだつた。

「・・・、この街の人のどの位が感染しているんだ。」

『汝により、ほぼ感染している。』

「それは答えるんだな。」

ミイラはその答えを聞き、懐からタバコを取り出す。今日は雲で用が隠れている、それはそれで良い月夜だ。

ミイラは魔法少女を見ていない（後書き）

妖氣「新しい技、出しましたね。」

ミイラ「それが何か。」

妖氣「とりあえず、空気感染はまだ一部しか出してないからな、説明は省略。」

ミイラ「じゃあ何を説明するんだ。」

妖氣「狼化だよ。」

ミイラ「それもやつたな。」

妖氣「いや、自分のやつた事ぐらい覚えろよ。」

ミイラ「そうだな。」

狼化おおかみか

腕を狼の頭に変える技。また、建物から狼を作り出すことが可能。一応、体全体で狼になる事も可能だが、その場合、他の能力は使えない

なるので、ミイラは全身を狼に変える事はほとんど無い。

ミイラは再びフェレットの元へ 小年は少女の世話をする

夜は吸血鬼の時間である。満月が出ているなら尚更である。別に今田は満月ではないのだが・・・

「find out・見つけた。」

何処かの校庭、そこで魔法少女とフェレットがジュエルシードを封印していた。無論、ミイラはジュエルシードには興味が無い。興味があるのはフェレットである。ミイラはフェレットを気付かれない内に摘み上げた。

「うわっ！？」

「えっ、ユーノ君！？」

「ユーノ・スクライア。神社の時以来だな、元気にしてたか。」

ミイラは友人に話しかえるような軽さで挨拶をした。もちろんユーノはもがこうとするが、ミイラはがつちりと掴んでいた。ちなみに、なのははミイラを警戒していた。

「おいおい、そんなに暴れるな。俺とユーノの仲だろ。」

「えっ、ユーノ君とそこの方は友達だつたの？！」

なのはの言葉を聞きミイラは答える。

「ん？ なんだお前、居たんだ。」

その言葉に先程までの警戒はどこへ行ったのやら落ち込むのは。小さい声で何か呟いているがミイラには聞こえない。そんな少女を気にしないでミイラは返答する。

「まあ、俺とユーノは厚い友情で結ばれているんだ。」

そこでようやくミイラの手から逃れたユーノが大声で言い返す。

「いつそんな仲になつたつていうんだ！！ それになのはも落ち込んでないでレイジングハートの再起動を」

その言葉に、ミイラは悲しそうに呟く。

「いや、冗談のつもりで言つたんだがそこまで拒絶しなくても・・・、それに再起動つて俺は別にその少女はどうでも良いが、ユーノ

とは友好な関係でいたいのだが……

「私つて、そんなに影が薄いのかな……」

「えつ、何この空氣。」

15分間、なのはとミイラが落ち込んでいるという不思議な状況になつた。

「なあユーノ、確かにあの時は体を動かせない状態にしたが別にあれは敵意あつてやつた事じやないんだ。」

ようやく立ち直つたミイラはユーノと会話をしていた。

「じゃあ、なんでジュエルシードを持っていたんだ?」

「あれは偶然だよ。子犬がジュエルシードを取り込んで化け物になつたのを見た。その化け物が襲つてきたから強引に化け物から取り出しただけだ。」

その言葉にユーノは筋が通つていて納得して、そこで思い出したように質問する。

「一つ聞くけど、あの子犬が蘇つたのは……。」

「聞くな。」

突然、ミイラが威圧のある重々しい声で呴いた。その瞬間、ユーノはその質問が出来なくなつた。まるで精神を束縛されたかのようだ。

「あ、今のは……一体。」

「ユーノ君、どうしたの?」

ようやく立ち直つたのは、ユーノが困惑している事に気付き質問した。

「あ、あ・・あ。」

ユーノは何かを言おうとして上手く喋れない状態だった。そんなユーノに対しミイラは呴つ。

「という訳だユーノ、また来るからな。それと今後は俺の能力を聞

くな。」

ミライは立ち去つていぐ。最後にはこんな言葉を残して。

「それと前もつて忠告をしておく。コーナー、俺はお前を氣に入つて
いる。だから俺を知りうとするな。俺を知つた途端、お前は消され
る。」

そしてミライは何処かへ立ち去つていった。

フェイトとアルフはジュエルシードの反応が出たのですぐにドアに向かつたが、結果は収穫無しで終つてしまつた。

今は自分の泊まつているマンションの部屋の前にいる。

「フェイト、元気だしなよ。次はきっと見つかるから。」

「そうだねアルフ。次はきっと・・・

そつ言いながら部屋の中に入ると葵井元樹あおいもとしげがテーブルに突つ伏して眠つていた。

あの日から葵井さんはちょくちょく炊事洗濯掃除をしに来ていた。合鍵を渡した日からは毎日のように来ていた。

「・・・きっと見つける。母さんのためにも、私達を気にかけてい
てくれる葵井さんのためにも。」

「・・・、そうだねフェイト。」

アルフは内心では葵井元樹を感謝してると同時に恨んでもいた。
本当はフェイトの母親からフェイトを引き離したかった。フェイト
を救いたかった。

だけど、フェイトはジュエルシードを全て集めたら昔みたいな優し
い母親に戻ると信じて私の言う事を聞いてくれなかつた。
辛く悲しい思いをしながら、決意を胸に秘めて。

葵井元樹が現れてからはさらに決意が固くなつていった。

フェイトと感情をリンクしているのだから決意が固くなるのを感じ

るのは当然の事だった。

だから、葵井元樹を恨んでいる事を悟られないように一部リンクを解除をしていた。本当に憎く思っていた。

しかし、それと同じくらい感謝もしていた。

葵井元樹と出会つてから、フェイトの悲しみが格段に消えていった。だから、もしかしたらフェイトを救つてくれる。そんな希望さえ抱いていた。ただの魔法も使えない生ぬるい世界で生きてきた一般人である小年に対して。

そんなことは幻想だと理解しながらも。

そんな複雑な感情を抱きながらもアルフは今日まで過ぎしていた。

フェイトとアルフは葵井元樹を起こさないよつにタオルケットを被せてテーブルの上に置いてある書置きを見た。

フェイトさんとアルフさんへ

「こんな夜遅く」苦労様です。差し入れにクッキーを焼いて置きました。

疲れたときには甘い物を食べるとリラックスできるらしいです。これからもジュエルシード集め頑張ってください。

葵井元樹より

どうやら、あと少し待つて来なかつたら出でていこうとして、そのまま眠つてしまつたらしかつた。

書置きの隣りにはクッキーが置いてあつた。フェイトとアルフは一つ食べてみた。

冷めているが、ほんのり甘くサクサクしていて美味しかつた。

「美味しいね、フェイト。」

「そうだねアルフ。」

そこでふとフェイトは何かを考えるような表情になった。

「どうしたんだい、フェイト。」

「・・・私にお兄さんが居たら、葵井さんみたいな人なのかな。」

その言葉にアルフはクッキーを喉^{のど}に詰まらせてしまった。

情報屋、ルシフィイは部屋の中で山猫の焼いてくれたクッキーを食べながら資料を見ていた。

「ん？ この資料は・・・」

一瞬、顔を隠しくすると残り一枚のクッキーを食べて資料にペンで何かを書くとその資料を持ち席を立つ。ドアを開けるとそこにはまたまた通りかかった山猫がいた。

「山猫、ちょっとお客様の場所に行つてくる。留守番を頼んだ。あとクッキー美味しかったぞ。」

「分かりました。ちなみにお客様とはどちらの方で。」

その言葉にルシフィイは資料を山猫に渡した。

「それを見れば分かる。」

そう言つと、足早に出て行つた。残された山猫は資料を見る。

「これは・・・」

そこにはプレシア・テスター^{ロッサ}の病状とその娘アリシア・テスター^{ロッサ}の死因、そして全く関係のない葬儀屋の死体消滅の資料が載つていていた。

それと、右端にルシフィイが書いたと思われる何かのメモみたいなのが書いてあつた。

「葬儀屋・・・ギヤルド・・・屍使い・・・病状・・・死体・・・これは一体・・・あつ。」

咳くと同時に、全てが繋がつた。フードに隠れて口元しか見えない山猫の表情は微^{わず}かに微笑んでいるように見えた。

ミイラは再びフェレットの元へ 小年は少女の世話をする（後書き）

妖氣「とりあえず聞くが、お前の能力は何種類あるんだ。」

ミイラ「教えない。」

妖氣「だよね。だが一つだけ言わせてくれ。フェレットだけでなく少女もしつかり見ようよ。」

ミイラ「なんで人間に興味を持たなくてはいけないんだ？」

妖氣「いや、あのフェレットも人間だよ。」

ミイラ「そうなのか、それは凄い。ますます友好関係でありたい。」

妖氣「・・・お前の基準が分からん。」

ミイラ「だらうな。俺はあの日から普通の人間には興味が無い。」

妖氣「そうか、まあいいか。次回も続くよ~」

ミイラは桃色の魔力光に 小年は少女のそばで眠る

世の中には変えることの出来ない運命と、うなぎの悲劇がそこらへんに転がっている。

「街中にて転生者及びその仲間三名、確認しました……指示を。『殺しなさい。』

イヤホンマイクから伝わる上司の単純な命令を聞き、十三歳位の小年は笑い合う転生者と仲間たちの集団の横を通り過ぎよつと見せかけて一瞬で終らせる。

銃弾三発に一閃のナイフ、小年は殺意も悪意も罪悪感も抱かずに入間の死角から命を刈り取つていく。

「人間には、興味ない。」

何が起こったのか分からず崩れ落ちていく四人の人間。いきなりの殺人事件に対しパニックになる民衆。それらを一瞥もせずにイヤホンマイク越しに上司に報告をする。

「ターゲットの死亡を確認しました。回収班へ繋いでもらえると助かります。なるべく人間以外の奴をお願いします。」

『ご苦労様でした。次回の暗殺任務^{ウェットワーク}に向けて休んでいて構いません。では、通信を切ります。』

人々の怒声や鳴き声を気にせず、小年は家に帰ろうとする。悲劇はそこらに転がっている。一分一秒で数え切れないほどに起つていて。小年がやつたのはその一角、小さな小さな欠片。

ただ誤解してはいけない。悲劇が起こることで悲しみが蔓延するの一割で、悲劇により喜ぶのも一割。そう、残り八割は悲劇とも喜劇とも関係ないのである。

「邪魔。」

帰る道筋で泣いている女の子に服を掴まれた。長く燃えるような緋色の髪をそのまま伸ばしている女の子だった。

「邪魔。」

「どう・・して、どうしておね・・お姉ちゃんヒグッ、お姉ちゃんを殺しヒック、殺したの」

「邪魔、人間には興味ない。」

強引に引き剥がし拳銃で両足の太股ふとももを撃ち抜く。

「あぐつ！？」

少女は何度も立とうとして立てなかつた。少女は大声で泣いた。痛みと悲しみと悔しさに泣き続ける少女を見向きもせずに小年は帰路につく。警察は来ない、組織が手を回してゐるから。

「うう、許さない。絶対に、絶対に殺してやる！！」

少女のその言葉は小年には届かなかつた。少女は後で知る事となる。小年には名前が無く、替わりに裏の世界の人からは葬儀屋と呼ばれていることを。

いかに強力な力を持つていようとも転生者を確実に再び葬る。その事にちなんで付けられた名前であることを。

そう、これは昔話である。二年前のまだ葬儀屋が生きていた頃の話である。

「なんだこれは。」

ミイラは巨大な樹木が街に根を張り巡らせてゐる状況を見ながら呟いた。

『汝、何故に不思議がる。』

その頭に直接響く言葉にミイラは当然というかのよに返答をした。『当たり前だ、正直言つてあんな巨大な樹木はイギリス戦線殲滅戦ヴァルキリーの翼以来だぞ。一体何が』

『あれもジュエルシードの影響である。』

その言葉にミイラは目を爛々と輝かせる。

「ということは、コーノが出てくるのか。じゃあ会いに行かないとな。』

そういうてる間にも樹木の根はミイラの前に迫つてくる。そしてミイラの体に当たると同時に、ミイラに当たつた樹木の根の部分だけ大量の蝙蝠ひつばくとなつて空に飛び立つた。

「さて、ユーノは一体どこにいるのか。」

飛び立つた蝙蝠はミイラを中心に放射的に広がる。そして一匹の蝙蝠がターゲットを見つけた。

「見つけた、どうやらオマケも居るみたいだな。」

ミイラは体を霧散むさんさせ、お気に入りのフェレットの元へ移動する。そして、空中を移動していた霧状のミイラは膨大な魔力に包まれる。自らがまったく興味を抱かなかつた桃色の魔力光を持つ少女の一撃により。

偶然とは恐ろしいものである。

高町なのはは屋上で後悔をしていた。あの時、男の子がジュエルシードをポケットの中に持つてゐるのを感じていたはずなのに。

「ユーノ君、わたし・・・」

「good evening. ユーノ、元気にしてたか。」

なのはが何かを言おうとした所で突然ミイラが現れた。二人は現れたミイラの姿に言葉を失つた。

「どうしたんだ、信じられないものを見るような目つきで。」

ミイラは不思議がるが当然である。首から下の左半身が何かに抉り取られたかのように無いのであるから。さらに顔に巻いてある包帯は少し緩んでいた。

「ああこれか、空中を移動してたら桃色の光に巻き込まれてごつそり体を持つていかれたんだ。いや、霧状だからこの場合は蒸発したが正解か。」

その言葉にユーノとなのはは念話をする。

(桃色の光つて多分)

(うん、さつきのなのはの・・・)

偶然とはいえたミイラをこんな状態にしたなのはと殆ど何もしてない
ユーノは罪悪感に襲われる。基本、高町の人とユーノは人が良い
のである。

そんな念話に気付かずミイラはさらに言つた。

「いやー、心臓を別の場所に置いてたから良かつたが、もし置いて
なかつたら死んでたな。いやー、あの威力はすごい、線路の上をな
ぞる者程ではないが凄いよ。」

もしかしたらミイラは死んでいたかも知れない事実を聞き、さらに
二人は罪悪感に包まれる。

そんな風になつていて二人に気付き、ミイラは少女に歩み寄ると笑
いながら言葉を掛ける。

「おいおい、落ち込む事はないんだぞ。えーと、確かなのはだつた
か。あんな一撃はそうそう出せない。まあ確かにあれには驚いたが
それだけだ。体なんて時間が経てば元に戻る。」

落ち込んでいたなのはとユーノはミイラがさつきの一撃について気
付いていたのとミイラが違う話し方で話しかけてきたのに対し驚い
た表情を浮かべる。

「喜べ、俺はお前を認める。」

「えつと、それって素直に喜んでいいのかな・・・」

困惑するなのはに対しミイラはさも当然に答える。

「当たり前だ。ユーノもそう思うだろ。」

「そんなの僕に言われても・・・」

ユーノは困った表情になるがミイラは笑いながら言つた。

「まつ、何回も言つがお前は凄いという訳だ。ところで一つ質問だ
が、なんでなのはは落ち込んでいたんだ？」

その言葉なのはは街の方へ視線を向け言つ。

「街がこうなつたのは私のせいなの。気付いていたはずなのに何も
しなかつた、だから・・・」

明らかになのはは落ち込んでいた。ユーノは声をかけようとして先
にミイラが口を開く。

「「」の街はお前にとつては大切なのか？」

「いつもなくミイラは眞面目な声で質問をする。その言葉になのはは答える。

「うん、私にとつてかけがえのない大切な場所。」

そこでなのはは何かを決意したかのよくな表情になる。

「ジユエルシードを集めてたのは、最初はユーノ君のお手伝いをしたいと思つたから。だけど今は違う、私の意志でジユエルシードを全部集める。これ以上、誰も傷つけたくない。」

「なのは。」

ユーノはただなのはの名前を言つだけだつた。ミイラはそんなんのはの表情を見て目を閉じる。そして再び目を開けると、体をユーノとなのはの方へ向ける。

「俺はお前等を認めた。だから名乗ろつ、俺の名前はミイラだ。」

突然のミイラの自己紹介に一人は目を丸くしてキヨトンとした。

「そんな俺から言わせてもらつが、生き物が取り返しのつかない間違いをするのは当然だ。」

そう言つて、ミイラは右腕を胸の前で横にし、執事のように礼をする。「だから、生き物は学習する。俺が断言する、次は絶対に大丈夫だ。

「その言葉と共に、街からは大量の蝙蝠が次々と発生していく。

「お前の大切に思う場所、お前なら絶対に守れる。」

ミイラが急に立ち去つてなお、なのはとユーノは呆然と立ち尽くしていた。今まで酷い有様だつた街が全て元通りになつていたからだ。そんな様子の一人に走つて近づく人が居た。

「なのはちゃんユーノ君、怪我とかないですよね。良かつた間に合つて。」

最近、翠屋のバイトとして働いている紅美鈴の登場と言葉になのはとユーノは頭に疑問符を浮かべる。

「美鈴さん、慌てちゃってどうしたの？」

明らかに紅美鈴は焦っていた。だが、次の言葉で焦つてる原因が一人には分かつた。

「前に送ったメールに書いた災厄伝承がこの近くに居るんです。だから早く逃げましょ。」

その言葉に一人は紅美鈴を落ち着かせるための言葉を言つ。

「それならさつき会いました。確かにもの凄い力でしたけど、ミイラみたいな変な外見とは真逆の人でしたよ。」

ユーノがそう言うと同時に紅美鈴は首をかしげる。

「誰ですか、その人？」

バリアジャケットとバルティッシュを展開したフェイトはジュエルシードの反応があつた場所に来ていた。街は酷い有様だつた。そしてジュエルシードは発見できなかつた。

「探しましたよ、お客様。さあ、ちょっと避難しましょ。」

声に後ろを振り向くとジュエルシードの情報と寝泊りする場所を与えてくれた情報屋のルシフィイが居た。全く気配を感じることが出来なかつた。

「避難とはどういう事ですか。」

「新しく常連になつたお客様がこれから大変なことをしますので。とりあえず、避難しましょ。」

その言葉と共に、割れた道路から、ひびの入つた建物から、倒れた街路樹から大量の蝙蝠が湧き出してきた。

「あー、間に合いませんでしたね。」

「これは一体なんですか、ルシフィイさん。」

フェイトはルシフィイに質問した。帰ってきた答えは実に単純だつた。

ずっとフェイトはルシフィイを見ていた。見ていてなおフェイトはルシフィイが拳銃をとりだして弾を撃ち出した事が分からなかつた。薄れていく意識を感じて、ようやくフェイトは撃たれたことが分かつた。痛みは無い、まるで麻酔が効いてるかのようだつた。

ルシフィイの声が途切れ途切れに聞こえてくる。

「すみ ん 客 、 僕とし こん 手荒なまねは くな
かつたの すが、まあサー で 。」

そして、前に倒れた。倒れこむ途中、何かに受け止められるような感じがした。

目が覚めた時、フェイトはベットで眠つていた。上半身を起こして周りを見てみる。

「ここには・・・葵井さん？」

ベットの隣りには椅子に座つている状態で眠つている葵井元樹あおいもとしげがいた。そこでようやく気付く、窓から見える外の様子から今の時刻は深夜に達している事に。

「私、確かあの時・・・つづ！？」

気を失う前の事を思い出そうとした瞬間、頭に軽い痛みが走つた。思い出そうとすると何かに邪魔をされるかのようだ。

結局思い出す事は諦める事にして、アルフに念話をかけてみた。

（アルフ）

（フェイト！？ 良かつた、起きてくれて。調子は大丈夫かい。）

（うん、所で今アルフは何をしてるの。）

その言葉にアルフは何の気もなく答える。

（お礼に行ってたんだよ。あの情報屋の人達がフェイトを連れて来てくれたから。）

アルフが帰つた後、情報屋は山猫にジャーマンスープレックスを喰

らわされていた。

「タイムタイム！－、俺本当に戦闘とか好きじゃないから！　話し合いでをおおお！－。」

「ええ、ですから肉体言語も織り交ぜて話してるじゃないですか。お客様に手を出すなんて何考えてるんですか！－！」

すばやく山猫は体勢を変えて十文字固めに入った。

「イタタタタタタタ！－、ギブギブ、頼むから女性が十文字固めをしないでどうかやるならもつと愛をおおお！－」

そこでようやく山猫は情報屋を開放した。

「ハア、ハア、ようやく分かってくれたか。」

「ええ、愛が欲しいのなら道具を持つてきますね。」

「まったく分かつてないよこの人！－、だいいちお客様に麻酔弾を使つたのはお客様を迅速に安全な場所へ運ぶ事であつて、まあ倒れるお客様を抱きとめて記憶を改ざんしたのは新しく常連になつたミイラ様ですが、俺が言いたいのは俺は無実だああ！－！」

「ええ、分かりました。こんなのはどうですか？」

「まったく分かつてないしそれはアカンつて、回転してるつてギャアアアア！－」

その日、海鳴市に悲鳴が轟いたりと轟かなかつたりした。ちなみに山猫と情報屋は今はこんな風であるが付き合つてているのである。今はこんなであるが・・・

ミイラは桃色の魔力光に 小年は少女のやまと黙る（後書き）

妖氣「分からねえ、自分を殺しかけた相手を氣に入るお前の思考回路が分からねえ。」

ミイラ「そうか？」

妖氣「後、もう一つ言わせて貰つがお前の過去つて一体・・・」

ミイラ「それは機密だ。」

妖氣「だから戦闘とかに慣れてるんだな。」

ミイラ「まあな、生きるためにには殺すしかない。そんな場所だ、あそこは。」

妖氣「大変だつたんだな、お前。」

ミイラ「今も大変だよ、まつたく。」

妖氣「次回も続くよ～」

一人の魔法少女が出来立つ一日前

とある病室、少女は毎のお日様を一身に受け昼食を食べていた。慣れない左腕でフォーク使い料理を口に運ぼうと格闘していた。慣れないのなら右腕を使えばいいのだが、その少女には右腕が無かつた。付け足すならば両足も無いのである。

「あつ」

フォークに突き刺されていたミートボールがポロリとベットの上にセツトされてある台の上にこぼれ落ちた。それを見てため息を吐く。「やっぱり、私には左手だけで生活するなんて無理なのかな。」「すまないな、俺のせいだ。」

いつの間に居たのかベットの隣りにミイラが居た。とても申し訳なさそうな様子だった。

「居たんだ葬儀……じゃなくてミイラさん。それと人間には興味が無かつたんじや。」

「何事にも例外はある。まあ、俺も今の気持ちが何なのかよく分かってないがな。」

「?」

「まあ今の気持ちなんてどうでも良いけどな。ほら、フォークを貸してくれ。」

そう言つとミイラは右手を差し出してきた。

「えつと」

「左手じゃ食べづらいだろ、今回は俺が食べさせてやるよ。」

その言葉を聞き少女は慌てて首を振る。

「いこですよそんな、それに今の歳で食べさせてもうつなんて……

「

「渡せ。」

ミイラが低い威圧のある声で言つと素直に左手がミイラにフォークを渡した。

「酷いですよミイラさん、能力を使って細胞を束縛するなんて。」「これ以上束縛されたくなかったら言つ事を聞くんだなと、ほれ、あーん。」

仕方なく少女は顔を恥ずかしそうに少し赤くしながら食べさせてもらひつ事にした。

同時刻 海鳴市

「フェイトさん、これなんてどうですか？」

「これは、ちょっと恥ずかしいかな。」

葵井元樹あおいもとしげとフェイトはショッピングをしていた。なんでも前日にフェイトは気を失った状態で情報屋に運ばれてきて、事情を知らない葵井元樹はその原因をストレスと決め付け、ストレス回復のためにショッピングに行こうと言つたためである。

現在、葵井元樹は服売り場で水色のワンピースをフェイトにおすすめしていた。偶然なのかフェイトの元となつたアリシアが最後に生きていた日に着ていた同じ服装を。

「大丈夫だよ、きっと似合つて。」

アリシアが似合つていたのだから似合つのは当然である。

「そうかな・・・じやあ試しに着てみるね。」

そう言うとフェイトは葵井元樹から服を受け取り試着室に入つた。それを見送り右腕の腕時計を見ながら小声で葵井元樹はカウントをする。

「さてつと、78、77、76、75・・・」

何かを予知するかのように数える。

「33、32、31、30・・・」

そして、試着室を見る視線は真剣なものであった。そして

「4、3、2、1、0」

「似合うかな、葵井さん。」

「よし、すぐに会計に行こう。」

この後、フロイトは葵井元樹から服を買つてもらつた、意外と上物なので高いんだぜ、これ。ちなみにアルフは迷子ですよ。英語で言うと「lost child」である。アルフは年齢的にはまだ子供だからチャイルドで会つてるよね。by情報屋

「店長さん、注文二つ入りまーす。」

翠屋のバイトとして働く紅美鈴はもちろん紅魔館のあの人です。なんで紅美鈴がそこで働いているかというと、早い話が出稼ぎです。紅魔館ではお昼寝ばかりしていた彼女だが、それは仕事があまりにも暇なためである。翠屋のバイトとして働く彼女は、働き者な明るい美人さんである。

「すいませーん、ケーキのお代わり頂けますか？」

お客様の声を聞き注文を承りうけたまわに行く紅美鈴。そしてお客様を見て営業スマイルのまま引き返した。

「あれっ、ちょっと店員さん。」

紅美鈴が引き返すのも無理はない。そこには自称『災厄伝承』ことルシフィ・トロニークスが居たのである。

そもそもこの世界に紅美鈴が来たのはルシフィの紹介あつてだが、この世界に来るあたりちょっとした代償があり、そのせいで紅美鈴はルシフィを危険人物と判断してるのであつた。

そんな訳だがやはり仕事なので、何とか気を取り直した紅美鈴は注文を取りにルシフィの所へ行つた。他のバイト仲間に頼めば良いのに・・・

「ようやく戻つてきたな。こんな場所で悪いが仕事の依頼だ、この紙に書いている場所へ今夜九時に来て貰いたい。あとケーキはお任せで同じのを二個お願ひする。」

「かしこまりました、ショートケーキ二個でござりますね。」

紅美鈴はそう言つと紙を受け取り注文のケーキを取りに行く。結局、紅美鈴は災厄伝承に逆らう事はできない。逆らうと取り返しが付か

なくなる、今はただ従うしかない、そう、今だけは・・・
そんな彼女を見ながら災厄伝承は誰にも聞こえないようにボソリと
呟く。

「従うのは別に構わないが、少しは牙を剥いて貰いたいものだ。」
そつ言づルシフイの表情は少し寂しげだつた。

時間は過ぎ、夜の二時を迎える。大半の人間は眠る時間ではあるが、夜に生きる人外の存在にとつては一番の活動時間である。特に現在、海鳴市に存在する妖怪と吸血鬼はそれぞれの場所で我が物顔で力を行使する。

「聞いてねえぞ、何で三面のボスがこんなに強いんだよ！？」

紅美鈴は公園にてルシフイの依頼を遂行していた。自分勝手に原作を壊していく転生者の捕縛、それが依頼内容だつた。

「残念ながら私は紅魔館では力を抑えていたので、もし弱い方の私と戦いたかつたらその世界に行つてください。」

そう言いながら紅美鈴は約束された勝利の剣を正面から弾き飛ばす。どうやら相手の転生者はFateの作品を使つようだが、驚くべきことに紅美鈴はそれを全て防いでいた。

そして、次の瞬間には相手の懷に入り強力な拳を突き出す。

「我が八極に二の打ち要らず！ これで終りです。」

「は！？ ちょっと待つた！？」

転生者はすぐに防ごうとしたが遅かつた。

「霸アアアアア！！」

无一打、一の打ち要らず。言葉の通り一撃で相手を倒す拳。李書文が最初に成し得た殺しの技であり、八極拳を会得している紅美鈴にとってはいとも容易く再現できる技であつた。

そして、転生者は地に沈む。

无一打、一の打ち要らず。その言葉通り、転生者は一度目の死を迎

えた。

「あつ、やつちやつた。」

本来は捕縛のはずなのに紅美鈴は転生者を殺してしまった。本来なら焦る所なのだが彼女は焦らなかつた。

「仕方ない、せえのつ！！」

転生者の心臓目掛けて踵かかとを振り落とすと衝撃により転生者は蘇つた。アバラ骨折及び内臓損傷の重傷で。

「俺は、映姫様に会つて、改心、しました。」

意識はハツキリしてゐらしい。

「そうですか、じゃあそろそろ貴方を引き渡さないといけないので行きますよ。」

紅美鈴が転生者を抱え上げようとした、けよひびその時、光が消えた。

『汝、汝を殺した者をどうするのだ。』

街中のビルの屋上、タバコを一服していたミイラに対し名前の分からぬ誰かは頭の中に直接話しかけてきた。

「さあな、介護士の免許は持つてないが面倒を見るのも良いかもしれないな。」

そう良いながらフィルターぎりぎりまで吸い切り、吸殻を霧散させた。

「まあ、成り行きに任せるとしかないな。俺は昔から何も考えず、言われた事に従うだけだつたからな。今は違うがな。」

『汝、もしこの先にあるのが苦と悲しかない場合、過去のように成り行きに任せるとか、それとも今のように抗うか。』

その言葉にミイラは悲しそうに薄く笑いながら答える。

「どうだろうな。俺は死を多く見てきた。そのせいでもあるが、殺しを正当化するために俺は人間に対する興味を失くした。いや、俺はあの時逃げた。その瞬間からかもしれない。」

思い出すのはありふれた悲劇の過去、仕組まれた殺人劇。
マーダーショー

「胸糞悪い。もう一本吸うか。」

そう言いタバコをもう一本取り出そうとして、屋上の扉が開く音と共に獣のような叫び声が聞こえた。その声は人の言葉でこう言っていた。

ミイラはその声を聞き流しながらタバコを取り出し火を付け口に咥えた。

「ふう、美味い。」

煙を吐き出すと共に後ろを振り向くと「はよく燃えるような綺色の髪の美少女がいた。歳は十三だろうか。その少女はボロキレみたいなのを身にまとっているだけだった。

その瞬間ミイラのタバコを咥えていた右腕は消えた。そのミイラの隣りでは美少女がミイラの右腕を噛み砕き美味しそうに咀嚼していった。そこで気付く、ボロキレの隙間から見える太股の部分に銃痕があることに。

「ああ、あの時の。食鬼人になつたんだ。」
右腕を喰われたのにミイラは平然と立つていた。

「じゃあ、俺はお前に興味が無いからそろそろ行くよ。じゃあな。」「ついに立ち去りつとしたミイラの首を腕を喰い血に塗れた少女は

「そろそろ行くよだあ？ 地獄に落ちるって意味かあ？」

悪意と殺意に顔を歪ませて少女は笑いながら言う。少女はもう正気ではなかつた、多くの吸血鬼を喰らい力を得るうちに心が歪んでい

つた。昔は復讐で動いていたが今は復讐に加え『喰いたい』の一心で行動していた。ミイラはその事を『鏡獄』の能力により今知った。

「興味ない。」

そう言い捨てると次の瞬間、海鳴市全ての電気が消えた。今日は曇りのため月の光も無い。本当に何も見えない状況になつた。

「発電所を潰してなんのつもりだああ葬儀屋ああ、食鬼人は気配で吸血鬼の居場所を知る事が出来ることを知らないのかああああ？」
「そういい終えた瞬間、少女の右手から掴んでいた物の感覚が消えた。
「いや、潰してない。そこで働いてる人を操って電源をオフにしただけだ。それと、終りだ。」

その瞬間、全方向からミイラの気配が膨れ上がつた。そう、海鳴市全体からミイラの気配が少女を包囲するかのように。

「なあに！？ なあにこれえ？ なんで分からぬの！？ なんでえええ氣配がああはつきりしないのおおおおお！？ 大きいのになんでえ！？。」

途中から蝙蝠の羽音や狼の唸り声（うな）が全方位から聞こえてきた。

「ちなみに、お前は助けは呼ばないと思うが一応言つとく。この街の人は全員空気感染で俺が操つてるか眠つてるかの一通りだ。例外として三人いるが期待はするな。」

そして、ミイラが指をパチンと鳴らすと共に今まで少女を包囲していた蝙蝠と狼が一斉に襲い掛かつた。混乱する少女はなすすべも無く、そのまま獸の大群に飲み込まれた。

「喰い、たい。喰いたい。早く、喰わないと頭が、頭が、うがああああがあひやあひやああ。」

大群に飲み込まれた少女は傷だらけになり横たわっていたが生きていた。ミイラは少女に近寄ると自らの体から生み出した蝙蝠を少女に差し出した。

「あつ・・あつあ。」

「お前はもつ人間じゃない。哀れなものだ、喰いたいんだろ吸血鬼を。」

「良、いの、あひや、たべ、食べて良いの。」

「ああ、喰え。」

その言葉を聞き、少女は蝙蝠を弱々しく手に取り、食べなかつた。

「どうした、食べないのか。」

少女は泣いていた。悔しそうに泣いていた。

「食べたい、あひや、食べたいけど、悔しい。お姉ちゃんを、うひゅ、殺した奴から同情されるのが悔しい。何より、貴方が優しいのが悔しい。なんで優しいのに、ひやひや、お姉ちゃんを殺したの。ミイラは認めてない人間以外には興味を持つ。だからミイラは答える。」

「・・・依頼だった。ただそれだけだった。すまん。」

「そんな、あひやひや、そんな理由で、ふひやつひや、お姉ちゃんは死んで、私は化け物になつて、ひや。」

少女は泣きながら笑っていた。ミイラはそれを黙つて見ていた。

夜が開け、海鳴市の人々は異常に気付かずに次の日進む。これが、なのはとフュイトが初めて出合つ前日の話であった。

一人の魔法少女が出来たー日前（後書き）

妖氣「なんか空気感染で街が大変なことになつてる。」

ミイラ「時間さえあれば日本全土を感染させる」とが出来るがどうする。」

妖氣「いや、止めとけ。それと、紅美鈴が強いのは氣にしないでね。」

「

ミイラ「誰に言つてるんだ？」

空気感染

自らの血液を空気中に蒸発、散布する事で一般市民はおろか動物さえも操る事ができる。

制限は無し。

また、感染された当人は自覚しない。

妖氣「さて、お前はあの少女をどうするんだ。」

ミイラ「病院の方か、それとも緋色の髪の方か？」

妖氣「どっちもだ。」

ミイラ「わあな、どうなるんだろ？」

ミイラの想い 小年の想い

とある邸宅の林の中、じつそり巨大な猫の毛並みを触りながらミイラは一人の少女の闘いを見ていた。といつても、金髪の方が優勢であるのは一目でわかるが。

「俺は一体何をしたいんだろうな・・・っておわつ、猫、重!?」
勝負は決まったようだ。巨大な猫が少し動き、そちらに目が行ったのはミイラが猫の下敷きになつたのを見てピシリと固まり、その事情を知らないフェイトにより一撃を入れられた。

そのまま気を失い落丁していくのはをユーノは魔法を使い受け止めれる。

一撃を入れたことに罪悪感を感じながらフェイトはジュエルシードを回収しようと猫に近づこうとして言葉が聞こえた。

「みーんな、そうそう今まで気になっていたんだ、なんでお前は空気感染に掛からないか。」

後ろを振り向くと、いつの間にか灰色のミイラが空中に滯空していた。

「つづ!?」

初めて会うはずなのにどこかであつた気がする。そう思い、記憶を探ろうとすると頭に激痛が襲ってきた。

「無理に思い出さないほうがいい。余計頭が痛くなるだけだから。そんなフェイトの状態を知つていふつな口ぶりでミイラはタバコを取り出しながら言った。

「まあ、そういうことだ。じゃあ俺は忙しいから近いうちにまた会おう。その時に空気感染に掛からない理由も教えてもらひつかう。」
先程まで猫を触っていたくせに、ミイラはそう言つて立ち去つたとする。

「待つて、貴方は一体。」

その言葉に立ち止まつてミイラは悲しそうに答える。

「やりたい事が決まらない優柔不斷な卑怯者な吸血鬼だ。」

そして今度こそミイラはタバコを吸いながら立ち去つた。

「にしても自分で願つておきながらいつのもなんだが、俺の姿つてなんだ。」

「はいはい、職務質問にきちんと答えてください。」

邸宅から出て五分、ミイラは警察から職務質問を受けていた。

「それで、その全身包帯だけの格好は何ですか?」

「人間には興味が無いんですけど。」

「つまり現実逃避の成れの果てですね。」

次からロングコートでも買おうかなと思いながらミイラは包帯の上から頬をぽりぽり搔いていた。

「まあ、そうなりますね。」

警察はため息を吐きながらミイラに注意をする。

「今回は注意だけで終りますけど、次もその格好でいる場合は署までちょっとご同行願いますよ。」

「あ~はい、分かりました。次は気をつけます。」

素直に聞き入れたミイラの言葉を聞き、警察はパトカーに乗り去つていつた。

「次は署か、身分証明書が無いからどうしようか。」

ため息を吐きながら、ミイラはロングコートを買いに行く。

「そういえば、あの金髪の女の子の服装は大丈夫だろ?」

『汝、汝の姿よりはまともである。』

『ごもつともである。その答えを聞き苦笑いしながらミイラは一本目のタバコを取り出した。』

（なんなんだうね、そのミイラみたいな奴は。）

（うん、ジユエルシードが田当てじゃないみたいだけど。けど、最後に悲しそうな目をしていた。）

「夕飯が出来ましたよ、今日はボルシチですよ。
念話で話し合っていたフェイトとアルフの元へ葵井元樹あおいもとしげが夕食を運んできた。

「それにしても、子猫が巨大になるなんて何でもありますね。ジユエルシードって。」

そう言いながらライスにボルシチを盛つしていく。

「うん、でも大丈夫。あの子猫は元に戻したから。」

その時に名前も知らない女の子を攻撃した事はさすがに言えなかつた。

「さすが魔法少女。俺なんか魔法が関係してなくとも救えない事ばつかだよ。」

そう言う葵井元樹の表情は少し悲しそうだった。その表情が何故かミイラの悲しそうな目と重なつて見えた。

そんな悲しそうな表情の葵井元樹に対してもフェイトとアルフはすぐには言葉をかけた。

「そんな事ないよ、葵井さんのおかげで私は今まで頑張れて来れた。もし葵井さんが居なかつたら私は挫折していたと思う。」

「そうそう、フェイトの言うとおりだよ。それに今だつて美味しいご飯を作ってくれてるし、掃除や洗濯までしてるじゃないか。それだけで充分だよ。」

その言葉を聞き、葵井元樹は驚いた顔をしていたが、次には笑つていた。

「そうか、良かつた。俺でも救えるものがあつたんだな。よし、気分が良いから明日の夕飯は期待してくれよ。」

その言葉にフェイトとアルフは顔を綻ばせた。その表情を見て、葵井元樹は思つ。

どんなに救つても遅いんだ。俺は大切な人を救えなかつたから・・・

ミイラは情報屋の店で服を買つていた。

「なあ情報屋、仏舎利を使ったロングコートと天使の羽を使ったロングコートではどちらが耐久性があるんだ。」

「着てみれば分かりますよ。」

「そうことなので真つ白な天使の羽を纖維として作ったロングコートを着てみた。やはり天使の羽製の聖なるロングコート、体が焼けるようになつた。」

「なあ、これつてもしかして人間用か?」

「うううう、それ人間用。貴方みたいな吸血鬼とかの魔の者が着たら体が焼かれますよ。」

「その言葉を聞き情報屋に紅魔館から盗んだエメラルドを投げ渡す。仏舎利の方は着なくとも結果は分かるので試着しない事にする。」

「代金はそれで足りるだろ。」

「そう言つとミイラは真つ白なロングコートを真つ白な蝙蝠に換えて、灰色なロングコート、否、ゲームやマンガの主人公が着る様な灰色の神父服に作り変えて体に纏つた。

「驚いた、まさか天使の加護だけを残して作りえるとは・・・。」

「こんな事、俺の力ならば造作もない。」

「ちなみにその神父服は写真を撮らせてくれないか、業者にデザイン案として送りますから。」

「そう言つと、どこからともなくデジカメを取り出してきた。」

「好きにしろ。その前にもう一つ、についての情報はな
いか?」

「いやいや、それはさすがに取り扱つてませんよ。まあ、良いカウ
ンセラーの情報なら提供できますが。」

そしてシャッター音が部屋の中に響いた。

情報屋の店から出たミイラはそこでようやく時刻が夜になつてゐるに気がついた。

「夜か、さて月はどこだ。」

灰色の神父服を着たミイラは上を見ながら歩いていく。そして見つけた。今日は新月だつた。

「新月か、僅かな月の光というのも良いものだな。そう思ふだら、なあ。」

ミイラが語りかけるように言つとミイラの背中からビクリと体を震わせる物体があつた。

「なんで、なんで刃が通らないんだよー！」

その物体はナイフを両手に持つて心臓に刺そうとしていた10歳位の少年だつた。

「この神父服は特注品だ。絶対防護防刃防弾防炎防電の効果がある。そんなちやちな物じや俺を殺せないぞ、ドッグナ犬人種。」

その少年は犬のような耳と尻尾が体に付いていた。

「大方、俺に大切な人を殺されたからその復讐か？」

ミイラはそう予想して、小年に質問した。緋色の髪の少女の時もそうだったが、基本ミイラの命を狙う人はミイラに対して復讐を誓つた人かその依頼を受けた人である。

「そ、そうだ！！葬儀屋、お前のせいで俺たちは、俺たちは！？」

犬人種と言われた少年は驚いていた。なにせ優しく包み込むようにミイラは少年を抱きしめていたからだ。

「本当に、俺は何がやりたいんだろうな。病院に居る彼女の面倒を見たい、緋色の髪の少女をまともにしてやりたい、今だつて君を抱きしめてるし、俺のせいで虐げられた君達に償いたい。優柔不断だな、俺は。」

「何を言つてるんだ、お前。」

あまりの出来事に少年はナイフを突き刺す事が出来なかつた。

「 なあ、俺は転生して自由になつた。だがその自由が辛い。転生前のただ命令を聞いて人を殺す日々が本当に恋しい。けど転生して自由になつてから俺は俺のせいでもともな道から外れた二人の人間に会つた。俺のせいでも虜められる事となつた犬人種の少年と会つた。」

ミイラは泣いていた。本当に悲しそうに、悲痛な声で。

「 俺は辛い。昨日まではこんなに自由に考え、自由に思う事が辛いだなんて思わなかつた。タバコを吸つて気を紛らわせようとしても無駄、情報屋に行つても買えるのは情報と装備品だけ、少女と使い魔と会話しても気が晴れない、最初はあいつを殴るだけで充分だつた。なのに、俺は、俺は」

何も求めてなんか無いんだ。

ミイラは言葉に出さずに自分と力を与えてくれた奴に向かいそう言った。

ミイラの想い 小年の想い（後書き）

妖氣「・・・、今日はミイラさんが留守なのでユーノ君に来てもらいました。」

ユーノ「妖氣さん、後ろからバインドかけて・・・」「はどこですか。」

妖氣「気にしない気にしない。それよりユーノ君は今回のミイラをどう思いますか。」

ユーノ「まさか泣くとは思いませんでした。少し以外でした。」
妖氣「だよね」。俺ですら驚いてるからな」。

ユーノ「それで、ここはどこなんですか。」

妖氣「まあまあ淫獸、その質問は後書きが終つてからね。」

ユーノ「淫獸！？ それどういう事ですか！！」

妖氣「気にしない気にしない。」

ユーノ「うう、僕つてみんなにどう思われてるんだろう・・・」

妖氣「では、次は犬人種についての解説です。」

犬人種
ドッグナ

犬の耳と尻尾を持つ種族。

するどい五感を持ち、足の速さも人間を軽く凌駕する。

葬儀屋により大半の犬人種は今、奴隸として扱われている。

ユーノ「確かに今は犬人種の人権を訴える団体が沢山できてて、色々な世界で社会問題にもなりましたよね。妖氣さん。」

妖氣「そうだな、ちなみにミイラは騙されたんだよな。ある人を殺せば犬人種は救われると。実際はその人が保護活動をしてたのに。」

ユーノ「ミイラさんつて本当に認めてない人間以外には優しかった

んだ。
」

海鳴温泉 ミライは決意と自分のルールを口にする

「今頃、フロイトさんとアルフさんは温泉で楽しい思い出でも作ってんだけれどな~。」

葵井元樹はフロイトとアルフの滞在している部屋を掃除機で掃除していた。何故か楽しそうである。

「掃除、洗濯お料理と、気付けば今田は晴れ模様ひとつと一つの最上川。」

即興で歌いながら掃除を進めていく葵井元樹。

「虹鱒^{にじます}」釣れれば食費は安くなる^つひとつと北上川。」

もはや歌の内容は意味不明である。

午後 海鳴温泉

（忠告しどくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。おいたが過ぎるとガブツといくわよ。）

アルフはなはとコーノに念話で脅し文句を言っていた。

（お姉ええさんもガブツてえするのおおおお~）

異常な声質に驚いてなのはの後ろの方を見ると、向こうには、長くて美しい緋色の髪の13歳くらいの少女が旅館の浴衣を着て立っていた。

（誰だい、あんた。）

アルフは強く睨みつけながら質問をする。アルフと緋色の髪の少女の念話会話なので、なのは達から見ればアルフが自分達の後ろの方にいる少女を睨んでいるように見える。そのままだが。

（あたあしいいの事なんてえどうでも良いでしょおおお。）

そう言うと少女は薄く笑いながらその場から立ち去った。アルフはその少女を追いかけると同時にそれは達にも声をかける。

「じめんねえ、あそこに居た子がうちの子に色々やつてくれる子だつたよ。じゃあねつ。」

アルフが去つた後、アリサがアルフに対して文句を言いまくったのは言つまでもない。

あの日から俺に語りかけてくる奴の声が聞こえなくなつた。

あの日から俺は、ある夢を見るようになつた。

あの日から俺は大切な人と他愛も無い日常を過ごしていった頃の夢を見るようになった。

あの日から・・・

あの日から・・・

あの日から・・・

そして今日から

俺は葬儀屋の自分を葬儀屋として葬儀屋だからこそ葬ることにした。

俺は転生した。だから俺は葬儀屋を廃業しよつと思つ。吸血鬼として圧倒的な力で様々な『モノ』を殺すのではなく、誰も殺さず、ただ長い間、干^{ひかわ}びた状態で時をまたぎ、たまに魂だけを潤^{つるお}つた状態にして行動をするミイラとして、俺は生きていこうと思つ。

「葬儀屋あああ、温泉がいいいい湯がああげんだったよおおおお。」

「もむもむ、葬儀屋なら何処かに行つたよリュネちゃん。」

部屋を開け奇声を上げる少女の声に応えたのは、灰色包帯神父服の

ミイラではなく、つい最近ミイラに後ろからナイフを刺した犬耳尻尾の少年もとい男の娘だった。

犬耳尻尾の少年は旅館の浴衣を着てトウモロコシを食べながら外の景色を楽しんでいた。

「そおおなあああああんだあ。行くとおおおきにいいなあにか言つていたあああ？」

その質問に少年はトウモロコシを食べながら答える。

「もむもむ、葬儀屋にやら寄が来たつて言つていたよ。」

「？ にやら？ 今ああ噉ああんだあ？」

リュネといわれた少女はその言葉を言つと、少年は顔を赤くして可愛らしく唸りながらトウモロコシを食べるスピードを速めた。

ミイラは理解していた。もう氣付かれていると。俺が転生したこと

が簡単に氣付かれていると。

「葬儀屋、上からの命令だ。今すぐ組織に戻れ。拒否権は無い。」 林の中、特殊部隊のような男達が連射系の銃器を持ちミイラをぐるりと囲むように立つっていた。

「いいのか、基本ばれないようにしていいる組織。俺一人のためにこの人数、時空管理局に組織の存在がばれるぞ。」

ミイラは冷静に神父服のポケットに両手を入れて立つていた。

「葬儀屋、我々はただ与えられた任務を昔の貴方のように遂行するだけだ。我々は人形、逆らう事はしないただの人形だ。」

「俺はやることを決めている。葬儀屋は廃業する。組織の十二番目の実力者《死を運ぶ者》という地位も要らない。これからは最高の実力者《希望を与える者》に十二番目が誰になるかを決めてもらえ。」

「これ以上話す事は無い。ミイラはそう決めるとポケットからタバコとライターを取り出した。

「残念です。貴方だけが死の線や点が無い不老不死を殺すことでの

きる貴重な存在です。殺しはしませんが武力を持つて貴方を捕縛します。」

その言葉と共にミニアラを囲む男達は銃を構え、鉛の嵐を作り出した。

「意味性の崩壊^{ガシユタルト・ブレイク}、君の力は素晴らしい。手で触れたものを壊すと感じただけで壊す事のできる。直死の魔眼など見劣りするほどのものだよ。」

白いスーツを着た初老の男はようやく欲しかったものが手に入った子供のように笑いながら目の前の十一歳の男の子を見ていた。その男の子は初老の男に興味が無いようで、何の感情も無い瞳で一枚の写真を見つめていた。

「君は今日から我々、『夢の世界』の一員だ。^{ホーフレス・ワールド}」

「人間には・・・興味ない。なあ、知ってるか。死体つて美しいんだ。死体は生きた証、唯一嘘をつかないんだ。」

右手に持つ家族の写真を握りつぶしながら葬儀屋になる前の小年はその瞬間、誰に向けるでもなく言う。屈託の無い笑顔で。

「死に方が語っているんだ。そいつがまともなのか狂つてるとか、大切に思われるのか恨まれてるのか、幸せだったのか不幸だったのか。だから美しいんだ、死体というのは。」

その言葉を聞き初老の男、最高の実力者《希望を与える者》は笑いながら言つ。

「小年よ、楽しみだ。なら作り出してくれ。君の美しいと思つものを君が死ぬまでずっとな。」

「美しい、本当に死体は美しい。赤に彩られる体、開花する頭、溢れ出す臓物。これが生きた証、生命の生きた証だ。もつと見せてくれよ、なあ！！」

林の中、そこは一面が赤一色になつていた。返り血を浴び続けた葬

儀屋は冷めた心で興奮していた。

「なあ、そうだろ。誰か返事してくれよ。俺が馬鹿みたいじゃないか、こんなに美しく彩っちゃってさ。」

周りの死体は一言も喋らない。葬儀屋は空を見る。空だけは青く染まっていた、ミイラとは対称的に青く青く。

「いつもいつも誰も答えないでさあ・・・誰か教えてくれよ。俺の作った死体は美しいのか。誰か教えてくれよ。他人が作った死体なら俺が教えるからさあ。俺が作った死体を誰か評価してくれよ。頼むよ、誰か・・・」

葬儀屋はただナイフを持ち空を見て、冷めた心で興奮しながら涙を流した。

「葬儀屋、何のつもりだ。」

相手の言葉にミイラはタバコの煙を吐き出していた。神父服は絶対防御なので衝撃だけが伝わり一発も体を貫通していなかつた。

「俺には自分が決めたルールがあつてな、必要が無い時は死体を作らない。自分が作った死体に対しては絶対に興奮しない。そんなルールだ。」

そう言うと、タバコを吸い、また煙を吐き出してから言葉をつむぐ。「自分が作った死体は誰も評価できないからな。そんなの、ただ虚しいだけさ。」

「我々は人形だ、そのような難しい事は何も考えない。葬儀屋、最終警告だ。迅速に組織に戻れ。」

タバコを吸い切り、吸殻を右手で握りつぶし、また右手を開くとそこには一匹の蝙蝠が眠るように羽ばたいた。その蝙蝠は空中の一定の場所で留まると、次の瞬間には破裂し、霧散した。

その様子を見てミイラを取り囲む男達は一瞬で何処かへ転送された。

「空気感染・・・モドキ。」

ミイラはポツリと呟く。彼らはミイラに対して対策をしてきたみた

いだが、空気感染はミイラの血液を蒸発させて発動させる技である。たった今破裂して霧散したのは蝙蝠になつたタバコの吸殻であつた。「・・・次は同じ手は通用しないだろうな。まったく、今回の作戦の指揮をしてる奴は絶対に嫌な性格のタイプだ。俺が人間以外には優しいのを絶対知つての人選だ。」

今回の襲撃者は全員男だったが、一貫してある特徴がある。それは全員が背中から歪な七色の透明感のある羽が生えていた。それはまるでトンボの羽のようだつた。

「飛べない蜻蛉達の集団か・・・奴らも俺を引き戻すのに必死とうことか。」

ミイラは深いため息を吐き旅館へ足を向ける。

「どこで俺が転生した情報を手に入れたかは知らないが、こんど情報屋に奴らに対する対策を含め相談するか。それと・・・」

そう言いながら、懐から玩具の拳銃を取り出し、ある方向に一発だけ蝙蝠《弾丸》を撃ちだす。

「いつからそこに居たのかは知らんが、隠れるのは止めた方がいいんじゃないか。」

そう言つと、その言葉に葉っぱ生い茂る木の中から金髪の少女、フェイ・テスター・ロッサがゆつくりと地面に降り立つた。

フェイトの両手にはバルディッシュが握られていて、警戒の色が強くうががえる。隙あらば一撃叩き込む、そんな様子であつた。

そんなフェイトにミイラは玩具の拳銃を構えた状態を保ち、優しく笑いながら言つ。

「met・また会つたな。まあ・・・俺に攻撃をするという考えは止めた方がいい。白い魔道師を倒した腕はそこそこ認めるが、君では力不足だ。俺には勝てない。」

「met・また会つたな。まあ・・・俺に攻撃をするという考えは止めた方がいい。白い魔道師を倒した腕はそこそこ認めるが、君で

は力不足だ。俺には勝てない。」

フェイントは当然の如く警戒をしていた。警戒しない方が可笑しいのだが。

「……貴方も、あの人達もジュエルシードが目当てなのですか。ジュエルシード探しをしているフェイントにとっては重要な問い合わせである。相手の返答次第では戦闘は避けられない。

その事を理解してか、相手は優しく笑いながら答えた。

「石には興味ないが、必要なら集める……という程度だ。俺は集めないから安心しろ。それとあいつらも同じだから。」

その言葉にフェイントは一瞬、安堵の表情を浮かべた。

「だが、先程のやり取りを見られたのは見逃せないがな。」

そう言いつと、ミイラは玩具の拳銃の引き金に力を入れる。フェイントの顔がこわばるが、弾は出なかつた。

「なんてな、冗談だよ。それより一つ聞きたいが……」

そこで、相手は真顔になり一つの質問をする。

「俺の蝙蝠からの目がおかしくなければ、こちらの連れと戯れてる獣つ娘はお前の連れか？」

「ふえ？」

いきなりの質問にフェイントは間の抜けた言葉を出した。

その頃

「どうしてこうなったんだろう。」

犬耳尻尾の少年、リリオは使い魔と食鬼人^{アルフ リュネ}のぶつかり合いを見ていた。卓球のぶつかり合いを……

「おねえええさああああん。なあかなあかだねえ、びっくりしちゃああうよおお。」

「軽口を叩けるのも今のうちだ。私が勝つたらあんた達が一体何なのか教えてもらひよーー！」

「出来るのをおおおお？おねええさああんに出来るのおおお？」

アルフのスマッシュにリュネもスマッシュで返す。もはや玉は卓球台に落ちず、残像すら残すスピードで返しあっている。

「もはや卓球じゃないよ、うう。」

リリオの言葉は一人には届かない。そもそも急に部屋にアルフが入ってきて何故卓球勝負になつたんだろう。

「葬儀屋あ、早く来て何とかしてよお。」

リリオは泣きたくなつてきた。他の旅館客の視線が痛い。その視線に同情するかのように一匹の蝙蝠がリリオの肩にとまつた。

この五分後、ようやくミイラと一緒に旅館に入る予定の無かつたフエイトがやつてきた。その時にリリオはこう思つた。
(あれつ、葬儀屋と一緒に来た少女、なんで人間なのに優しく接つされてるんだろう?)

いつものミイラはほとんどの人間に對しては興味がなく、ほぼ無視したりするのに今のミイラは明らかに違う。こことなしか優しい雰囲氣すら感じられた。

(何があつたのかな。)

リリオはそう思うが、彼は知らない。実際には何も起きてないと。何も起きてないのにミイラは優しく接していた。

海鳴温泉 ミイラは決意と自分のルールを口にする（後書き）

妖氣「なんでフェイトに優しく接してるんだ？クローンでもお前に
とつては人間だろ。」

ミイラ「そうだな、しいて言うなら俺の氣まぐれだ。」

妖氣「そうか、言いたくないのか。」

ミイラ「まあな。」

妖氣「じゃあ、その話は置いて、解説コーナーに行きましょう。」

アン・フライ・ドラゴン・フライヤーズ
飛べない蜻蛉達の集団

背中にトンボの羽が生えた種族で作られた部隊。

トンボ人種

背中にトンボの羽の生えた種族の総称

恐れるべきは、羽が生えてる状態ではなく破れた状態のときである。
羽が破れると飛べなくはなるが、新しい羽が再生されるまで自我を
失い

筋力とスピードが格段に上昇し相手を狂ったように攻撃する狂人モ
ードになる。

なお、シルバー族だけは羽が破れると体が痙攣し、まったく動けなくな
くなる。

その特徴のためシルバー族は犬人種ドッグナーと同じ奴隸扱いである。

ミイラ「それで、おれにこの解説を聞かせてどうしようと。」

妖氣「とくにどうもしないよ。これは読者様の為に書いた解説だか
ら。」

ミイラ「（・・・シルバー族か。）」

妖氣「なんか言つたか？」

「みんな、死なせてしまって。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終つて」

守つきれないなら、守らなければいい。

少し前までの俺ならそう思つていた。

なあ、教えてくれ。

なんで俺はこんなに変わつてしまつたんだ。
やはり考える事が出来るようになつたからか？

なあ、教えてくれ。

目の前で知り合いが死んだ時、俺は頭が真つ白になつた。
真つ白なはずなのに、俺は冷静に動いているんだ。
やはり葬儀屋としての俺がまだ生きているのか？

なあ・・・教えてくれ。

なあ・・・答えはどこにあるんだ。

「みんな、死なせてしまつて。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終つて」

海鳴市 某所

情報屋ルシフィの元に部下からの一枚の報告書が入ってきた。

「転生者が海鳴温泉にてトンボ人種の集団と接触、転生者はトンボ人種達を撃退した後、偶然そこに現れた少女と接触、仲良くなるつと。」

そして一枚目を捲ると、情報屋は深いため息を吐きながら外へ向かう。

「山猫、これから仕事に行つてくる。留守番を頼んだぞ。」

「分かりました、お気をつけて。」

そして、情報屋は海鳴温泉へ向かう。

一枚目の報告書にはこう書かれていた。

ホーブレス・ワールド
夢の世界の元幹部、葬儀屋に対し復讐者達は襲撃をかける模様。また、葬儀屋と和解した少女と小年も襲撃の対象となつている。この襲撃が実行される場合、旅館の宿泊客及び従業員の多くが死亡するものが予測される。

決行は夜。人数は四十七人。武装は衛星ミサイル。

「ねえ、あの人凄い格好だよ。」

旅館の中を歩いていたのは、アリサ、すずさの三人は、アリサの声にある一点を見た。

その人は椅子に座り深くため息を吐いていた。

その人は灰色の神父服に顔には右目以外を灰色の包帯を巻き、セミロングを逆立てたような髪形をしていた。

その人を見たなのはとユーノはがつちりと固まつてしまつた。

そんなんのはとユーノに気がついたミイラは足早に立ち去った。下手に声をかけて話をややこしくしない。一応ミイラは空気が読める方だった。どつかの執務官と違つて……

「へふしつ。」

「どうしたの、クロノ執務官？」

「いや、誰かに悪口を言われたような……」

（ユーノ君、やつきの女性といにミイラさんといい、何か起じるかも。）

（僕もそう思つよ、なのは。）

「どうしたの、なのはちゃん。」

すずかの問いかけになのはは顔を無理に笑顔にして答える。

「ううん、何でもないよすずかちゃん。」

「なのは、顔が引きつってるよ。」

当然、アリサに突つ込みを入れられた。

なのは達から足早に立ち去つたミイラは自分の宿泊している部屋に戻ってきた。

「フルハウスだよ！』

「ロオオイヤアルストオオオレントフリッシュュウウウウ！」

ミイラは扉を閉めて何も見なかつたことにした。

さて、タバコを買いに行くか。別にアルフとリュネが激しいポーカーでぶつかり合い、その衝撃がリリオに当たり流血沙汰になりフェイトがオロオロしているを見て面倒くさいと思つた訳ではない。たぶん……

というわけでタバコを買いに商店に行つたのだが、なぜかタバコは全て売り切れていた。

「まあ良いか。」

ミイラはそう言つと立ち去つとした。そこへ、一人の男が現れた。

「お客様、ここに居ましたか。」

「ん？ ああ、情報屋か。いい所にきた。タバコと俺が転生したのをリークした奴の情報が欲しいのだが。」

すっかり情報屋を認めたミイラは情報屋に商品を買おうとしたが、情報屋は真面目な顔で話を切り出した。

「今夜、貴方を狙う復讐者達がこの旅館を襲撃します。」

「・・・その話、詳しくお願ひできるか。」

「ええ、もちろんです。」

そして、二人はミイラの泊まる部屋に来た。そこでは相変わらずな光景が広がつていた。

「貴方は私いいには絶対にい勝てなあい！！」

「もう一回、もう一回だ！！」

「うう、頭が痛い。」

「アルフ、もう止めた方が。」

騒がしい部屋、ミイラは四人に対し口を開く。

「静まれ。」

いつものミイラと違う、低く重圧のある声で、四人とも魔法に掛かつたかのように静まり返つた。

「細胞と魂の両方から束縛をかける、なんとも凄まじい技で。それとお客様・・・この場合テスタロッサ様、ジュエルシード集めは渉^{はがど}りますか。」

「――」

突然の情報屋の登場にフュイトとアルフは目を見開く。

「情報屋、お前の顧客って幅広いな。まあ、それは置いておいて、じゃあ二人とも、この情報屋の人と重要な話しがあるからちょっと外へGOしてもらひ。」

そうミイラが言うと、フエイトとアルフの一人は体が勝手に動くかの「ごとく部屋から出て行った。フエイトとアルフは何で体が勝手に動くのか分からぬので、ミイラは後で能力の説明をしてあげようと誓つた。

「そういうえば、お二人は復讐のためにそこのお客様の命を狙つていたんですね。」

ミイラと情報屋が重要な話を終らせると、情報屋はふと少年と少女に質問した。

「そおおうだよお。」

「うん、そうだつた。」

その返答に情報屋は質問する。ミイラはそそくせと部屋を退出する。

「じゃあ、なぜ一緒に居るんですか？」

二人はそれぞれ答えを返す。

「葬儀屋があ、私と一緒にいいい、おねえちゃああん達の墓に行つてえ、土下座して謝つてえくれたああああ……」

「約束してくれたんです。僕達を救つてくれると。」

その答えを聞いて、思わずニヤついてしまう情報屋。

「なるほど、お客様。その話、もっと詳しくお願ひできますか。」

情報屋がミイラの方へ視線を向けると、そこには誰もいなかつた。

「・・・お客様が逃げた。」

「あんな恥ずかしいの、俺の口から絶対に言えない。」

ミイラは温泉に入つていた。着ている服及び包帯を全部脱いで入浴しているミイラの体格は、普通の高校生の肉体そのもので、しかし

普通と違う所が一つあつた。

全身にかけて、傷跡がびつしりと刻まれていた。なのはの父の傷跡とは比べ物にならない位の。

銃痕や刀傷はもちろんの事、背中を包み込むような火傷の痕、抉られたような痕すら多くある。一体どんな人生を送ればこんな体になるのか不思議に思う。

しかし、顔には傷が一つもなかつた。そこだけは死守した、そんな風にもうかがえる。

平凡で優しそうな顔。表すならこんな言葉がぴつたりの顔だつた。その顔と体のギャップがあまりにも大きすぎて、温泉に入つていた旅館客の好奇の視線が向けられてるがミイラは気にしないで傷跡だらけの体を洗い温泉に浸かつた。

「はあ・・・温泉なんて七年ぶりだ。最後に入つたのはアイツとの混浴だつたな。」

アイツとはミイラの大切な人だつた。今はもう死んだミイラの大切な人。ミイラが生前家族を失い葬儀屋として過ごす事となつた出来事に巻き込まれた人。

「混浴、あんな格好で混浴・・・」

「パパ、あれも男の勲章?」

「練太、あそこまで傷は作らなくていい。」

なんか外野がうるさいがミイラは氣にも留めず温泉に浸かつていた。

「混浴、あんなのが混浴だなんて・・・」

「パパ、僕は将来あんなふうになるよ。」

「練太、公務員になりなさい。」

さて、すぐ湯船に入つたが調度良い位に体が温まつた。そろそろ出るとしよう。

別に視線が痛いわけではない。ただ、体が温まつただけである。さて、夜に備えて休んどくか。俺はまだ自滅する気はない。

「やつてるやつてる。今回のなのは少しは強くなつたかな。観戦できないのが残念だがな。」

なのはとフロイトが戦つている場所から少し離れた場所、ミイラはタバコを口に咥え蝙蝠（ひやく）を作り出していた。

「まあ、俺に対する復讐者は情報屋とリュネが何とかしてくれるらしいし、こちらも何とかするか。リリオ、ミサイルの雨はどの位の数だ。」

その言葉に、ミイラの後ろに控えているリリオは泣きそうになりながら答える。

「えつと、三百だよ。葬儀屋、無理だよこんな数。」

その言葉にミイラはタバコを咥えながら答える。

「つを耳馬鹿の起こした白騎士事件に比べれば少ない。」

そう言いながらも次々と蝙蝠を作り出していく。

「でも、そしたら葬儀屋が。」

「たかが三百、三百匹の蝙蝠で撃ち落してみせる。」

そう言いながら、ミイラの包帯は灰色から赤黒く染まつていく。

「もう腕どころか右の脇腹まで無くなつてるんだよ。もし、このまま死んだら僕達犬人種（ドッグナ）はずつと虐げられるまだよーー。」

「俺の心配はないのか。まあいい、俺が生き延びればいいんだろ。」

「そう言いながら、ミイラは自分の体をどんどん蝙蝠に変えていく。そして蝙蝠を三百匹作り出した時は、右半身と左腕が消えていた。余裕が無いのか流れ出る血を押さえ込む力すら残つてないようだつた。」

「はっはは、俺が関係も興味もない人間のために自分の力を使うのは生前も含めてこれが初めてだな。」

自虐的に笑いながら吸殻になつたタバコが口から地面に落ちた。

「Ture。こんなことなら、もつとしつかり温泉に浸かつて疲れ

をとつておけばよかつたな。」

「葬儀屋、それ、死亡フラグだよ。」

そのリリオの言葉に返事をせず、そして二三百匹の蝙蝠は降り注ぐミサイルの群れに突っ込んでいった。

最後の一匹がすら見えなくなつたとき、ミイラはゆっくりと後ろに倒れこんだ。

そして夜空はミサイルの爆発の連続により明るく照らされたが、ミイラの空気感染により殆どの人・・・普通に生活する一般人やアメリカや中国など各国の首脳等の地球に住む一般の人達は気付く事はなかつた。

「何、あれ・・・」

なのはは少し離れた場所、いきなり現れた黒い群れと、その後の夜空を明るく照らす爆発に驚いた。フェイトも同じように驚いて戦いは一時中断になつていた。

しばらく一人とも動けないと、異常が起きた方向の茂みが揺れ、そこから犬の耳が生えた一人の少女らしき人が現れた。

その瞳からは涙が流れしており、こちらに向かつて歩いてきた。

「リ、リリオ君、どうしたの。」

先の一件もあり面識があつたフェイトはリリオに声をかけた。この時点でもはや一人は戦闘どころではなくなつた。

そして、その少女のような少年はフェイトの言葉を皮切りに泣きながらなのはとフェイトに助けを求めるために口を開いた。

「ひぐつ、葬儀屋を、葬儀屋を、た、たす、うつ、助けてください。うああああーー！」

そのまま、リリオは泣き崩れた。

「何が何なのか分からなければ、リリオ・・・ちゃん。葬儀屋さんが大変なんだよね。その人の所へ早く案内してくれる。」

そんなりリリオに優しくなのはは語りかけた。基本事項として高町家

はお人よしである。

「急じう、じゃないと出遅れになるかもしないから。」
フェイトの言葉と共に泣き崩れたリリオが何とか立ち上がり一人を案内した。フェイトも本当は優しい子である。

「馬鹿・・・さつせとどつかに・・行け。」

三人が来たとたんミイラは苦しそうに呻きながら拒絶の言葉を発した。

「そんな・・・そんな言い方つて、リリオちゃんは貴方を助けたくて、ここまで。」

なのはとフェイトは最初、重傷で仰向けに倒れているミイラを見て色々な意味で驚いていたがミイラの拒絶の言葉を聞くや抗議の声をあげた。

その言葉にミイラは深く息を吸つて、吐き出すと共に苦しそうにしてながら言葉を返した。

「そう、だな。リリオ・・・悪かった。そして、早く・・・一人を連れ、て逃げる。」

「逃げるとはどうじうことですかミイラさん。」

フェイトの質問にミイラは答えを返す。

「失敗、だ。リリオ、なのは、フェイト。巻き・・・込まれる。早く・・・逃げてくれ。」

その言葉と共に、ミイラ達を囲むように様々な武器を持つ人が現れた。

「だれ、この人達。この人達がミイラさんを?」

なのはの言葉に対し、ミイラは言葉を発する。

「いや、違う。それ、より・・・リリ、オ。相手は、何人だ。」

「二十人・・・だよ、葬儀屋。」

「情報屋と・・・リュネ、二十七人、も引き受けてくれたか。上出来だ。」

そして咳き込みながらミイラは三人に対して声をかける。

「ごほつ、さあ、三人は……逃げてくれ。後は、俺が片付……
ける。あいつら……は俺が、ごほつ」ごほつ、狙いだ。無関係、な
人を、殺すほど、鬼じや、ない……はずだ。」

そう言つと、ゆつくりとゆつくりとミイラは立ち上がる。

「ミイラさん！？ ダメ、休んでて、私達が何とかするから。」

「うん、そこの白い子の言つとおり、ミイラさんは横になつてて。
これ以上下手に動くと死ぬよ。」

二人の魔法少女はミイラを守るようにデバイスを構えて立つ。リリ
オも何とか落ち着きを取り戻し、敵の集団にから守ろうとしていた。
三人はミイラを守ろうと決意する。

だが・・・そんな三人の決意を碎くかのよつて、ミイラの田の前で
三人は地に倒れ付した。

「な・・・。」

赤い水が、三方向からミイラに向かつてくる。

「何を言つてるんだ馬鹿が、お前に関係してて、その時点で関係者
なんだよ。」

十四人、十四人の人間達がミイラ達に近づき、六人が三人の少年少
女に対し一撃を入れていた。

「バリアジャケットを身を纏つても子供は子供だ。どうだ、葬儀屋。
知り合いか傷つけられる感想は。お前がやつた事と同じだ。」

ミイラは何が起こったのか理解出来てなかつた。そして、ミイラは
知らなかつた。情報屋は一つの重要な情報を言い逃していた事に。
この復讐者たちはミイラの関係者ならば全員殺すということを。

「あのミサイルは囮だつたんだ。お前はミサイルを打ち落とした後、
混乱してる俺達を捕まえようとしたが残念だつたな。」

「あ・・・ああ。」

そう、手はずではミサイルを防がれて混乱する復讐者達を一気に
網打尽にする予定だつた。だが、実際は一網打尽に出来ず、さらに
三人も致命傷を負つてしまつた。今三人は痛みで気を失つてゐるが、

死んでいた。

「情報屋と食鬼人の少女はきちんと足止めしてますよ。後は、満身創痍のテメエを殺すだけだ！！」

その言葉と共に、ミイラの足に流れ込んできた紅い水が付着した。ああ、俺が転生するときもこんな光景だつたな。あれ？ なんで三人とも倒れてんだ？ 俺は何もしてないのに何でなのはとフェイトは死んでるんだ？

「力力。」

死体 死体 死体 死体 死体 死体死体死体死体死体死体死死死死体イイイイイイヒヤツハアアアアアアアアア

「どうした葬儀屋、お前は人間に興味がないんだよな・・・ああ、そうか。奴隸が居たな。ドックナーの奴隸がな。」

明らかに優位に立ってる。そう思つている復讐者達はそろそろ止めを刺そうとして一人の男が空に飛んだ。

「んな？」

その男は今までミイラに言葉を発していた男だつた。

間抜けな声を出して空を飛んだ男が最後に見た光景は、どうやってかいつの間にか体を再生したミイラが満月をバックに右手を突き出している姿だつた。

誰もいない情報屋の部屋。その部屋のレポート用紙の一枚が風により捲れ、文字が現れた。それは僅か一行わずかだつた。

『ゲシュタルト・ブレイク』 全てを崩壊させる神をも殺す力。

「みんな、死なせてしまって。少しの間だけ休んでくれ。その頃には全て終つて

・・・答えなんて無いさ、ビリ也可能な。

自分で間違いを正解と肯定する。

神ですらそうする。

だから・・・世界はそんな場所なんだ。

だから・・・答えは無いんだ。

だから・・・自分で間違いを見つけるんだ。

自分が納得する間違いを・・・

俺は転生前は多くの人を殺してきたし見てきた
だからかな、俺は人の死が美しいと思うのは
だから、俺は狂つてると思う

普通は、知り合いが死んで悲しいと思うはずだ
俺は知り合いが死んで、死んで、死んで、死んで
死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで
死んで死んで死んで死んで死んで死んで死んで

美しいと思った。興奮もした。俺は狂つてる。
他人が殺した死体が、どんな美味しいタバコよりも俺を惹きつける。
だから、俺は狂つてる。

そんな狂つてる俺に好意を抱いていた奴が転生前に一人いた。
たしか名前は・・

ミイラは子供達のため 情報屋は大切なお客様のため

地面に落ちた男は一度と動く事はなかった。

「レ、レイフエ・・・レイフエがやられたぞ！！」

仲間が死んだ。その事実が復讐者達に降りかかり、復讐者達はミイラを見据える。

「力力、力力力力力。」

狂ったように声を出すミイラは姿勢を低くするとそのまま勢い良く走り出した。

「こいつ、素手で俺を殺せると思つた。」

ミイラの標的になつた男は両手に持つ銃で迎え撃つが、銃弾が当たる直前で体に当たる部分だけが霧散し弾が当たる事はなかつた。

「力力力、力力力力力。」

「マジかよ・・・。」

そして、ミイラの右手が標的になつた男の腹部に当たり、男の全細胞の機能が崩壊し生命活動は停止した。

「力力力、力力力カツカ力カカツカカツカカツカカツカ力。」

その姿を見下ろしながら、ミイラは奇声を上げ次の標的を探すかのように周囲を見回した。

ユーノとアルフは突然途絶えたなのはとフェイトの魔力に焦りを感じて現場へ向かおうとし、そんな一人の目の前に立ちふさがるよう車椅子に座つたパジャマ姿の女の子が現れた。

「この先には行つてはダメ。貴方達は今すぐ立ち去つてください。」

「行けば貴方達は絶望します。だから立ち去る事をおすすめします。」

「白い子に黒い子は出遅れです。だから立ち去つてください。」

次々と発せられる言葉に対し、一貫しているのは立ち去る事を催促

する言葉だった。

だから二人は目の前の少女に対し拒否の言葉を吐き出す。

「そう言われても、向こうにはなのはが居るんだ！！ 邪魔をするなら力ずくでも通つていいく！！」

「そこのフュレットの言つとおり、私達は何があつても行かなくちや行けないんだ！！ 早くどかないとガブツといくわよ。」

その言葉に、車椅子に座る少女は『仕方ないです』と呟き立ち上がる。

立ち上がった瞬間、パジャマ姿の少女の皮膚や筋肉がどんどん落ちていき最後に残つたのはパジャマを着たガイコツとその足元に広がる皮や内臓や血液などの人間のパートだけだった。

「私を倒せたら、どうぞ進んでください。」

その言葉と共に、ガイコツの足元の人間のパートがグニョグニョとグロテスクに動きながら生理的に戻しそうになつてゐるゴーノと何か堪えていいるアルフに向かう。

「そして、葬儀屋を殺してください。同僚である十一番目の実力者『生命に憧れる者』としての望みです。」

十分が過ぎ、捕まえた二十七人の復讐者達をリュネに任せてミイラの元へ急ぎ向かつた情報屋が見た光景は、氣を失つて倒れているアルフとフェレットであった。

「何があつたんだ、二人とも氣を失つて倒れてるなんて。」

目立つた外傷がない事から、これをやつた相手はかなりの実力者である事に気付き情報屋はため息を吐く。

「くそつ、これだから現状が分からるのは怖いんだ。」

そう言いながら氣を失つてゐる二人を保留し、ミイラの元へ向かおうとしたら目の前に車椅子に座つたパジャマ姿の女の子が現れた。

「ここから先は行つてはダメ、すぐに引き返しなさい。」

「貴方はこの先にある惨状に絶望する。だから立ち去る事をおすす

めします。」

「葬儀屋はもう出遅れです。だから立ち去つてください。」

次々と発せられる言葉に、一貫しているのは立ち去るのを催促する言葉だつた。

だから情報屋は田の前の少女に対し拒否の言葉を吐き出す。

「復讐者達がこの事件を引き起こしたのは俺が原因でもあるんだ。つまり早い話がケジメだ。すまんが通らせてもらひ。」

その言葉に、車椅子に座る少女は『仕方ないです』と呟き立ち上がる。

立ち上がった瞬間、アルフとユーノの時と同じくパジャマ姿の少女は皮膚や筋肉がどんどん落ちていき最後に残つたのはパジャマを着たガイコツとその足元に広がる皮や内臓や血液などの人間のパーツだけだつた。

「私を倒せたら、どうぞ進んでください。」

その言葉と共に、ガイコツの足元の人間のパーツがグニョグニョとグロテスクに動きながら目を細める情報屋に向かう。

「そして、葬儀屋を殺してください。同僚である十一番田の実力者『生命に憧れる者』としての望みです。」

「残念ながら、お客様を殺すのは俺の選択肢にはない。」

その言葉と共に、ガイコツの足の骨は砕けた。

「俺の今の選択肢は一つ、お客様の助けに行く事だ。」

その言葉と共に、ガイコツの腕の骨が砕けた。

「私の体が、砕けていく。意外と素早いですね、情報屋さん。」

あまりの速さにガイコツは情報屋を素直に賞賛した。そしてそのまま地面に落ちようとしていたガイコツを情報屋は上手くキャッチし、車椅子に座らせた。

座らせると同時に、人間のパーツは一つの場所に戻ろうとせわしく動きガイコツに集まつた。

「情報屋である私の調べによりますと、貴方の体のパーツは触れると酷い状態異常を引き起こす。貴方は他の幹部の支援が役割だつた

はずです。なぜ、一人で来たのですか。正直言つて貴方だけでは無謀でしたよ。」

その言葉に、ほとんどのパートが集まりきった少女は自虐的に笑いながら答えた。

「私は、葬儀屋さんが好きでした。こんな醜い姿を見ても葬儀屋さんは優しく接してくれました。だから、彼が苦しむ姿を見たくない。こんな理由でどうでしょうか。」

その理由に情報屋は納得した。実際に転生前は、ほとんどの人間からは嫌われていた葬儀屋だったが、それ以外には好かれていた。だから車椅子に座る少女もこのパターンであつただけであつた。

「つまり、独断で来たのですか。あの組織とも付き合いが長いですが、ほんとに幹部達は自由に動きますね。」

「それがあの組織の善い所ですけどね。知つてますか、葬儀屋さんは幹部の人全員に能力を抜きにして必要とされていた、好かれていたんですよ。」

その言葉に情報屋は一瞬思案し、その後軽く笑つた。

「何が面白いんですか。」

「いやいや、お客様は言つてたんですよ。転生前の自分は命令を聞くだけの人形だった、だからみんなは俺を物として必要としていたと思う。だからかな、こんな簡単に何も思わず人に殺す俺に幹部達は気軽に話しかけてくるんだ・・・何て言つてたんでね。」

その言葉を聞き、少女は悲しそうに目を伏せる。

「葬儀屋さんにはそう見えていたんですか。少し、悲しいです。だからかな、転生した後、戻つてこないのは。」

悲しそうに呟く少女に、情報屋向こうを見据える。向こうは銃声や爆発音が連続して響いてくる。

「なら、一緒に行きませんか。転生前に所属していた組織でも、他の幹部達から好かれていたと分からせるために。」

その言葉に少女は一瞬驚き、その後クスリと笑いミイラが居る場所を見据える。

「そうですね、じゃあ両手両足の骨は碎かれましたのでエスコートをお願いします、情報屋さん。」

「分かりましたお客様。では参りましょ、う。」

ミイラは夜空に奇声を上げていた。

「力力、力力カカツカツカツカ力力力力。」

復讐者達の半分は既に死んでいた。残りの半分も死んでいた。

「力力力、力力力力。」

そして、その奇声を上げていたミイラに声がかけられた。

「お客様、少し落ち着いてください。」

いつの間にか現れた情報屋が両手に自動拳銃を一つ構えていた。

「力力、力。」

ああ、声が聞こえる。声が聞こえた。

「力力、力力力力。」

ミイラは姿勢を低くして走り出し情報屋にたどり着くと右手を突き出した。

「おわつと、お客様。いい加減にしないと本気を出しますよ。」

「力力。」

ああ、回避された。なんか言つてるがどうでもいいや。冷静に冷静に相手の動きを見て、倒せばいいんだ。

ミイラは真っ白な思考でいつたん距離を取ると、姿勢を低くして情報屋に再び駆け出した。

「十一番目！－！、今です。」

情報屋とミイラの距離が五メートルになつたその時、情報屋が叫ぶと情報屋の後ろから人間のパーティが飛び出してきた。

「力力力、力力力。」

ああ、何かが飛んできた。予想は出来てた、だから後ろに退こう。

「退かせません。」

いつの間にか、後ろからも横からも人のパーティが飛んできていた。

ああ、流石に予想してなかつた。
まあいいや、時間は稼いだ。

ああ、悩んだけどやつぱり力を使つた。

さあ、さつさと逃げてくれ三人とも。俺は眠るよ、疲れた。

ああ、この飛んでくる物。懐かしい感じがする。

ああ、あの組織でいつも一人で寂しそうにしていた、それでいて俺が話しかけると嬉しそうに笑い返してくる、あの娘の感じがする。

俺は旅館の一室で目を覚ました。

「・・・重い。」

当たり前である、パジャマを着た少女とリリオがミイラの腹の上に頭と腕を乗せて眠っているからである。

「懐かしい。でも何で居るんだ、十一番目。」

少し考えたが、良く分からないので考えない事にした。

そして、リリオの様子を見てミイラは安堵の息を漏らす。

「まあ、リリオの怪我が消えてるという事は、なのはとフュイトも何とかなつたということか。良かつた良かつた。」

「良かないですよ。」

その言葉に首だけ動かして声のほうを見ると、そこには情報屋が居た。

「あの後、大変だつたんですよ。何故か蘇つた一人の少女が倒れて氣を失つていてミイラを見て色々大変なことになつたし、フェレットと使い魔は錯乱状態になつて今は薬で抑えてますし、今回の事件を起こした内の半分が死亡して、その処理をしたりで色々大変だつたんですよ！！」

「う、うう、ん。」

珍しく大声を上げる情報屋の声に十二番田の実力者《生命に憧れる者》は目を覚ました。

そして、ミイラと目が合つた。

「あ・・・久しづり、です、葬儀屋さん。」

「そうだな、十一番田。」

そんな一人に情報屋はため息を吐き、ミイラには後で旅館の裏手に来てくださいと言つて立ち去つた。

「・・・あの。」

少女は情報屋に言われた言葉を思い出し、誤解を解くために少女は言つ。

「私も含めて幹部達は、あなたの事を道具としての好きではなく、人として好きだつたんだよ。」

その言葉を聞き、ミイラは一瞬だけ驚いた後、何とも無いような顔をした。

「そうか・・・それだけ？　じゃあ、ちょっと情報屋と相談する事があるから。」

その淡白な言葉に少女は面食らつた。

「あれ、葬儀屋さん？」

「どうした、他に何か。」

リリオを起こさないよう丁寧にズラしながら立とつとしていたミイラは返事する。

「いえ、だから、つまり、私達にそう思われていたから組織に戻つてこなかつたんじや・・・」

その言葉にミイラは少し考えてから言葉を返す。

「戻らなかつたのは自分がやりたいことを見つけたからだ。それと、まあなんだ、俺を人として見ていてくれたのは意外だつたな。ありがとうと組織の幹部達に伝えてくれ。」

そして、ミイラは立ち上がって部屋を出た。その姿を見送った少女は、淡白すぎるミイラの反応に悲しくて、涙が出て止まらなかつた。

「・・・葬儀屋さんの馬鹿。もつ戻つてこなくて良いよ。」

「まあそんなつれない事を言つたな。」

その言葉と共に後ろから抱きつかれた。

「ふえ？」

「感謝してるんだ、こんな俺をあの組織は拾ってくれたし、それにお前はこんな場所に着てまで俺を止めてくれた。」

部屋を出て行つたはずのミイラが顔の包帯を取つて、あの平凡で優しい表情で優しく笑いながら抱きついていた。

それに気付いた少女は顔を赤くした。

「そ、葬儀屋さん、出て行つたんじゃ・・・」

「出て行つたよ。まあ、すぐに霧化して戻つてきたけどね。つまり、本心が聞きたくて意地悪しただけだ。それについては謝る、『めん。そしてありがと』。」

その言葉に少女は泣きながら、だけど先程までの涙とは違つ涙で泣きながら言つ。

「うん、どういたしまして・・・あの、向きを変えて、いいですか？」

「ああ、良いよ。」

そう言つとミイラは腕を解き、少女は体の向きをミイラに合わせミ

イラの胸に抱きつきながら顔を埋めた。

「う、葬儀屋さんが消えて、寂しかった、寂しかった。なんで、なんで戻つてこなかったの、みんなも心配してたんだよ。」

「・・・悪かった。」

ミイラは優しく少女の頭を撫でる。

「葬儀屋さんが消えてから、私はずっと探していたのに見つからなくて、それでも探して、見つけたひ苦しんでる姿で、情報屋さんから貴方の気持ちを聞いて、泣くのを堪えるので必死だつたんだよ。」

「・・・。」

優しく、優しく撫でる。少女は泣きながら自分の思いを口にする。

「お願い、だから、戻つてきてよ。お願い、お願いだから。」

「・・・俺は戻らない。」

「なんで、なんで、なの、葬儀屋、さん。お願いだから、ひつ、う

ああああああ！…。」

その言葉を聞き、少女は大きな声で泣いた。ミイラは優しく頭を撫で続けた。

「うああああああ！… うう、うう、うああああああ！…」

少女が泣き止むまでミイラはずっと頭を撫で続けていた。泣き止んだ時には少女は疲れたのかミイラの胸の中で眠つていった。

「変わつてないな、いつも他の奴らには大人ぶるのに俺だけには歳相応に接してくれる。実を言うとお前だけが俺を人として接してくれたと思ってたんだぞ。」

そう言いながら頭を優しく撫で続ける。

「本当は…・・戻りたいけど、俺は変わつてしまつたから無理なんだ。変わつてないお前が羨ましいよ。」

変わつてなかつた、俺だけが変わつた。だから戻れない。

「だから、しばらくはさよなら。今だけは、ずっと一緒に居るから。だからさよなら、ラフィ。」

「お客様…・・完全に忘れてますね。」

情報屋は旅館の裏手でぽつんと一人、ため息を吐いた。

その後ろには、今回捕まえた復讐者達が一人、また一人と何処かへ転送されていた。

「はあ、お客様の文句を言つなら事件が始まる前に何とかならなかつたんですか社長。」

復讐者達を転送しながら、復讐者を演じて潜入していた社員は情報屋に文句を言つ。

「来月の給料を上げてやるから何も言つな…。」

情報屋は盛大にため息を吐きながらミイラが来るのを待つた。

結論・結局最後までミイラは来なかつた。

高町なのはは帰りの車に乗りながら、旅館での事を振り返っていた。

楽しかった思い出、大変だった思い出、色々あつた。

だけど、どれも大切だと思う。死に掛けたりしたけれど（注・実際死んでます。）

けど、気がかりな事もある。あの悲しそうな瞳をした少女に名前を言つ事ができなかつた。

でも、絶対にまた会えると思う。あの時、協力しあえたから絶対に理解しあえると思う。

だから、次は絶対に私の名前を教えるの。絶対に、絶対に。

「なのは、ユーノが怯えてるけど何でかな。」

「な、何でかな・・・」

アリサの質問になのはは誤魔化すように笑いながら答える。

「なのはちゃん、よっぽど怖い目にあつたみたいだよ。」

すずかの的を射た発言に、なのはは気付かれないように顔を平静に保ち答える。

「そう、みたいだね・・・」

なのはは歯切れの悪い言葉であったのに、アリサとすずかの二人はなのはの異変に気付く事なくユーノの心配をしていた。

ちなみにユーノは車の座席の下の奥でガクガクと怯えていた。

ちなみに、フェイトの使い魔のアルフも同じ状態になつていたのを、なのはは知らない。

ちなみに、色々とフェイトとアルフの世話を焼いている小年が怯えまくるアルフの状態を見て何があつたのかフェイトに聞いてみたが教えてもらえないくて、しょんぼりしていたのもなのはは知らない。

ミイラは子供達のため 情報屋は大切なお客様のため（後書き）

妖氣「なぜ二人生き返つたし。」

ミイラ「神が俺の願いを聞き届けてくれた。」

妖氣「・・・お前を転生させたのは神じゃないだろ。」

ミイラ「・・・そうだな、俺にも、よく分からん。」

妖氣「顔を逸らしながら言つても説得力が無い。」

ユーノ・アルフ「内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓怖い内臓

妖氣「今日のゲストはユーノとアルフだが、それどころじゃないな。」

「

ミイラ「ハハハ、ラフィは相変わらずだ。」

妖氣「笑い事じゃないし。」

ミイラ「次回も続く。」

//マイラは情報を受け取る 小年は情報を作り出す（前書き）

「おれは、フエイトさんが、傷つぐのは見た、くない。たまには、小年じゃなく、少年として、守るのも良い……だろ。」
笑いながら葵井元樹はフエイトの頬おほに手を添える。その頬には涙が伝っていた。

「俺は、あんたをどうしても許せない。あんたは俺の母親そつくりだ！！ 血が繋がつていなくとも娘だろ、なんで娘の気持ちを知りうとしない……なんで血の繋がつた娘まで悲しませる事をする！」

雷に打たれた平凡な小年は怒りを込めてプレシアに対峙する。

「なあ、この死体つて凄く綺麗だな。よっぽど寂しく誰かを待ちながら死んだんだな。」

神父服を着た灰色の包帯の男、マイラはつゝといしながら言った。

「俺は……落ちる。」

ミイラは情報を受け取る 小年は情報を作り出す

海鳴市 マンション一室

葵井元樹あおいもとじゅは掃除機で部屋の中を掃除していた。その手際は主婦顔負けである。

「今夜の夕御飯は何にしよう。」

掃除機の電源を切り葵井元樹は掃除機のコードを抜き、定位位置に戻しながら呟いた。

「・・・鍋にするか。」

そう言つと、ポケットから財布を取り出し中身を確認する。

野口が三枚、樋口が四枚、諭吉が十五枚

「今日は豪華に行くか。特上牛肉を買えばアルフさんは喜ぶし、鍋は簡単で栄養価も高いから育ち盛りのフェイトさんにも合性バッヂだだし。」

そう言つと、時計を確認する。時刻は夕方五時、この分だとフェイントとアルフはまだ帰つてこない。

靴を履き、外に行く。鼻歌を交えながら歩く姿は、どこか楽しそうだった。

そして、運命の歯車は回る。

ミイラは空を見ていた。時刻は夜、そして結界が広域に張られていた。

「・・・ジユエルシードを巡りぶつかり合つ、か。ロストロギアは様々な人に様々な出来事をもたらしてきたが、なんでこうも戦いが起ころんだろうな。」

ポケットからタバコとライターを取り出しタバコの一本を口に咥えた。

る。

「興味ない人間なら勝手にやつてろだが、知り合いの場合はほつとけない。」

ライターを使い火を付ける。その時、街中のある一点で大きな魔力が光り輝いた。その規模は小規模の次元震を起こす程に。

「どうか、なのはもフェイトも戦つて大丈夫か？ いや、ユーノとアルフの方が危険だな。主にメンタル面で。」

ミイラは心配そうに向こうを見るが、死から蘇つたなのはとフェイドの体は特に問題はなく、ユーノとアルフの精神状態も、なんとか大丈夫な状態だった。

「まあ、心配しても仕方ない。それよりも今はコイツを仕留めるか。・・・それにしても、なんでこう生きるつて不条理なんだろな。」

ミイラの後ろには巨大なぬいぐるみの様な化け物もとい魔女が居た。それは、こことは違う魔法少女の世界、知つてる人が見たらママミつたとか言つ世界の化け物がいた。

「不条理でもなんでも、世界は平等だよ。特に生き物は美味しいとう点で。」

そう言つと化け物は大口を開けてミイラを喰おうとする。

「それは同感。まだ生き血を啜^{すす}つた事はないが、死体から溢れ出る血がもう美しいよな。」

その言葉と共に、ミイラは化け物の口の中に消えた。

「ティロ・フィナーレだつたか。けど俺は普段はアニメ見るより色んな小説読み耽^{ふけ}てたから見てないんだよな。まあいいや。」

化け物の体内から、無数の蝙蝠が弾丸のように飛び出した。

「ぐぎやああああああああああああああアアアアアアああああああ！」

苦しそうに叫びながら化け物は体をよじらせる。開いた穴からは紅い霧が溢れ出し一つの所に集る。

そして、そこには口にタバコを咥えたミイラが立つていた。

その手には玩具の拳銃を持つて。

「何故俺を餌に選んだかは知らんが、格の違いだ。お前は毒を食べた、それだけだ。」

さあ、なのはとフロイトの元へ向かおうとするか。死に掛けの化け物など情報屋に任せておけ。

「ああああああああ頂きまーす!!」

化け物の口から脱皮したかのようになに化け物が現れてミイラに完全な不意打ちで大口を開けて襲い掛かる。

「格の違いだ、ぬいぐるみモドキ。」

そういえば、なのははしつかり思いを告げることが出来るのだろうか。

一時間前

ミイラ「ぬるぽ。」

情報屋「ガツ!!」

「今変な夢を見た。」

「どんな夢ですか。ルシフィさん。」

山猫の質問に情報屋は田じりを押さえながら答える。

「人格崩壊した夢だ、それより今はどうなつている。」

その質問に山猫は簡素に答える。

「リュネトリリオの一人は病院で葬儀屋を殺害した少女を介護して るようです。」

「ミイラは?」

「高町なのはと接触した模様です。なんでも、アドバイスをしたよ うで。」

その言葉に情報屋は疑問符を頭に浮かべる。

「アドバイスつて?」

その言葉に山猫は嬉しそうに答えた。

「フエイト・テスター卿に思いを伝えるにはどうすれば良いのかをアドバイスをしたそうです。」

そして現在

「これがマゾヒストの極みという事か。」

「うふ、うふふひひ。痛い、痛いよ。なんで、なんなんで痛痛いの、うひひ。」

化け物はあまりの痛みに精神に異常をきたしていた。

「本体が壊されなければ大丈夫なんて、くだらない考えだ。逆に死なないから、俺としてはやりやすい。」

ミイラは化け物の本体をあえて攻撃しないで多くの痛みを化け物に刷り込んだ。

「ひやひや、うひひ、痛痛痛いいい。灰色の包帯は弱くて美味しいと聞いたのに、なんでなんで。」

止めを刺すまででもない。だが放置するのも・・・まあいか。

「わゝシャルロッテ、酷くやられたようだ。」

さあ、行くか。多分なのはとフエイトの間で何か起こつてゐるだろつ。

「ご、御主人、痛痛いです。助け、助け助けけけけて。」

「我慢しなさいシャルロッテ、自業自得です。あれは葬儀屋と呼ばれていた化け物なんですよ。ただでさえ生前は人間なのに転生者を多く葬つてきて、転生後はさらに強くなつた奴です。あなたが悪い。」

「でもも、弱弱いくて、お美味しいってえええ。」

「あれ、嘘です。」

御主人の嘘つきいいいい！！！ という叫びが聞こえた。

「そこ、つるさい。それに女、ペットの躰はしつかりやれ。」

ミイラは振り返りながら静かに言った。そこにはアハハと笑いなが

らシャルロッテを撫でる「十代前半の長い金色の髪を半分辺りから五つに編んで最後に一つに纏めている女性がいた。

「ごめんね、この子が迷惑をかけたようで。お詫びに情報を一つ無償で提供するからそれで勘弁ね。」

「情報つてまるで情報屋みたいだな。」

その言葉に後頭部を搔きながら女性は笑う。

「いやー、私つて実際に情報屋の社員で。これからこの世界に居る社長に定時報告をするために向かつてる途中で、こんど是非社長と商談してくださいな。それと今回無償で提供する情報ですが、」

そこで一旦区切り、女性は言う。

「さつき、ジュエルシードの暴走がありましたが、それで少年が一名重傷になりました。」

さらりと言われた情報にミイラは目を少し細めた。

俺は一般人の設定だ。だがな、一般人が魔法少女を護つてもいいだろ。

いや、言い訳みたいになつてるが本心を言えば、自己満足だ。だけどいいだろ、護る事は全ての人に入れられた特権だ。

葵井元樹あおいもとじゅは本日の夕食の材料である鍋の具材の入ったスーパーの袋を持ちながら歩いていた。

周りは人間の生み出した光で溢れている。それが闇を切り裂く光景は、夜空を台無しにしているが気にならないで小年は歩いていく。

「まーるきゅー チルノは美味しいよつと。」

歌を口ずさみながら小年は歩いていく。そして、小年は結界の中に囚われた。

「わーお、周りのビルや街灯の明かりが消えたのに暗くないぞ。」

フロイト及びアルフと長い時間を過ごした葵井元樹にとっては、もう驚くに値しない事象である。たぶん隕石が落ちてきても驚かないだろう。

「魔法って本当に凄いや。俺にも魔法を扱える才能があれはな！」
そういう風に呴いてみたが小年がパワーアップする事はなく、すぐ近くから衝撃と光が伝わってきた。

その光景を確認して、葵井元樹は顔を青くする。

「……ちよつと待てよ、今のつてもしかしてフロイトさんか！？」
あの衝撃はヤバイって……！」

スーパーの袋を右手に持ちながら小年は衝撃の中心点へと向かう。

フェイトは亀裂の入つたバルティツシユに対し心の中で謝り、それを小さくして右手の甲に設置する場所に設置し、ジュエルシードへ向かう。

- フルマー -

アルフの声が聞こえてもなお、フロイトは突き進む。母さんのため、応援してくれる葵井さんのため。

フェイトがたどり着く前に、横の裏路地から現れた少年がジユエル
シードを右手で大きく振りかぶり、ぶん殴つた。

込んだ。

フェイ特は吹き飛ばされ、それを人間の状態になつたアルフが受け止める。

「大丈夫かいフェイト。」

声をかけられたフェイトは収まりつつある光を信じられないように見続ける。

そして、光が收まり、そこには少年が仰向けに倒れていた。
そして、フュイトは掠れた声で言つ。

「あ、葵井・・・さん？」

葵井元樹はジュエルシードに向かつフュイトを見てゾッとしていた。
何故か知らないが人間が何の補助も無しにあれをどうにかできるな
ど不可能だと一目で見て分かつたからだ。

だから、小年のやることは既に決まっていた。

だから小心者の小年から物語の主人公のような少年へ、葵井元樹は
シフトアップする。

やることなど単純だ。フュイトを守る。ただ、それだけだ。
駆け出す、全力で駆け出す。スーパーの袋など投げ捨てて。

「届けええええええええええええええええ！」

そして、声を張り上げ、右手を大きく振りかぶる。

なあ、願いを叶える宝石。腕の一本や一本ならくれてやる。だから
今すぐ收まれ。頼むから俺の田の前で護りたいと思つものを傷つけ
るなあああああ！！

ジュエルシードに拳がぶつかる、その瞬間に光が体を包み込む。
(でしゃばりには罰を・・・か。その通りだよ。)

小年が少年になつた日（前書き）

俺は、長い夢を見ていた。

遠い、遠い過去。アルフさんやフェイトさんに出会つ前。

正義の味方に憧れていて、自分は正義の味方ではないと気付かされた出来事。

でも、今だから言える。

俺は、悲劇の主人公ではない。

喜劇の主人公になれる人物だ。

だから、泣かないでくれ。

小年が少年になつた日

異世界、星黎殿の中で白衣を着た男・・・八番田の実力者『智慧を教える者』、クエスチョン・アンサーは多くの紅世の徒を相手に講義を開いていた。

「今の時代は色々な世界に多くの知性を持つ者達がいますが、相容れぬのか争いなどが絶えません。分かりやすく例を述べるならフレイムヘイズと紅世の徒との争いでしょうか。私は思います、仕方がないことだと。」

そう言うと、教卓の上に乗せていた水の入ったコップを横に倒した。もちろん中から水が流れ出る。

「さて問題、今コップが倒れ水が溢れ出ましたが、そこの君はどうしますか。」

指名された紅世の徒の一人が答える。

「片付ければ良いと思います。」

その答えにアンサーは頷く。

「そう、片付ければ良いのです。このようにね。」

そう言い、手を叩くと水は蒸発した。

「起きてしまつた事は仕方がありません。しかし、その後に手を加えれば良いのです。争いも同じです、争いは両者の意見の食い違いで起きるもの。ならその意見の食い違いに手を加えればいい。」

アンサーは指を鳴らすとアンサーの横に映像が現れた。

「これが我々『夢の世界』^{ホープレス・ワールド}の、存在の力を人間から奪わなくとも存在の力を紅世の徒一人一人に供給するという計画です。これで少しは争いが減ります。」

アンサーの言葉に紅世の徒達は歎声の声を上げた。この場に集つた多くの者達は、『夢の世界』の計画の賛同者であった。

そんな光景を見ながらグラサン・・・シュドナイは隣りにいるヘラーに言葉をかける。

「いいのか、あんな好き勝手に言わせて。」

その言葉にヘカテーは特に顔色を変えずに答える。

「構いません。それにあなたも知ってるはずです、あの組織の強さを。」

その言葉に、シュドナイが思い出すは彼らが初めて星黎殿に訪れた時の事。

全員で出迎えわずか三人、わずか三人に遊ばれ、負けた。その中にはクエスチョン・アンサーも居たが、しかし一番強く、一番印象に残つたのは葬儀屋と言わっていた小年だつた。

彼は他の一人と違い確実に急所に拳を入れ意識を奪い取つていった。そして、その表情は無感情を通り越して人形のような表情だつた。そして、戦いが終り人形のような表情の小年は一番早くどこかへ消えた。

「確かにあの組織は強い。だから驚いたぞ、葬儀屋と呼ばれていたあの少年が死んだという知らせを聞いた時は。」

海鳴市 ジュエルシード暴走現場跡

仰向けの少年が田を覚ました時に最初に見た光景は、ボロボロと涙を流しながら自らの名前を呼ぶフェイトの姿だつた。

「何で、泣いてるんだ。俺は、フェイトさんが傷付く事がなくて良かったと思ってるのに。」

これじゃあ、体を張った俺が間違いみたいじゃないか。

・・・ああ、でしやばりには罰をか。なにもこんな罰でなくともいいのに。」

フェイトは泣きながら葵井元樹に声をかける。

「だつて、だつて、葵井さん、ボロボロで・・・それに腕が。」

腕、腕がどうしたんだ。

そう思い、右腕に力を入れようとして力が入らなかつた。首だけを動かして右腕を見ると、腕がなかつた。

いや、腕はそこにあつた。肘から先が骨だけになつた腕が。これも罰なのか。でしゃばつた俺に対する罰なのか。

少年は笑つた。弱々しいが、力強く。

「この程度なら、大丈夫だ。それに俺には左腕がまだ残つてゐる。・

・なんてな、右腕を生やす魔法は、ある？」

その言葉にフェイトは首を振る。

「そんな魔法なんて、ないよ。」

「やつぱりか、よつと。」

むつくりと少年は上半身を起こした。あわてて止めに入るフェイトに左腕を突き出した。

「ジユエルシードだ。もう暴走してないみたいだから大丈夫だと思う。それとその白い子、この石が目的なら今回は諦めてくれないか。」

その言葉に離れた場所でこちらを見ていた白い女の子は頷いてくれた。フェレットみたいなのが何か言いたげな様子だったが気のせいだろう。

そう思つてゐるうちに一つ気がついた。フェイトさんがジユエルシードを受け取つてくれない事に。そういえば、アルフはどこに行つたんだろ？。

「なんで・・・本当なら私がジユエルシードを、葵井さんの、腕が無くならくても、私が・・・」

その言葉にジユエルシードをフェイトに向かつてジユエルシードを軽く投げた。突然の事にフェイトは動搖しながらジユエルシードを何とかキャッチした。

そんなフェイトを見ながら少年は笑いながら言つ。

「おれは、フェイトさんが、傷つく、のは見た、くない。たまには、小年じゃなく、少年として、守る、のも良い・・・だろ。」

笑いながら葵井元樹はフェイトの頬に手を添える。その頬には涙が

伝っていた。

「だから笑ってくれ。右腕が無い以外は何とも無いから。」
その言葉に、何とか涙を堪えようと/orして泣いてしまった。

「フェイトちゃん・・・」

高町なのはは眼前で行われている一人のやり取りに対し、呟く事ができなかつた。

当然である。あんなやりとりの中に入るほど、なのははKYOUではない。むしろ空氣を読む方であると思つ。どつかの執務管と違つて。

「へつへつへふしつ！」

「クロノ、大丈夫？ 熱が四十度超えてるけど。」

「だ、大丈夫です。これくらいなら。」

時間が過ぎ少年はフェイトに支えられて、近くに落ちていた食材の入ったビニール袋を回収して一緒に転送魔法で何処かへ行つてしまつた。

「ジュエルシード、とられちやつたね。」

ユーノが静かな声で言つた。

「うん。でも、何でか分からぬいけど、あれで良かつたと思うの。」
あれで良かつた。もし、あそこでジュエルシードの取り合いをした
ら、人間としてダメなような気がする。そういう気がした。

ユーノも同じ意見だつたのか、なのはに同意した。

そして、なのはがユーノに何かを言おつとした所で後ろから物音が聞こえた。

振り向くとそこには、黒いフードで全身を隠した女性が立つていた。

「迷惑をかけて、ごめんなさいね。」

その女性の唐突な物言いに、なのはとユーノは一瞬何か分からなかつた。

「ただ、あの子は必死なの。だから、恨まないあげて。」「あなたは、誰ですか。」

コーノの質問に答えることなく、フードの女性は言つ。

「あの子を、救つてあげて。」

そう言つと、フードの女性は転送魔法で何処かへ行つてしまつた。

「どういう事だつて聞いてるんだよ……」

フェイトが葵井元樹が帰つてゐる頃、アルフは情報屋の店の中で情報屋を殴り飛ばしていた。

「イタタ。お客様、落ち着かれてはどうですか。」

壁にぶち当たりながらも、情報屋は営業モードで対応する。

「ふざけるんじゃなによ、お前のせいで葵井さんの腕が無くなつたんだぞ！！」

「ちょっと待つてやれ。腕が無くなつたのは私のせいだというのですか？」

その言葉にアルフは情報屋の鳩尾に拳を叩き込んだ。あまりの威力に情報屋は咳き込みながらうずくまつた。

「あんたがあの場に居たのは分かつてゐるんだ。何故動かなかつた、何故止めようとしたなかつた！！」

アルフは見たのだ。近くの屋上で眼下を見下ろしてゐる情報屋の姿を。興味深げに観察してゐる姿を。

「げほつげほつ、お言葉ですが一つよろしいですか。」

くだらない事を言つたら蹴り飛ばす。そう思つてゐたアルフは情報屋の次の言葉に動きが止まつた。

「一般人があの結界で自由に動けると思ひますか？」

そして、情報屋は何とか立ち上がりながら言葉の嵐を放つ。

「一般人がタイミング良くフェイト様の危機を救えますか、一般人があれ程までの威力を受けて腕一本だけで終ると思いますか、一般人が無くなつた右腕の痛みに対しても正気でいられると思いますか、そもそもあの一般人は何故、御二人に優しく接してると思いますか。」

情報屋の言葉に戸惑うアルフに情報屋は最後にこう言った。

「お客様は、あの一般人の過去を知つてますか？」

その言葉でアルフは少年を思い浮かべる。優しく、お節介で、いつも私達二人を気にかけてくれる少年の姿を。

けど、今の情報屋の口ぶりからは、少年を疑えと言つてるようになか聞こえない。

反論したくて、情報屋の言つてる事はどれも正しかつた。

「あんたは、何を知つてるんだい。」

その言葉に、情報屋は目を閉じて答える。

「お教えできません。しかし、これから言つるのは情報ではなく忠告です。心に留めておいてください。」

情報屋は瞼まぶたを開ける。その黒いサングラスの奥の瞳は、穏やかな眼差しだつた。

「あの少年を、大切してあげてください。それが貴方にも、フェイト様にも良い結果をもたらします。」

「もう、ゴールしてもいいよね。」

アルフが帰つた後、あまりの激痛に情報屋は仰向けに倒れた。

「大丈夫ですか、ルシフィさん。」

そこへ転送魔法で帰つてきた山猫が現れた。

「大丈夫じゃない。確実にアバラが折れた。悪いが部屋を片付けてくれ。」

アルフが暴れたせいで、部屋の中は結構散乱していた。

「分かりました。でも、ここまで暴れて何も起きなかつたのが不思議ですね。」

床には魔道書の原典や魔剣や聖剣のたぐい、不老不死の薬などが散乱していた。

「それは俺も同感だ。というか下手に動かすと海鳴市が消滅するから気をつけてな。」

分かりましたと言い山猫は掃除をするためにフードを外す。そして、二人は視線が合つた。

「やっぱ綺麗だ、山猫。」

「ルシフィさん・・・。」

二人は見つめ合つたまま時間が止まり、そして後ろで何かが光つていた。

「あつ。」

「あつ。」

二人は冷や汗を流して後ろを見た。

二人が見つめ合つて、うちに何故か魔道所が捲れて、何かが発動した。

《約束された緋色の花》

その日、とある店の中で緋色の花びらが咲き誇つた。

小年が少年になつた日（後書き）

ミイラ「今回出番がない。」

妖氣「もはや葵井が主人公で良いんじやないか。」

ミイラ「あいつは主人公になれんよ。」

妖氣「あんだ、嫉妬ゆえの発言か。」

ミイラ「いや、あいつの事は俺が一番知ってる。」

妖氣「その意味ありげな発言は一体・・・」

ミイラ「次回の続く。」

病院に行く//ミイラ 病院に運ぶ少年（前書き）

時刻 午前 場所：？？？

「俺は救いたいんだ。」

ボロボロの少年はミイラに思いをぶつける。

「お前には救える力がない。」

そんな少年にミイラは突き放すように言つ。

「だけど、それでも救いたいだ。」

それでも少年の決意は変わらない。

「なら、どうする。」

ミイラは徐々に霧になつていぐ。そんなミイラに少年は答える。

「決まつてゐ、誰も救われない方法で俺は救う。」

その答えに満足したのかミイラは完全に消えた。

午後一時 ミイラが転生者になる前の世界 病院への道

「日光が気持ちいい。」

「そうだね。」

「そおおうだあねええ。」

そう言いながらミイラとリリオとリュネは、ある病院に入院している少女の見舞いへ向かっていた。

「ところで葬儀屋、吸血鬼なのになんで日光が平気なの?」

トウモロコシを食べながらリリオは小首をかしげて質問する。

「リイリイイオオ、女の子つぽおおおいよおおお。」

リュネがふざけてからかっている様に言つたがリリオは無視する方針にした。その事にリュネは少し落ち込んだ。

(普通に喋れば可愛いのに何であんな喋り方をするんだろう?)

無視しながらリリオは少し疑問に思つた。実は今まで沢山の吸血鬼の肉を喰らい血を飲み続けたリュネの脳は少しばかり変化していて、そのせいで脳の言葉を司る部分に異常が出ていることをリリオは知らない。

つまり、リュネは普通に話しているのだ。さつきのもからかいではなく普通に『リリオ、女の子つぽいよ。』と言つただけである。「リリオ、無視しない。彼女は今は普通に言つただけだからな。ほら、リュネも落ち込んでないで、元気だして。」

ミイラはリュネについてある程度把握しているので、リュネをフォローした。

そんなこんなで、ミイラと以前はミイラを殺そうとしていたはずの二人はとある病院に向かい歩いていく。

ちなみにさつきの質問の何故ミイラは日光に当たっても大丈夫かといふと、『ban item』らしい。

「かりんちゃん、お見舞いに来たよ。」

部屋に入るなりリリオは笑顔で俺が病院送りにしたらしい少女に駆け寄った。

「こんにちわ、リリオちゃん。やっぱり今日もトウモロコシを食べてきたみたいだね。」

優しく微笑みながら、かりんと言われた少女は唯一残っている右手を使いリリオの頬に付いているトウモロコシの粒を取った。

「はう。」

リリオは顔を赤くして恥ずかしそうに俯いた。

その様子を廊下でミイラとリュネは眺めていた。

「葬お儀屋あ、リイイリイイオはああ何でえ顔を赤くしてえるの？」

「恋なんだ。リリオはかりんに恋をしてるんだ。の中に今入るのは止めといて、しばらく時間潰すか。リュネ、何が食べたい？」

二人は引き返していく。その間にも、あの病室では初々しく、良い雰囲気が漂っていた。

ちなみにリュネは吸血鬼を食べたいと言った。

夕刻 海鳴市 情報屋の店

「いつから花屋になつたんですか、情報屋さん。」

今現在、Tシャツにジーンズを着ている翠屋のバイトとして働いている紅美鈴は、名前の分からぬ紺色の花が咲き乱れた店内を見て呆れたように言った。

「いやはや、ちよつと色々ありましてね。まあ、その話は置いておいて、貴方には今日はやつて貰いたい事があるんです。」

情報屋は手書きの地図の書かれたメモを紅美鈴に渡した。

「その場所で奴隸商人が取引をするので潰してきてもらいたい、報酬は弾みますよ。」

情報屋からメモを受け取る。その時にちょっと皮肉を漏らした。

「私をここまで墮おとしておいて、また偽善ですか。」

その言葉に情報屋は申し訳なさそう顔になった。

「あの時は、本当にすまなかつた。俺があんな事をしなければ君は紅魔館から逃げるように出稼ぎにこの世界に来る必要もなかつた。」

紅美鈴は、情報屋の謝罪にため息を吐く。

「別にいいですよ。謝られてもどうしようもないですし、それに私は貴方には逆らこませんから。逆らこませんから。」

何とも言えない空氣がこの場を支配しようとした所で、毛先が薄い桃色がかつたブロンドの髪の九歳くらいの少女が情報屋に近づいてきた。

「パパ、何を話してるので？」

「パパ！？」

唐突なワードと登場人物に紅美鈴は女の子にパパと呼ばせる田の前の口りこン疑惑の人物を汚いものでも見るような目で見た。

「いや、誤解してるようだから言わせて貰うが、この子は娘だから。」

「この口りこンがッ！」

その言葉と共に、紅美鈴は回し蹴りを食らわした。

「おお～、パパが飛んだ。」

女の子は特に驚きもせずに宙を飛んでる情報屋を田で追つていた。

同時刻 海鳴市の病院

「右腕が無いつて不便だな～。」

病院の個室のベットの上で葵井元樹は肘から先の空白の部分を見つめながらお見舞いのりんごを皮も剥かずそのまま齧かじつた。

「・・・熟^孰れてない。」

すっぱさに顔をしかめた少年のいる部屋に誰かが入ってきた。

その人物は少年の見覚えのある少女、少年の腕が無くなるときこいた魔法少女だった。

「君は・・・あの時の。よく病室^{ムカシ}が分かつたね。それと、時刻も夕方だしきちんと学校に行つたよつて何より。」

少女は緊張した面持ちだった。

「看護婦さんに聞いたの。あの、腕は・・・」

その言葉に少年は力なく右の「一の腕を振つてみせる。

「この通り、肘から先が消えたよ。まあ、腕だけで済んだから良かつたけどな。」

そう言いながらりんご^{かじ}を齧る。やつぱりすっぱかった。

「まあ、無駄話はここまことにして、俺の見舞いの他に用件があると見えるが言つてみんしゃい。」

すると少女のカバンからフェレットが現れた。
「リュリュヌースハンバライヤフェレットか。病院にペット持ち込みはダメだと思つぞ。」

少年が注意するとフェレットは喋つた。

「教えてください。あの一人の居場所を。」

その現象に驚くことなく少年は答える。

「喋るなら病院に連れ込んでも問題ないか。」

そういう問題ではない。そして少年はりんごをわきに置いて左手で頭をボリボリ搔く。

「二人とは、フェイトさんとアルフさんの事だよな。凄いデリケートになつてゐるから教えたくないな。」

その言葉に、少女とフェレットは食い下がる。

「そこを何とかお願ひします。フェイトちゃんと話をしたいんです。」

「ジュエルシードは危険なんです。下手をすればこの街が、この世界が大変なことになるんです。だから、教えてください。」

その言葉に少年はため息を吐く。

「すこし、公園まで散歩しに行こ。」

「そう言うと、少年はベットから降りる。

「病院から出て大丈夫なんですか。」

「フレットの言葉に少年は笑って答える。

「いや、しばらくはベットの上で安静だそうだ。まあ、大丈夫だ。安静にしてるはずの少年はそう言いながら歩き出す。

「俺の名前は葵井元樹。君達の名前を教えてくれないか。」

その言葉に一人は名前を言う。

「私は高町なのはなの。」

「僕はユーノ・スクライアです。」

そして、三人は公園に向かい歩き出していく。そこなのはが思い出したように質問をする。

「あの、さっきユーノ君を見たときに言つたリュリュ……。」

「リュリュヌースハンバラライヤフレット。リュリュヌースが住むという意味でハンバラライヤが草原という意味。まあ草原に住むフレットって意味だよ。妹が好きだった。」

そう言う少年の目は何処か遠くを見ていた。

「そうだったんですね。妹さんは今はどうしてるんですか。」

その質問に少年は答えた。

「今は遠い場所。会うのが難しい場所に行つたよ。会おうと思えば会えるけどね。」

少年の横顔は悲しげだった。その表情を見て二人はそれ以上は聞くことが出来なかつた。

そして少年は、本日二度目の病院からの抜け出しに成功した。

公園まで歩いてきた少年はなのはとユーノをベンチに座らせて、少年も座つてから話を切り出した。

「まず、言える事は」

ズゴーン

目の前で何か光ったと思つたらジュエルシードが木の中に入り、木の化け物が現れた。

「・・・」

「・・・」

「・・・タイミングがいいのやら悪いのやら。まあ、がんばってな。

「少年は怪我人とは思えない速さで隠れた。

「・・・はっ！ なのはレイジングハートを。」

「うん！ コーノ君。お願い、レイジングハート。」

その様子を影で見ながら少年はなのはに心中で声をかける。

（本当は、あの子がフェイトさんを救うのが一番なんだよな。あの子の瞳を見るに、何故か親友になつてくれると確信するし。）

そこで少年は笑ってしまった。

（俺は何を考へてるんだ。まるで兄みたいじやないか。）

本当に、少年は兄のように接していた。だからだろうか、フェイトやアルフも信頼を寄せていたのだろう。

だから

（だから俺はそこまで怒れたんだな。純粹に、フェイトさんとアリシアさんのために。）

だから

（あの日、義妹との約束を守らなかつた、そして死なてしまつたくせにな。）

自虐的に思つてしまふ部分もあって、 いまだ過去を振り切れていない事にため息を吐いてしまつた。

妖氣「今回の前書きは何だ？」

ミライ「俺と少年との会話だが。」

妖氣「謎が多いって。」

ミライ「あの前書きは次回に繋がると思う。」

妖氣「そうか、まあいい。それより今問題なのは何故ここにリンディ茶がある。」

ミライ「さあな、飲めといつてだらう。」

妖氣「俺はコーヒー派だ！！」

その頃

リンディ「ここに置いていたお茶が消えたけど、だれか知らない？」

クロノ「げほっげほっ、知りませんよ。」

ヒライ「うわっ、休んだ方がいいよクロノ君。もう熱が40度超えてるよ。」

クロノ「でも仕事が・・・」

ウエーボ「そうですよクロノ執務官。現場には俺が行きますので。」

クロノ「すまない、ウエーボ執務官。」

妖氣「さりげなくオリキャラが出てるが・・・」

ミイラ「彼は情報屋の部下だが。」

妖氣「ネタばれ早っ！？」

ミイラ「次回も続く。」

少年は眞実を見つける（前書き）

難しく考えすぎなんだよ。

誰かを救いたい、それだけで充分じゃないか。

それ以上を求めたら欲張りになる。

分かるだろ、葵井元樹。

少年は眞実を見つける

午前 時の庭園

フェイトの悲痛な声を背に受けアルフは壁に拳を打ちつけた。

「あの女、あんまりだ。あんまりだよ。なんでフェイトがあんな目に遭わなくちゃならないんだ！！」

フェイトの悲痛な声が響く。ただでさえ昨日はフェイトの心の支えになっていた葵井元樹が重傷を負ったのに、せりに追い討ちをかけるようなプレシアの行い。

すぐに助けに行きたい、だけど向こうに行く扉はプレシアの魔法のせいで開ける事はできない。

「どうすればいいんだ・・・」

『他にも御用がありましたらそちらに渡してある番号に連絡ください。追加料金ですが誠意を持って対応させていただきます。では。』

壁に再び拳を打ちつけた所で本当に唐突に、唐突に情報屋の言葉を思い出した。

「あいつなら扉を壊せるほどの強力な武器を持っているはず。」

前日に情報屋を殴り飛ばして氣まずい気持ちもあるが四の五の言つての余裕はアルフにはなかった。

急いで暗記してある番号を思い出し、携帯を持ってなかつた事を思い出す。

だからどうした、携帯がないなら情報屋の店に乗り込めばいい。アルフはフェイトを救うため転移魔法を使い情報屋の店に行く。

【余分な歯車は噛み合ひ、歪に動き出す。】

「無理です。こればかりはどうしようもありません。」

アルフの頼みを情報屋は断つた。やるせないような表情で。

「あんたがプレシアに雇われている事は分かっている。けど、お願
いだよ。フェイトは今辛い目にあつてるんだ。フェイトを助ける道
具を貸してくれるだけでいいんだよ。」

「そう言わạmしても。」

「何でもする、何でもするからお願ひだよ情報屋。」

アルフは恥もプライドも捨て懇願する。そんなアルフへ情報屋は仕
方なく言葉を発する。

「そうですね、じゃあこう言いましょう。」

残酷な残酷な言葉をやるせない表情で発する。それを聞いた瞬間ア
ルフは血相を変えて店から飛び出した。
ただ一つ、情報屋はこう言つた。

「昨日病院に運ばれた葵井元樹は今、時の庭園にいます。原因は分
かりません。」

【歪に動き出した歯車は別の歴史へと連結する。】

「ここは、どこだ。」

葵井元樹は周りを見て呟いた。腕の治しようもないのに寝てると医
者に言わされたので今は病院で眠つていたはずだ。

「もしかして夢見てるのか?」

だとしたら自由に動いても今はベッドの上だから問題ない。ノープ
ロブレムだ。

「なら、歩こうか。」

周りは何処かラスボスのステージのように感じられた。それと仄か
に紅い霧が良いアクセントだ。

なら、せっかくのステージを歩かないのはもつたいない。それに散

歩は好きなほうだ。

しばらく歩いたが、出口が見つからない。それどころか奥へ行つて
いるみたいだ。

一出田はるひだよ。夢の中で迷子なんて笑えね？。

最初は出口を目指していたが、世界の抑止力が働いたのかどんどん迷子になるしコレが夢じゃないと気付けたし右肘からの断面がジンジンジンジンジンジンジン痛いし。

たが、気がついた。腹の幽面の痛みは周囲に集中できなかつた。ある扉の前に来るまで音に気がつくことができなかつた。

扉に耳をくつづけて向こうの様子を探ろうとした。

「どういへば、年端もいかなそうな女の子の悲痛な声が聞こえた。

扉の向こうには年端もいかなそうな女の子の悲痛な声が聞こえた。

ツツツツー！」

お前は扉が開かないだけで死なせるのか。ならそれで良いじゃないか。『仕方ない』の一言で片付くんだ。それにお前は

逃げたじやないか、あの場から。もしかしたら助けられたのに自分から約束を破つて逃げたじやないか。なあ、葵井元樹。

•
•
•○

だから良いんだよ。無理しなくても。責められるのは自分だけだ。
だから良いじゃないか。

• • • o

また、ひつそり暮らせばいい。
間に構つて何が面白い。
かま
人はつまらないんだ。
つまらない人

- 1 -

たかひ選による
葵井元樹

逃げただよ
楽になれるんだよた

ああ そんが 楽はなれるそ

そこが いやあ俺は樂はなりたし

少年は疲れたようにな笑い後ろ一二三歩下かると勢いをつけて鉄の扉を破る勢いでぶつかつた。

「やつぱり出来るわけねえよ」

家族なんだよ！ 今更自分だけ逃げてのうと生きるなんて器

用な事でわざわざ元さんたよ!!」「

叫ひながら左腕で扇を何度も叫した

「そんな器用な真似ができるなら右腕がなくなるなんて事もないんだよ、そのくらい分かつてんだろ俺！！ なんなら左腕もくれてやる。だから開けええええええええええええええええええええええ！」

ぎいい・・・

扉は開かれた。少年はあつさりと開かれた扉に少しだけ驚いたが、すぐに扉の向こうに転がり込むように飛び込んだ。

るクソババアがいた。

さあ、振り切れないと思うが過去からのケジメを自分でつける。

「フェイトオオオオオオオオオオオオオオ！」

仕方ないことなんだ。私は母さんの期待に応える事が出来なかつたから。

でも、何でだろう。病院に入院している葵井さんが不思議と来てく
れる気がした。

そんな都合の良い事だと起きるわけないと分かっているのは、和のせいで右腕が無くなっているのに。

「こんなに待たせておいて、成果はこれだけでは母さんは貴方を笑顔で迎えることはできない。わかるか、フェイト。」

言えなかつた。

だからよ、フエイト。覚えていて欲しい。

「一度と、母さんを失望させないようだ。

「一度と、母さんを失望させないよ！」

次に何が来るかは明確だつた。だから痛みに耐えるために目をつむり、後ろの開くはずもない大きな鉄の扉が開く音が聞こえた時には心臓が止まるかと思つた。

「アエイトオオオオオオオオオオオオ!!」

「あ、おい、さん・・・」叫び声を聞いて誰か来たか確信でき 安堵してした和がいた

何でだらつ、意識が遠のいていく。安堵したからなのかな、私はなんで安堵したんだろう。葵井さんが来てくれ、た・・・から、か・・・な・・・・

「俺の視線の先にいるクソババアは俺のことを驚いた顔で見ていた。
「てめえ、何してんだ。フェイトさんから離れろ！！」

怒りの興奮状態で少年はプレシアに怒鳴った。

「何を言つてゐるの、フェイトは私の娘よ。これは躰けの一環よ、フェイトに付きまとつ少年。」

その言葉を聞いて少年はぶち切れた。

「てめえの娘に何してんだお前はああああああ！」

左腕を振りかぶりプレシアに突進する。信じたくなかった、実の娘に虐待した言い分が躰けだなんて。あんなにフェイトさんの体に傷ができて、なのにふざけんじゃねえクソババアアアアアアアアツツツ！！

ドゴンシ

少年は倒れた。煙を上げて倒れた。ふすふす、ふすふすと。

プレシアの放つた雷が一般人である少年に直撃した。

「あの扉を開けられたから一体どんな力があるのか疑問に思つたけど、どうやら扉の方に問題があつたみたいね。」

ふすふすと煙を上げながら、少年は立ち上がつた。

「まだ立てるとは、その根性だけは褒めてあげるわ。だけど、死になさい。」

プレシアによる雷は再び少年を襲つた。だけど少年は倒れなかつた。「俺は今の自分が逃げることも倒れることも許したくないんだ。ケジメをつけたいんだ。だからよおおおおおおおおおおーー！」

少年は走り出す。プレシアは雷を何度も放ち当てるが少年は肌を焦げ付かせながら走り、そして左腕を使つフェイトの拘束を無理やり解いた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

息を荒げてフェイトを左腕だけで抱きかかえる少年にプレシアは冷たく言い放つ。

「下らないわ、フェイトは私の娘。助け出したところで、あなたよ

「り私のお願ひを聞いてくれるわ。」

「お願いじゃなく命令の間違えじゃねえのか。」

意識を朦朧とさせながら、何とか皮肉を返した。

それもすばその渇ひす口を閉じなさい

「だからお前の娘だろ」のクソババアアアアアアアアアアアアアツツツ！」

少年はブヨイトを横に突き飛はした。キリギリモルヒノヒトヨイトには当たらず少年にだけ当たつた。

がつた。

- し ふ と い わ ね 。

フレシアの咳きこぼれで、頭から血を流しながら「のせ」と溜まっていた血を吐き出して深呼吸をする。

意味のない事を呟いた。視界が霞んできたが、ふらつく事はなかつた。だから走り出す。一発でも殴らないと気がすまなかつた。そして、当然の如く雷が放たれたが狙いが甘かつた。いや、プレシアは本気で当てるつもりだつた。

(ぐ？！？) こんなところで。

プレシアの病の発作が標準を鈍らせた。雷は少年の真後ろに当たり、少年は衝撃で吹き飛んだ。プレシアの上を抜き、そしてその後ろの扉にぶち当たり、扉の向こうに少年は入ってしまった。

「しまつたつ！！」

「プレシアは急いで振り返る。血を吐きながら立ち上がる少年は信じられないものを見るかのような視線で、その部屋の中のガラスの容器の中に入っている一糸纏わぬ幼い女の子の綺麗過ぎる死体を見た。
「・・・たまにフェイトさんが寝言で言つんだ、アリシアじゃなくてフェイトだよって。」

少年は近づいてガラスの容器に手のひらを近づける。

「汚い手で触らないでっ！！」

その言葉を何も言い返さず、少年は静かな声で尋ねる。

「教える、お前の過去に何があったのか。」

少年は振り返った。その瞳は、静かにプレシアを見つめていた。

【連結した歴史は歪められて作られていく。まるで、誰かの都合に合わせて。】

少年は眞実を見つける（後書き）

ミイラ「次回に続く。」

妖氣「早ツー？」

少年は眞実を知る（前書き）

「葵井元樹はこじらいで病院まで運ぶ、だからその子はしっかりと安全な場所まで連れてつてくれ。」

ミイラはアルフに諭すように言つ。

ミイラは途中で情報屋の店から出てきたアルフに会つた。だからアルフの助けに応じる事ができた。

ただ、疑問が残る。

ミイラが来る前から時の庭園は紅い霧が立ち込めていた。さらに言うなら、立ち込め始めたのは葵井元樹が時の庭園に来たときからだった。

少年は眞実を知る

「なぜそんな事を言わなければいけないの。」

「フレシアから返ってきたのは最もな冷たい言葉だった。

「・・・昔話を、して良い・・・か。」

フレシアを静かに見つめながら葵井元樹は尋ねた。

「興味ないわ、あなたの過去になんて。」

フレシアは杖をかざした。雷が来ると思った少年は、横からの空気の塊が頭に直撃して横に吹き飛んだ。

「ぐあ・・・はあ・はあ。この、容器の中に、入ってる娘、が、本当に、大事、なんだな。その気持ちを、何でフェイトにも、向けないんだ、同じ娘だろ！…」

少年は立ち上がった。ゆっくりと、ふらつくりとなく。

「アリシアを偽物と一緒にしないで！…」

フレシアのその怒声を聞き、少年も叫ぶ。

「じゃあ何でフェイトはあんたを母と慕ってるんだ…！ あんたが生み出したんだろ、偽物と思つなら何でフェイトと名づけた、なんで運命と名づけた！…」

「それはあの子の開発プロジェクトの名前がFATEだったからよ。」

「か・・・開発？」

突然のワードに少年は言葉を詰まらせた。

「ええ、あの子は人工的に生み出されたものよ。 そうね、ここまで好きに言つてくれて、あなたが何も知らないで死ぬのも癪に障るわ。いいわ、教えてあげる。あなたが聞いてきた私の過去について。」

「それはあの子の開発プロジェクトの名前がFATEだったからよ。」

「アリシアがまだ生きていた時、私はね、アレクトロ社のある工

ルギー開発プロジェクトの主任だったの。」

プレシアは過去を語りだした。過去を慈しむような瞳で。

「あの頃は楽しかったわ。忙しいながらもアリシアもリースもいて今思つと毎日が夢のようだった。」

（リースって、誰、だよ。）

初めて出たリースという名前に少年は心の中だけで質問した。あんなに思い出の世界に入っている奴に質問したら雷落ちは必死である。「春はアリシアとリースと一緒にピクニックに行つてアリシアが花飾りを作ってくれたわ。夏には遊園地に行つてアリシアの笑顔に癒されたわ。秋には一緒に二ホン料理というのを作つたわ。冬になるとリースの抜け毛が多くなつて少し困つたけど、毎日が楽しかったわ。」

（リースって、猫だつた、のか。）

「だけどね、あの日全てが変わつてしまつた。上から来たあいつのせいでプロジェクトは杜撰ずさんになつていつた。いくら事故を起きないよう努めしても、その後に上からの無理な注文を次々と送りつけてくる。」

いつの間にかプレシアはアリシアの入つた容器の隣りに立つていて。「だけどみんなを守るため事故だけは絶対に起こしたくなかった。私は研究所近くの家に帰ることなく事故を起こさないよう無理な注文の処理と点検を続けて行つたわ。」

（・・・。）

「アリシアには寂しい思いをさせたけど、あの子は文句の一つも言わずに待つついてくれた。だから私はこのプロジェクトが終つたら休暇を取つて、いくらでも甘えさせてあげようと思った。」

だいたいは分かつた。アリシアが何故死んだのか分かつた。

「だけどあの日、全てが変わつた。上からの命令で不備だらけの装置を性能評価のために試運転しろという命令が来た。だけど命令には逆らえない、実行するしかなかつた。」

その声色には悔しさが滲み出でていた。

「そして、事故が起きた。装置が暴走を起こしたのよ。安全装置は働かなかつた。あいつが効率を上げるためにと安全装置を取り外してしまつた。」

「げほつげほつ。」

やばい、血を吐いてしまつた。けど、意識をしつかり保て、一字一句聞き逃すな。

「最後の手段として装置を誰もいらない場所に転移させる方法もあつた。だけど、今後の立場を考えて転移させなかつた。それが間違いだつた。」

あいつは元は良い奴だつたんだ。だけど似てる、今はあいつに似てる。だから一字一句聞き逃すな。

「装置は臨界点に達し、直視できないほどの金色の魔力光が当たり一体を包み込んだわ。すぐに魔法障壁を張つたおかげで開発チームもあいつも私も無事だつたけど、研究所付近の生命は全滅した。」

「そして、アリシア、は、その被害、者になつた。」

少年の言葉にプレシアは肯定した。

「そうよ、アリシアもリースも死んでしまつたわ。その後、会社から巨額の慰謝料が送られてきて私はお払い箱になつた。管理局もただの実験のミスということで処理してしまつた。」

「哀れだな、本当に。どうしようもなく、本当に。」

「その後、私はアリシアを蘇らせるために様々な手を尽くしたわ。でも、できなかつた。」

「あたり、まえだ。例える、ならば、命は、プログラム、だ。死ぬという、事は、すべての生きる、ことに関する、プログラムの、データート、を、意味する。消えた、データは、戻つてこない。」

その言葉にプレシアは意外そうな顔をした。

「ええ、そうよ。だから、私はプロジェクトF・A・T・Eに參加した。クローン計画で私はアリシアを蘇らせようとした。その実験の弊害で不治の病にかかつたけどアリシアの体細胞を使つた計画は成功した、すぐにアリシアの記憶を『えたわ。』

(計画の、成功、か。嬉しかった、だろうな。)

「私は次にリースを蘇らせようとして、蘇らせなかつた。山猫は人より寿命が短い。なら、私の使い魔にして一緒にアリシアと暮らしあうがいいと思つた。」

卷之三

「分かってた。結果は分かってたから、もう言へない。」
「そして、あの子が起きたわ。だけど、あの子はアリシアの代わりにはならなかつた。性格も利き手も違つた。何よりあの子には魔力があつた。よりもよつて金色の魔力光で。そして、リニスも違つた。使い魔にしたのが失敗だつた。気ままな性格だつたりニスが礼儀正しく私の隣に座つていた。だから」

「もう、いい。言うな。大体は、分かった。」

――何が分か――た――とい――う。あなたに私の気持ちが分かると思――てる

「結局は、逃避だ。俺の、母親よりはまともだが結局は同じだ。」
背中から壁に寄りかかつた。走るとしたら次が最後だ。だが、限界

「あんたの気持ちは分からぬ。だが、アリシアの気持ちは分かる。
だから言える。」

あいつをしっかりと見据えろ、ぶれて見えるなら無理に一つに合わせん。

「俺は、あんたをどうしても許せない。あんたは俺の母親そつくりだ！！ 血が繋がつていなくても娘だろ、なんで娘の気持ちを知ろうとしない・・・なんで血の繋がつた娘まで悲しませる事をする！

1

雷に打たれた平凡な小年は怒りを込めてプレシアに対峙する。

ମହାମହିମା - ୧

そして、走り出す。右足を強く踏み出し、左足を強く踏み出し、右

足を踏み出せなかつた。

（は、はは・・・俺は、ダメだな。）

視界には近づいていく床が見えた。たび重なる肉体の酷使に、ついに体は壊れたのだった。

「冷静に物事を見るのはあなたの方だったみたいね。」

プレシアの皮肉に少年は小さく呟いた。

「お互い、様だろ。お前も、病気のくせ、に、魔法を、ばんばん使つて、口から、出てるぞ。」

プレシアの口から血が流れ出でていた。ただ、それだけだった。

少年は負けてしまつた。ただそれだけの話。勝たなければならぬのに負けてしまつた。

まったく、締まらない終わりだ。ケジメをつける事すらできないとは我ながら情けないものだ。おつと、情けないのは俺じゃなくて少年だったな。

それに対して、この女の子の死体は綺麗だな。

少年に止めを刺そうと近づいていたプレシアは、異変に気がついた。紅い霧が室内に充満してきていたのだ。その霧は少年が入ってきた扉から入り込んできている。

「一体・・・何なの？」

プレシアは呆然として見るしかない。紅い霧は一つの意識を持つた生物のように不規則な動きを見せるとプレシアの目の前に集つていく。

すぐにプレシアは飛びのくと、霧の中から何かがプレシアが居た場所を掠めた。

それは灰色の包帯に包まれた手だった。

「綺麗だな、家に飾りたいほどに。」

手が現れると同時に、後ろから声が聞こえた。振り返ると、灰色の神父服を着た灰色の包帯男が容器の中のアリシアの死体を見ていた。プレシアは灰色の人を見て言い知れぬ不安に襲われた。だから虚勢を張った。

「アリシアから離れて…！」

その言葉を無視して、ミイラは咳く。

「なあ、この死体って凄く綺麗だな。よっぽど寂しく誰かを待ちながら死んだんだな。」

神父服を着た灰色の包帯の男、ミイラはうつとりしながら言った。その言葉にプレシアは何かを言おうとしたが言えなかつた。頭の上に、手が乗せられていた。

「まあ、そんなわけだ。少しは苦しみ。」

何がそんなわけか分からぬが、プレシアの頭の中の脳ミソの中に情報の波が襲い掛かってきた。

「 ッ ッ ッ ッ ア ! ! !

声にならぬ悲鳴を聞きながら、興が冷めたかのよつてミイラは喋る。

「少年が伝えたかった事だ。記憶を丸写しだが、その方が分かりやすいだろ。」

唐突にこの部屋に現れたミイラは頭をポリポリ搔くと、プレシアの上に乗せていた手を霧散させた。

そして、頭を抱えて蹲つて^{ひざくま}いるプレシアの横を素通りして葵井元樹とフェイトを肩に担いで部屋から出て行つた。

本当に、淡々と淡々と。ただ、部屋を出る時には肩に担がれていたフェイトと葵井の傷は何故かすっかりと治つていた。

気がついたとき、少年は病院のベットの上に居た。最初に思い出しだのは、プレシアを殴り飛ばせなかつた不甲斐無い自分と、その後

のミイラに運ばれてる自分と、徐々に意識が薄れながらも聞こえたアルフの声だった。

たぶん記憶に残ってる会話の内容を思い出すに、ミイラはフェイトさんをアルフに引き渡して俺はミイラの手により病院のベットまで運ばれたのだろう。まったく不甲斐ない。

「・・・ハハ、ハハハハハハハ。」

だから乾いた笑みを漏らしながら上半身を起こす。

ひとしきり笑つた後、少年は咳く。

「右腕が無いって不便だな。」

時刻は夕刻だろうか。葵井元樹は肘から先の空白の部分を見つめながらお見舞いのりんごを皮も剥かずそのまま齧つた。

「・・・熟れてない。」

すっぱさに顔をしかめた少年のいる部屋に誰かが入ってきた。

【そして話は公園へと戻る。なのはとフェイトの再会の場所へと】

少年は眞実を知る（後書き）

妖氣「えげつない方法でプレシアを改心をせようとしてるな。」

ミイラ「葵井の記憶を埋め込んだ方が改心しやすくなるだろ。」

妖氣「たしかにそうだが。」

ミイラ「次回に続く。」

妖氣「あつ逃げた。」

喜劇と悲劇への準備（前書き）

集ろう。

あの病院の前で、必ず・・・

いつになるか分からないけど・・・

必ず、いつになるか分からないうが・・・

集ろう、必ず戻つてくるから・・・

あの空間から、必ず・・・

夕方 病院前

「もう一度聞くぞ、リリオ。穂枝かりんと充分に話せたか。」「ミイラのその問いかけにリリオは真剣な面持ちで頷いた。

「そうか、なら次にここに集まるときは戦いが終つたあとだな。リリオはこれからリュネと共にミイラが転生前に所属していた組織の力を借りて革命をする。ミイラがあまり接触しないようにしていた組織の力を借りて。

「それとリリオ、帰つてきたらかりんと・・・」

突然ミイラはリリオの耳元に小声で呟くと、リリオは顔を赤くして俯いた。まるで茹で上げられたタコのよう。

「葬儀屋あ、リリオになあにを言つたのおおおお。

リリオの様子を不思議に思いながらリュネはミイラに質問をした。

「大人の嗜み、といつたところだ。リュネにはまだ早い。

リリオの反応を楽しみながらミイラは答えた。

「でえもおおおおお、リリオオも子供がああし、葬儀屋あも十七ああだあよねえええ。」

その言葉にカラカラとミイラは笑つた。

「そうだつたな、忘れてたよ。つと、迎えが着たようだ。」

その言葉と共に、白いスーツを着た丸刈りのヤクザみたいな男がきた。しかも目つきは鋭い。

「お迎えにあがりました・・・リリオ様、どうかいたしましたか。いぶかしむ外見ヤクザにミイラが変わりに答えた。

「いや、なんでもないさ。それより口り、一人を頼んだぞ。」

「分かりました。それと私の名前は口りではなくローリです。」

外見ヤクザは口りの意味が分からぬようすで、ただ名前を訂正するのみだった。

その様子をつまらなく思いながらミイラは外見ヤクザに手紙を渡す。

「これをラフィイに。」

「分かりました、全力を持つて恋文を届けます！！」

渡された手紙を大事に受け取りながら外見ヤクザは大声で宣言した。その様子に周りにいた人は奇異の視線を外見ヤクザに送りつけるが、外見ヤクザは気にした様子ではなかつた。

「ある意味尊敬するよ。それと恋文ちゃう、映画のチケットだから。

「そこではたとミイラは氣づく、ラフィイは誰と映画を見に行くのだろうか。いや、それよりも問題なのは

「・・・こんな事言つてる場合じゃないつて、そろそろ急がないと今日はこの世界に一日滞在する事になるぞ。」

その言葉に外見ヤクザは慌てて腕時計を見る。外見ヤクザらしく金ぴかの腕時計だつた。

「本当にですね、ではお二人とも私について来て下さい。」

「あつ、はい。」

「はあああいい。」

リリオとリュネは返事をすると、外見ヤクザの後を追つていつた。

その様子を見ながらミイラは呟く。

「勝てよ、リリオ。・・・そして、ラフィイは誰と映画を見に行くんだ？」

そう言いながらミイラは人前にも関わらず数百の灰色の蝙蝠になつて飛んでいく。驚く人が呆然と見上げるだけだが、そのあとは何事も無かつたかのように歩き出す。

数百の灰色の蝙蝠の行列はまるで古の灰龍のようだつた。
エンシェル・ロー
エンシェル

そして、偶然その場に居合わせた古の龍達を味方に持つ男はその光景を見て一言呟く。

「あの蝙蝠の大群から感じる感覺・・・葬儀屋、転生者になつたのか。嬉しいぞ、我が同胞。」

九番目の実力者《友愛を示す者》エンシェル・エローウィーはポツキ

ーを口に呴えながら蝙蝠の大群が見えなくなるまで見続けていた。

同時刻　夢の世界　宿舎

ホーブレス・ワールド

十二番田の実力者《生命に憧れる者》ラーフィン・コーフェはこれから来る一人のミイラの仲間を迎える入れるための部屋の準備をしていた。

「ラーフィン、高い所の窓は私が代わりに拭いてあげようか。」
ラーフィンの隣りにはいつの間にか同じ宿舎の相部屋になっている中学生くらいの少女がいた。

「ありがとうアスナ。けど良かったの？　せっかくの休みだつたんでしょう。」

アスナ　　アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ
ュシアはその言葉に無愛想ながらも少し笑みを浮かべて返事を返す。
「私が好きにやつてる事だから気にしないで。」

そう言うと布巾で高い所の窓を拭き始めた。窓を拭きながらアスナはラーフィンに声をかける。

「たまに思うんだ。もし私がここに拾われずに他の誰かに助けられたらどうなつていたんだろうなつて。」

その間にラーフィンは少し考えてから言葉を返す。

「少なくとも今よりはまつとうな人生を送れたかもしれないよ。」

「やつぱりラーフィンもそう思うのね。」

二人は少し沈黙した後、同時にくすりと笑った。

「でもアスナさんの能力だと、葬儀屋さんとエンシヨルさんが紅き翼や完全なる世界の殲滅に行かなかつたら変な団体に回収されて酷い事になつていたかもしれないよ。」

「そうだね。でも一つ言つならここも変な団体だけね。暗殺や内

部崩壊の誘発を起こして国や組織を滅ぼしたかと思えば、弱い者の味方として戦場で一騎当千の働きをする人もいる。みんながみんなやりたい放題じゃない。」

拭かれた窓は本来の透明さを取り戻していく。空は綺麗な夕焼けだつた。

「それがこの組織の善い所でもあり悪い所でもあるからね。組織のトップですら最近は秘境探しの旅に出ているし、葬儀屋さんは葬儀屋さんで旅をするみたいだし。」

葬儀屋という名前で思い出したのかラーフィンは嬉しそうに笑いながら手の届く位置の窓を拭いていく。

「そういえば、葬儀屋さんに映画のチケットをメールでお願いしたら買つて来てくれたんだ。アスナさん、明日も休みだから一緒に映画を見に行かないですか。」

「ジャンルによるけど、前みたいな恋愛物がいいわね。」

サウザントマスターを殺した男を思い浮かべながらアスナはラーフィンにOKの返事を返す。

気がついたら窓はすべて拭き終えていた。そして窓から見える階下から外見ヤクザのローリさんが女の子と男の娘を連れてやってきた。「アスナ、もう来ちゃったみたい。部屋の準備がまだだから少し待つてもらえるように言つてきてくれないですか。」

「うん、じゃあ行つてくる。」

アスナは暗殺者特有の無駄の無い静かで素早い動きで部屋から出て行つた。

その五分後、ミイラの仲間一人とローリさんも掃除を手伝つてくれた。

葵井元樹は右肩からの深く穿たれた傷から出る血を押さえつけながら物陰で身を潜めていた。

とこうより・・・

（何が非殺傷設定かを教えてもらいたいです、アルフさん。）
死に掛けていた。

時間は少し遡る。

でかい木の化け物をなのはさんとフェイトさんが協力して倒しました。

葵井は正直フェイトさんをもう戦わせたくなかつた。彼女を傷つけるだけの悲劇から遠ざけたかった。

だから高町なのはが着た時は、彼女と一緒にフェイトさんのジュエルシードを集めを止めさせようと思つた。

だから、フェイトさんとアルフさんが着た時はチャンスだと思つた。同時に胸が締め付けられた。

あんな仕打ちを受けたのに、必死でジュエルシードを集めようと/or>るフェイトさんを見た瞬間、言おうとした言葉が砂消しに紙ごと削られるように消えた。

そして、確信もできた。木の化け物との戦いを見て、高町なのはとフェイトさんは分かり合えると。

だから、ジュエルシードを巡って戦う彼女達の戦いを止めようと走り出そうとした。

直後、魔法陣が現れてそこから一人の少年が空中でぶつかり合つて人の少女の間に割つて入つた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。ここでの戦闘は、危険すぎる。事情を話して貰おうか。」

完全に出ばなを挫かれた少年は事の成り行きを見る事しか出来なかつた。

「まずは一人とも武器を引くんだ。」

そのまま空中から地面に降りていく。唐突な展開にどう動くかこまねいでいるとクロノに向かい魔力の弾が飛んできた。

「くっ！」

クロノは魔法障壁を張つて魔力の弾を弾いた。

「えつ？」

葵井元樹は間抜けな声をあげてしまった。弾かれた弾の一つが葵井元樹の右肩を貫通した。

「フェイト、撤退だ。離れてッ！」

（アルフさん、殺す気満々の攻撃の後に逃げるよつて・・・）

右肩を左手で押さえつけながら木に寄りかかった。

そして現在に戻る。

フェイトさんのジュエルシード集めの思いは強く、空中に浮かぶジュエルシードを手にしようとした。

それを防ぐとクロノが攻撃しようとした。

「 ッー！」

危険を知らせようとしたが声が出なかつた。どうやら体の限界は予想以上に超えているらしい。

だから、泣きたくなつた。自分の無力さに。だから誰でもいいフェイトさんを誰か守ってくれよ・・・待てよ俺、無力がなんだつてんだ俺、他人任せしてるから救えるもんも救えねえんだよおおおおおおおおー！

「 ッー！」

もし、体を無理に動かすと内臓が破裂するかもしれない。医者にそういわれた。

だからプレシアと対峙したときも内臓が破裂してもおかしくない状態だつた。いや、内臓が破裂しない事が不思議な状態だつた。

そして今も死にかけの体を無理に動かしてクロノに向かい走り出し

た。

「なつ！？」

クロノにぶつかる事で弾の起動がずれた。フェイトさんも俺が突然現れることに驚いていた。

だけどフェイトさんはすぐにジュエルシードへ向かい、そして回収した。

（それでいい、それでいいんだ・・・フェイトさん。）

今大事なのはジュエルシードを手に入れて逃げる事。やつぱりフェイトさんのジュエルシード集めを応援するよ。

俺が何とかフレシアを説得するから。だから頑、張れ・・・

意識はぶつりと途切れた。限界はとうに超えていた。当たり前の結果だった。

フェイトは意識を失い執務官の少年に寄りかかる葵井元樹を見て助けにいこうとした。

その右肩に手が置かれた。

「時空管理局執務官、ウェージ・ランサーだ。これ以上戦闘行為を続けるのなら強硬手段も辞さない。」

振り返るとそこには、バリアジャケットを纏つた十代後半の少年がいた。

「フェイトから離れる！！」

アルフが爪を振り上げ助けに来てくれた。けどフェイトは一瞬で悟つていた、アルフじやこの執務官に絶対に勝てないと。

だからアルフに来ないでと言おつとした。そして、予想外の事がおきた。

「うわつとー？。」

アルフの剣幕に圧倒されたかのように執務官は離れた。

そして、アルフと合流を果たした。そして転移魔法を使つた。今

状況では葵井さんを助ける事はできないと直感でわかつた。執務官が二人もいる時点で不可能な状況だつた。

そして、転移した。

「「めんなさい、葵井さん。」

（逃げてくれたか、まったく手間のかかる事じで。）

ウェージ執務官はため息を吐きながら空中から降りていく。

「すまないクロノ執務官、取り逃がしてしまつた。今から俺は逃走

者の追跡に入る。そちらは重傷者と二人を艦に乗せてくれ。」

「ウェージ執務官、艦長は私です。勝手な命令は困るのですが。」

突然空中に現れた映像になのはだけが驚いていたがウェージ執務官は冷静に返答した。

「そんなこと言つてる暇はないですよ艦長。それに、そこの中年は早くしないと死にますよ。」

「そうですよ艦長。今は細かい事を言つてる場合じゃない。」

二人の執務官に言われてリンクディはやれやれと思いながら返事を返した。

「分かりました。ではウェージ執務官は逃走者の追跡、クロノは二人を連れてきてください。」

その言葉を皮切りにウェージ執務官は転移魔法を使い追跡を開始した。

置いてけぼりなのはとヨーノは事の成り行きを黙つてみていた。

そんな二人にリンクディは微笑みながら言葉をかける。

「そういうわけで御二人とも、ちょっとアースラまで来て詳しい話を聞かせてもらえるかな。」

突然振られたが、その言葉になのはとヨーノは同意した。

「艦長、ちょっと良いですか。」

そこでクロノが声を上げた。

「なんですかクロノ、何か問題でも。」

別に艦に連れ込む事は問題ではなく、むしろ普通である。何も問題がないとはすだとリンディが思っているとクロノはこう言った。

「今、僕に寄りかかってる少年なんですが、息が止まっています。」

五分後 時の庭園

「何しに着たの、これ以上私に何を見せようとするの。」

プレシアの目の前にはいまだ蝙蝠が集まりきれないミイラがいた。蝙蝠の大群になつたミイラは、そのまま飛び続けて時の庭園に再び訪れたのであつた。

「Reen、感想を聞きに着た。どうやらお気にならぬとしてもうだな。」

プレシアは疲れきつっていた。玉座に座りただミイラを見つめるだけだつた。

「感想、ね。それはどちらの方。」

「本来の記憶の持ち主に対する感想は必要ない。お前の自身が感じた感想に興味がある。」

ミイラのその言葉に、プレシアは素直な感想を述べる事にした。まるで田の前の灰色の神父服の包帯男に懺悔するかのようだ。

『喜劇と悲劇への準備 完』へ続く

夕刻 海鳴市

アースラに乗艦したなのは達と入れ替わりに紅美鈴と九番目の実力者『友愛を示す者』エンシェル・エローウィイが現れた。

「奴隸商人がここに来るはずでしたが、誰かがここで暴れたみたいですね。」

周りを見渡しながら紅美鈴は呟く。手には情報屋から渡されたメモと写真が数枚握られていた。

「情報屋の依頼で着たが、無駄足は困るな。」

ポツキーを咥えながらエンシェルは上空を見る。上空にはすでに何匹もの古の龍エンシェルが待機している。

「とりあえず、俺の友人達で上空から捜索してみるよ。」「では私はちょっとこちらを見ている船に乗り込んでみます。」

艦橋にいるアースラのスタッフは凍りついた。

そして次の瞬間、モニターが砂嵐になると同時にリンディの目の前に最初からそこに居たかのように紅美鈴が降り立つていた。

「始めてまして、紅美鈴と申します。」

刃物のような冷たい瞳に時間が止まった。艦橋にいるスタッフは一目で分かつた、少なくとも今ここにいるスタッフ全員で挑んでも勝ち目がない事を。

そしてその状態で何分経つただろうか、扉が開く音が聞こえた。

「えつ。」

「あつ。」

女の子と男の子の驚く声が扉の所から聞こえてきた。

「なのはちゃんとユーノ君、こんにちわ。ジュエルシード集め_{はがど}歩つ

てますか？」

冷たい瞳から一転、暖かい陽気な瞳に変わっていた。

やってきたのはリンディが茶室に来ない事を不審に感じて様子を見に行つた女性スタッフも帰つてこなくて不安に感じ様子を見に行つた高町なのはとユーノ・スクライアだつた。

「まだまだなの。それよりも美鈴さんは何でここに。

「怪しい船だと思つてちょっと立ち入り調査に。」

「えつ？ なにつ？ この空気の変わりよう？

「怪しい船つて美鈴さん、管理局の船ですよ。」

男の子はため息を吐きながら言つた。そして、その言葉に紅美鈴は驚いていた。

「そうだつたんですか。あの、もしかして公務執行妨害になつたりしますか。」

「多分、大丈夫だと思います。」

不安そうに尋ねてくる紅美鈴にリンディは敬語になつていて。そして、遅れてクロノがやって來た。

「ええと、これはいつたいどういう状況なんですか。」

クロノの質問にスタッフは同じことを思つた。こちらが知りたいと。

同時刻 フェイト達の滞在するマンション

「フェイト、管理局まできたんだ。あんな石を集めのを止めて一緒に」

「ごめんアルフ、一人にさせて。」

アルフの言葉を遮りフェイトは一人、部屋の中に入ると閉じこもつてしまつた。

「フェイト・・・」

無理も無い、葵井元樹が管理局の手に渡つてしまつたのだから。

本当はフェイトもアルフも無理をしてでも葵井元樹を助けたかっただろう。それほど大切な家族だったのだから。

「クソッ、全部全部あの女のせいだ、あの女さえいなければ」

「葵井元樹には会えなかつたと思いますよ。」

アルフは固まつてしまつた。聞き覚えのある声、幻聴であると願いたかつた。

「まあ、原作介入を考えていた俺としては美味しい所を持つていかれて少し残念だけだな。」

アルフは恐る恐る振り返ると、そこには男がいた。

「時空管理局執務官、ウエーデ・バランサーだ。」

アルフは田の前が白くなつていくのを感じた。管理局に居場所がばれた、すぐにここに多くの管理局員がくるだろう。

「フェうぐつ！？」

だけどとつさに判断し、フェイトだけでも逃げてもらおうと想い叫ぼうとして口の中にはかが高速で入り込んできた。

「うまい棒つていろいろな種類があつて美味しいですよね。」

執務官の手にはうまい棒チーズ味の包みだけが握られていた。

「そんな訳でとりあえず言つておくが俺はお前達の味方だ。72人で管理局に潜り込んで情報を集める情報屋の部下といえば分かりますかね。」

「ふあ？」

うまい棒のせいでうまく言葉を発する事のできなかつたアルフであった。

「とりあえず、情報屋からの伝言を申し上げますと、お役に立てなくてすいませんだそうです。」

数十分後 アースラ内部

「本当に至つて普通の少年ですね。」

リンティを呼びに言つたはずの若い女性スタッフはあいに手を当て、ベットの上で包帯を巻かれ点滴と輸血をしてもらつていて少年を見ていた。

「転生者でもないのに原作介入するのは稀ですが、社長は何を危惧しているのや。」

葵井元樹の髪の毛や唾液、血液などのサンプルはすでに回収済みであるため、立ち去るだけとなつていた。

「うあ。」

どつやうら田覚めるらしい。女性スタッフは姿を見られると厄介な事になるため足早に立ち去つた。

少年は夢を見ていた、少年にとつて酷な悪夢を。

「どつしたんだ、一人でこんなところにいて。」

真つ暗闇の中、女の子に少年は声をかけた。振り向いた女の子は泣いていた。

「嘘つき、お兄ちゃんの嘘つき。もう、近づかないで。」

あまりの唐突さに少年は面食らつてしまつた。

「ちよつ、何のことだ。いつ俺が嘘をついたつて・・・」

「嘘つき、守つてくれるつて言つてたのに、お兄ちゃんなんて嫌い！――」

女の子は少年に背を向けると走り去つてしまつた。

「待つて、待つてくれ。お願ひだ。」

少年は追いかけよつと右手を伸ばし、肘から先が無かつた。

「えつ？」

驚いて立ち止まる。視線を下に向けると床には血が流れていった。後ろからも、前からも。

ゆつくりと視線を前に向けるとそこにはいた。

真つ赤に真つ赤に原形を何とか保てた女の子が立つていた。その子はおそらく泣いているみたいだった。

「……」

「ハア、ハア、ハア、ああもうつ！！」

左手でベットを本気で叩き付けた。
点滴や輸血用の針が外れ振動だけが体に伝わってきた。

「なんでなんだ、なんで俺は力が無いんだ！！」
「なかつたんだ！！」

「何より、なんであの夢を見たんだ！！ 未練がましいんだよ、過辺み上げてくる自分への怒り 少年はその怒りを自分にぶつけ毗ふ

暗示のよぎりで自分に叫ぶ。今は過去に囚われてる状況じゃない、ま

た可能性のあるあの家族の未来を何とかしてやらなければならぬ状況なのだ。

かから
今に逝去を恐れ
龍を向いて泣いてく
棘む。何

服は病人が着るような服になつてあり、傷口には包帯が巻かれていた。どのくらい時間が経つただろうか、落ち着きを取り戻した少年はようやく回りを見ることができた。

「リリはビーナんだ、といつより誰かいないのか。」

部屋から出て行く。

行くあても無く、怪我の痛みも感じずふらふらとふらふらと。

「すいません、お手伝いですか。

部屋の中は和風であり、そこに五人の人が正座で座っていた。

そのうち三人が見覚えがあった。というよりさつきまで一緒にいた

人だった。

そして、部屋の中にいる人全員が少年に当然の如く視線を向けていた。

五分前

「率直に言わせてもらうと、ロストロギアの回収は危険すぎる。後は管理局に任せてもらいたい。」

と言つはずのクロノが言つたのは意外な言葉だつた。

「今まで危険なロストロギアの回収、感謝します。これからはこち

らと共に回収をしませんか。」

その言葉を聞いて、なのはとユーノは『はい！』と元気良く答え、リンディはいきなりの息子の申し出に驚いて目を丸くした。

「・・・一ついいですか。」

紅美鈴はクロノとリンディの二人を見つめて言つた。

「公安の人が民間の協力を得るのは構いませんが、普通は民間人は危険な事に巻き込まないようにするのではないか。」

「クロノ、私も美鈴さんと同じ意見ですが、何か考えがあるのですか。」

ごもつともな二人の疑問にクロノはしつかりと自分の言葉を口にする。

「彼女達はもう立派な当事者だ。なら最後まで結末を見る義務がある。なにより逃走した二人は君達と何かあるのだろう。ならしつかりと気持ちを伝えるべきだ。」

その後にクロノが気まずそうに『さつきは仲裁に入つたけど』とボソッと言つたが・・・

「そうですか。ならその言葉を信じます、でもその言葉が嘘なら私は貴方達を全力で潰します。」

紅美鈴の言葉にリンディは凍りつきそうになつたがクロノは毅然と

していた。

「美鈴さん、潰すのはだめなの。」

なのはの言葉に紅美鈴は『冗談ですよ』と答えた。

「『ほんつ、話を』

「艦長は今は黙つてお茶を飲んでいてください。絶対に話の主導権を持つていかれますから。」

その言葉にリンディはションボリお茶を飲むことにした。その様子になのはとユーノは苦笑にするしかなかつた。

クロノがこのように言つようになつたのは同じ執務官であるウエジの教育のおかげであるが、教育は思いのほかつまご具合に行つたらしい。

「・・・なんていうか、お母さんは大切にしたほうがいいですよ。紅美鈴もリンディを憐れに思つたのかクロノに少し注意の言葉を投げかけた。

「ええ、大切にするのは時と場合によります。それよりも今は『すいません、じこつてじこですか。』

突然の扉の開く音と共に、寝ていなければいけない重症者が姿を現した。

全員が視線を向ける最中、重症者は部屋の中を見渡しポツリと言った。

「違う、明らかに和が違う。」

そんな事を呟くとリンディに指をせしめて宣言した。

「和を勘違いしてんじゃねえつーーー！」

「いきなり酷い言われよう！？」

リンディのリアクションを少年は無視してズカズカと中に入り左拳を血が滲むくらいの強さで握りしめる。

「俺が、この部屋を変えてみせるーーー！」

「とりあえず黙ろうか。」

クロノは冷静に少年の傷口をついた。一同は激痛に顔を歪めてうずくまる少年をすぐに想像してしまつたが、少年は何食わぬ顔で立

つていた。

「ああスマン、熱くなりすぎた。」

少年は冷静になつた。そんな少年に対し、なのはは一つ氣になることを聞いた。

「あの、包帯が滲んできてるけど大丈夫なの？」

クロノがつづいたためか包帯は赤く滲んできていた。だが、少年は予想以上の答えを返した。

「大丈夫大丈夫、俺は無痛症だから。」

その答えにその場全員が聞き覚えのないワードに疑問符を浮かべた。

無痛症 体の痛みを感じない病。無痛症患者は痛みを感じない事により自らの体の異常に気付くことがなく、取り返しのつかない状態になる場合もある。

葵井元樹がジュエルシードを右腕で殴り消し飛んでも平氣そうだったのも、プレシアの雷を何度も受けて立ち上がったのも、この症状が原因であった。

一時間前 時の庭園

「あの記憶を見て、私がどれだけ愚かで滑稽だつたかが分かつたわ。」

「フレシアはミイラに己の罪を懺悔していた。」

「私は・・・母親失格だわ。」

「ああ、そうだな。お前は娘に対し取り返しのつかないことをした。だがな、まだ間に合ひ。」

その言葉にフレシアは悲しそうに首を振つた。

「無理よ、あの子は私を恨んでいるわ。それに私の病はもうすぐ私を殺すわ。なら、せめて私を恨んだまま別れたほうがあの子のためになる。」

その言葉を聞き、ミイラは微笑んだ。

「そんな風に思えるのなら大丈夫だ。正直言つて、無理やり記憶を流し込んで人格崩壊するんじゃないかと思つていたが、逆に狂気が消えた。」

嬉しそうに、嬉しそうに笑いながらプレシアに語りかける。

「だからこそ言えるがあの子は恨んじやしない、あの子はお前のために今もジュエルシードを集めている。まあ、アルフは恨んでいるみたいだがゆつくり時間をかけては和解できる。今すぐにとはいかないが、俺は人の体の構造も弄^{じじく}ことができるからあなたの病も治せる。時間もたっぷりできる。」

人を多く殺してきた男の、その希望的な言葉にプレシアはそれでも悲しそうだった。

「それでも無理よ。知つてゐるでしょ、私は何の力もない葵井元樹という男をも傷つけた。いえ、殺しあげたわ。あの少年は今頃フェイトに私のした事を話しているはずよ。だから」

「あの少年はそんな些細な事など誰にもしゃべらんよ。それにアルフに引き渡したときには無傷の状態にしておいた。」

葵井元樹の事が分かつてゐるかのようにミイラは言つた。そして、

フレシアの目の前で煙草を取り出すと口に咥えた。

「フェイトのために死に掛けたでもあんたに立ち向かつたんだ、今頃少年はお前ら親子の関係を何とかしようと頑張つてゐるさ。」

今頃その少年は流れ弾で死に掛けたりする。そつとは知らずにミイラは最後の押しを言つた。

「だからさ、フェイトやフェイトのために頑張る少年の思いを受け止めてくれないか。」

「でも、今更あの子にどう接すればいいの。あんなに酷い事をしたのに。」

口に咥えた煙草に火を点けながら器用にミイラは答えた。

「そんなの決まってる、アリシアに接していいた時と同じようにフェイトにも接すればいい。難しい事だが同じ娘なんだ、できるだろ。」

煙草の煙を肺に満たし、ゆっくりと息を吐く。不思議な事に煙は出なかつた。

「だから次に彼女達が来たときは謝ることだ。その後に真実を伝えのも良し、隠すのも良し。もしも隠すのなら俺も協力する。」
その言葉を聞いて、フレシアは幾分か迷つた後に、迷いを振り切つたかのように自らの答えを出す。

「そうね。私は酷い母親だつたけど、あの子達のために心を入れ替えるわ。ありがとう。」

その言葉に照れくさそうにミイラはフレシアに背を向ける。

「別に、ただあんな事は一度ど「めんだつたから俺が勝手に御節介をしただけだ、感謝は無用だ。」

そして、ミイラは立ち去ろうとしたところでフレシアが呼び止めた。フレシアは憑き物が落ちたのか過去の優しかった頃の雰囲気を纏つていた。

「最後に聞きたいのだけれど、なんで貴方は無関係な私たちのためにここまでしてくれたの？」

その問いかけに、ミイラは振り返つて答える。

「そうだな、俺は――」

顔の包帯に手を掛けながらミイラは言つ。

はずだつた。

「ハッピーハンドにはさせないつてのよ、葬儀屋。」

首の中に冷たい鉄の感触が入り込んできた。

「な、ん？」

ミイラは首から異物を手で取り去る。入り込んできたのは果物ナイフだつた。

「ああああああ　あ　ああああああああ　ああ

あああ！！！」

プレシアの悲鳴が聞こえた。急いで振り返るとプレシアの中に赤い霧のような何かが入り込んでいた。

そして、赤い霧のような何かがプレシアの中に入り込むとプレシアは笑つていた。

「さすが無印のラスボス、この力は素晴らしい。これなら葬儀屋も葬る事ができるつてのよ。」

「・・・復讐者か。」

ミイラは自分が嫌になつた。どうやら自分がやつた咎は関係のない者まで苦しめるらしい。

ミイラが知る由もないが、葵井元樹が時の庭園に来たときの赤い霧はまさに復讐者が展開した霧だつた。そして、復讐者が展開していだ霧はミイラが現れたことで一時的にその霧の色を無色透明にしてごまかしていた。

「なあ、そいつは関係ないんだ。すぐに解放してくれないか、でなければ無理やりにでも引きずり出す。」

ミイラは体を乗つ取られたプレシアに対し、静かに殺しの思考に切り替える。

「嫌だね、俺は貴様に家族をすべて殺された。貴様を殺さんと気が済まないつてのよ。」

プレシアの体を乗つ取つた誰かは醜く笑う。

「だからさ、死んでくれよ葬儀屋。その後にジュエルシードを使ってアルハザードに行くからさ。家族が待つてんだつてのよ。」

ミイラは懐から玩具の拳銃を一つ取り出し、銃口を一つ向けた。もう一つの銃口は何があつても対処できるようにどこにも標準を向けていなかつた。

「なら、俺はお前を引きずり出す。」

ミイラは宣言をした。その宣言がおかしかつたのか相手はプレシアの体で大きく笑いながら呟いた。

「地の底の人形共、相手を喰らえ、犯せ、蹂躪しろ……」

その言葉と共に床に大きな穴が時の庭園中に現れ、そこから全身に人の皮膚を被つたビニール人形と血液を吐き出しながら頭を高速で回転させてる木の人形が次から次と這い出してきた。

「さあ殺し合おう葬儀屋。この体は病に侵されながらも魔力で満ち溢れている、今は素晴らしい気分だつ……！」

ミイラは圧倒的な戦力差に玩具の銃を床に落とした。

「そうだよな葬儀屋、いくら強かろうと勝てないよな、勝てないつてのよな！！」

逃げる、どうやって？ 霧になつても蝙蝠になつてもこの人形の物量なら殆どの俺の体は捕まつてしまつだらう。そうなると俺は回復するまで行動ができなくなる。そしたらプレシアの体を乗つ取つた奴は好き勝手に動くだらう。

「さあどうする葬儀屋、それとも命乞いをしてみるか？」

おそらくプレシアを攻撃した程度では引きずり出すのに意味が無いだらうし、周りの人形が邪魔をするのだらう。

やはり最後に残された手段は逃げるの一つしかないか。俺は力はあつてもチートじゃないんだ。人を操るにも一応時間がかかるし、そもそもプレシアに乗り移つてる奴はさつきから俺の空気感染が効いていない。

「この手はあまり使いたくなかったんだがな。」

ミイラのその呟きに相手は隠し玉があつたことに身構える。

そして、ミイラは一瞬で狼化して人形を掻い潜るよつに疾走した。つまり分散しないで一つの塊になり逃げた。

「 ちょっと 葬儀屋、逃げるつてのかよ！？」

狼化は素早い動きができるが武器を持ってないと他の能力が使えないといつう弱点がある。

まあ、ミイラの持つ能力は全てが長所と短所がある。なによりミイラは一対多数の戦いと範囲攻撃使いが大の苦手である。といふか勝つことが珍しい。

思い返せばジュエルシードにより巨大な木が現れた時に、偶然の事故とはいえなのはの砲撃を喰らい体半分を持つていかれたし、温泉の時に襲撃者二十人を倒せたのは本当に相手が雑魚の雑魚なのと自らが暴走したからだ。

なによりミイラは不意打ちが一番得意なのだ。なので転生前は転生者をそれで倒してきた。

つまり何が言いたいのかといふと、実際はミイラはそんなに強いわけではない。

「 待てつてのよ葬儀屋つて病が！？」

吐血した体を乗っ取られたプレシアを振り返ることなく人形の無駄のない攻撃を避けながら逃げる。

体制を整えなくてはいけない。現状を打破するために。

そう思つた狼化したミイラの背中に何かが突き刺さつた。

深夜 情報屋の店

情報屋は椅子に座りながら息を吐いた。今日は色々ありました。まずは紅美鈴さんについ一撃を受けて映姫様に会いました。エンシェルさんから無駄足じやねえかと古龍達の集中砲火を浴びて映姫様に会いました。

転生者で部下であるウェージからあんたどんだけ役立たずなんだよと言われてへこみました。

泣きつ面に蜂でアースラのスタッフとして潜入させていた男性スタッフが行方知れずだとウェーブから聞きました。

さらに泣きつ面にスズメバチで葵井元樹がアースラの中にいるとウェーブから聞いて完璧に自分の無能さがわかつてへこみました。さらになんやかんやで管理局となのは達が協力することになり、そのあと葵井元樹がリンディに和がなんたるかを教えて大変だったと聞いて『あ〜』と口から白い何かが出ました。

さらにフレシアが体を乗つ取られたてミイラが行方不明になつたという情報を聞いてもうどうにでもなれと思いました。

それを聞いた山猫がバイクにまたがり時の庭園に行こうとしたのを止めようとして轢かれて映姫様に会いました。

・・・。

「ふふつ、ふふふふふうふふふふふふふふうふつふ。」

疲れました。もう非常に疲れました。とんでもなく疲れました。ええ疲れましたとも。

「ふふふ・・・人生つて素晴らしい。」

涙しか出ません。本当に今日は厄日ですって。これでなんかあつたらもうブチ切れます。

「パパー。」

なんか娘が来ましたもうハハハです。

「どうしたんだシニース、何かあつたのか。」

「私が出でてきたときに一緒に出た緋色の花を片づけたよ。偉いですよ、パパ。」

なんだろう、最後の最後で良い報告が来たあああああああああああああああああああ。

「それとママがバイクで轢いてごめんなさいだつて。」

「別に気にしてないからいいですよ。さて、私も動きますかね。」

私は幸せ者だ。だからこの幸せが続くようにそろそろ私も動きます

か。

『災厄伝承』の一いつ名は飾りじゃないんだからな。

「パパ、どこか行くの？」

娘が情報屋を見つめる。その娘に対し、情報屋は微笑みながら答える。

「すぐに帰りますよ。シースも夜遅くなんだから早く寝るよう

に。

「分かった、お休みー。」

さて、家族と恋人とその他多数のために頑張りますか。

情報屋は今は知らない。緋色の花と共に現れた幼い少女が一つの事件の中心となることを今はまだ知らない。

妖氣「長文になつてしまつた。」

ミライ「それどいつもか、いろいろな場所で色々起きてるな。」

妖氣「いやー、俺つて群像劇が好きだからこんな構成に。」

ミライ「そして一つ言えることは更新が遅い。」

妖氣「それは言わんといつてな。そいつでしょ、今日のゲストの紅美鈴さん。」

紅美鈴「知りませんよ、そんなこと。」

妖氣「そうですよー、俺に味方なんていませんですよー。」

ミライ「次回に続く。」

『アースラ』

唐突だが、とりあえず断言できることがある。

葵井元樹の料理は健康に良い。

それがアースラのスタッフとなのはとユーノの感想だった。

「鯖味噌定食いつちよあがり。」

そして美味しい。その腕を見込まれて、その少年はアースラの食堂で働いている。

最初は身柄を拘束していただけ。それが今では左手を器用に使い絶品料理を作りアースラ内での評判は上々。

「人生なにが起きるか分からぬユーノ君。」

「そうだね、なのは。」

かくゆう一人も葵井元樹が時間を掛けて作り出した自家製白味噌の味噌汁をすすつた。

なのはは学校を休み親元を離れてユーノと一緒にジュエルシードを管理局の協力の下で回収に励んでいる。ちなみにフェイト達とは遭遇していない。

そして今、なのはは食堂エリアでユーノと共に白身魚定食を食べていた。ユーノは煮魚定食だった。

厨房からは料理を作る音と葵井元樹の指示の声が聞こえてきていた。

「葵井さん、食事の時間になると大変そうだね。」

「そうだね。けど葵井さん、なんだか輝いてるの。」

葵井元樹は怪我が完治してないのに生き生きとして料理を作っている。何人かの人と協力して料理を作っているが、協力というより手

伝いの人に葵井元樹がこれまで培つてきた料理の腕を教えていると
言つたほうがいいかもしれない。

その理由はメモ帳に記入しながら料理を手伝つなんて器用な事をやつて
いる人がいるためである。だが、それは一部で殆どほとんの人がメモ帳に記入しながら料理を手伝つということを卒業している。

「本当にありがたい話だよ。今までの食事なんてマンネリ感爆発の味氣無い物だつたからな。」

なのはとユーノが食事している席の隣に鯖味噌定食を持つたウェイジ・バルンサーが座つた。

19歳のお兄さんの存在であるウェージは、なのはとユーノと出会つてすぐ打ち解けた。さすがは転生者、精神年齢34歳は伊達ではない。

「そうですね、私もあれを毎日吃べるのはちょっと・・・」

あの味氣ない料理は栄養価は高いのだが食べる側からすると不評である。せめて資本の企業が作つてている様々な味のレーションが食べたいのである。

ちなみに資本の企業で働く兵隊さんは焼き肉味はあまり食べないとで有名である。

「だろ、あの少年が来てから楽しみが増えたとスタッフ全員が喜んでるんだよ。」

鯖の身を器用に箸で取り口に運ぶ。実に美味しい、このために生きている。役立たずのボスからの給料と差し引いても割に合わない危険な仕事をやつてるんだ。大体にして管理局の潜入で月給19万円つてふざけてるだろ、しかも管理局の方が給料高いしボスもつと金出せよ、というか支援も何もないのに正体バレたら俺は管理局に一生追われる事になるつづの、味噌汁美味い。

「急に泣き出してどうしたんですかウェージさん？」

あれつ本當だ、ユーノの言うとおり俺の瞳から透明な液体が流れてる。

「いや、人生は楽しいなつて。」

その言葉になのはとユーノは顔を見合させて不思議そうにウェージを見た。

「なにか、大変そうなの。」

「そうだよ、だから一人とも大人になつたらストレスが少なくて安全な職を探すんだよ。」

さりげなく原作崩壊を促してみる。別に最後に将来を選ぶのは二人なんだから関係ないと自分の心に言い聞かせる汚い大人なウェージがいた。

そんな彼に天罰が下りた。突然警報が鳴り響いた。

『エマージェンシー、捜査区域の海上にて大型の魔力反応感知。』

「えつちょっと、俺食い始めたばかり・・・本当に人生は素晴らしいよチクショウ！！」

海上でフェイトとアルフは暴走した複数のジュエルシード相手に苦戦していた。

モニター越しの映像を見てリンディはなのは達に言葉をかける。
「残酷なように見えるけど、私たちは常に最善の策を選ばなければならないの。」

「艦長の言葉は無視してなのはとユーノはすぐに現場に向かってくれ。」

クロノは食事を食べ損ねて落ち込んでいるウェージを慰めながら一人に指示を出した。

「最近、親というのが何なのか分からなくなってきたわ・・・」「まあまあ艦長、子供は常に成長するんですからいつかは立派に巢立ちますよ。」

エイミィの慰めにならない慰めを掛けられたリンディは何とも哀愁を漂わせるオーラが・・・

「母さん、落ち込まないでください。それに感情論の方が世の中う

まくいくとウエーブ執務官がいつていたので

「クロノは私よりウェーブ執務官を選ぶのね。」

クロノの言葉にさらに落ち込むリンクディ提督。木枯らしが吹いてい

るのは気のせいだらうか。

「艦長、お茶をお持ちしましょつか。」

「お願いするわエイミィ、砂糖は多めで・・・」

「とりあえず、モニターの向こうで非常事態が起きてるんだからしつかり仕事しろよ。」

ウェーブは何とか立ち直りモニターを見る。なのはとクロノが転送されている。

「ん？」

画面の端で何か見えた。

「エイミィ、ちょっと左端にレンズを向けて拡大してくれ。」

一つ返事でエイミィが言われたとおりに作業をした。

「・・・時空管理局執務官ウェーブ・バルンサー、アホを連れ戻しに海上空域に向かいます。」

モニターには物凄い勢いで落ちていく葵井元樹の姿が見えた。どうやつて現場上空に現れたのか不明だが、このまくいくと海にバ

チヤンなので救いにいく。

（本当に割に合わない仕事だよ。）

その割に合わない仕事を受けているウエーブは現場に向かうため、転送装置を使う。

そんな彼にエイミィが一言。

「あつ、転送先が別の場所になつてる。」

「なんですか！？」

ウェーブ、時すでに遅し。

海上で戦うフェイトの魔力は底をぬきやうになつていった。そして、葵井元樹といふ支えを失つたフェイトはアルフの支えでここまでやつてこられたが、もう限界だつた。

「フェイトちゃん！」

そして、なのはが丁度着たのはフェイトことつて幸運だつたのだろう。

「ジュエルシードを一緒に封印しよう。」

その言葉と共になのはのデバイスからフェイトのデバイスへ魔力が供給される。

「あっ、ありがとう。」

そして、ここからさらにフェイトに幸運が舞い降りた。

「フェイトオオオオオオオオオオオオ！」

聞き覚えのある声、フェイトが上を向いた。

「えつえつ？」

拡声器を持った葵井元樹が上空から自由落下していた。

「えつあつ、葵井さん！？」

動搖するフェイトに葵井元樹は拡声器の音量を最大にして叫ぶ。

「元気にしてたかフェイト！ 少し痩せたようだがご飯はちゃんと食べていたか？ ちゃんと睡眠はとれていたか？」

拡声器越しに響いてきた声は田舎のお袋みたいな言葉だった。

一瞬、フェイトは気が抜けそうになつたが現在進行形で少年は海面に向けて落下中である。

急いで葵井元樹を助けようとフェイトが動こうとした所で、変な場所に転送されたウェーブに代わり現場に急行したクロノが葵井元樹を掴んだ。

安堵したフェイトに向けて葵井元樹は叫ぶ。

「がんばれフェイトさん。これ、差し入れだ！！」

「ちよつ、あぶないです葵井さん。」

葵井元樹が不安定な体制で投げ渡した物をフェイトが受け取るとクロノが葵井元樹に文句を言つるのは同じタイミングだつた。

投げ渡された物、それはジュエルシードだった。そして、ジュエルシードが輝きフェイトの今までの疲労は吹き飛んだ。

「なのはさんから拝借した奴だ、それにお願いして上空から落ちる羽目になった。本来はフェイトさんの疲労が楽になるようとお願いしたんだが、なんで空から落ちる羽目になるんだろうか。」

「にやつ！？ いつのまに！？」

驚いてデバイスを確認するなのはに詫びを入れながら葵井元樹は最後の言葉を口にする。もはや葵井元樹は数回の接触でジュエルシードの扱いに慣れたみたいだつた。

「フェイトさん、今は管理局に拘束されて一緒にいれないが俺はいつまでもフェイトさん達の味方だ。だから頑張れ、そしてお節介としてだが、今暴走しているジュエルシードを封印したら、なのはさんと一回話し合つことだ、以上。」

言いたいことを言い終えた少年はそのままクロノによりアースラへと回収された。その時、一切触れられなかつたアルフが酷く落ち込んだのは言つまでもない。

と、そこでアルフの目の前にひらりひらりと紙が落ちてきた。その紙には『尺の都合上言えなかつたが、今まで俺がいない間もフェイトさんを支えてくれてありがとう。拘束から解放されたら特上のお肉を用意するから声を掛けなかつたのは許してな。』という文章が書いてあつた。

それを見てアルフは立ち直つたどころかフルパワー全開になつた。ちよろいものだ。

「」

「相変わらずだね、多分向こうでも今みたいな調子だつたんだよね。

葵井元樹と再会できて無事が分かつたフェイトの表情は明るく見えた。

「」

「うん、いつも周りに気を配つていてくれてたの。」

なのはのその言葉にフェイトは変わらぬ様子の葵井元樹の姿を思い浮かべ、そして

「お願い、ジュエルシードの封印に力を貸して。」

フェイトはなのはに協力を求めた。

「うん、うん！一緒に頑張ろつフェイトちゃん！…」

葵井元樹の与えた影響は本来の歴史をねじ曲げた。

本来なら、なのはとフェイトが和解するまでにはもう少し先になるはずだった。

「ディバイイイインバスタアアアアアア…！」

「サンダアアアレイジイイイイイ…！」

それが今は二人は協力してオーバーキルを繰り広げていた。さりげなくユーノとアルフも協力してサポートをしている。

葵井元樹の登場はこの歴史に善い影響を与えたのだろう。

ただ、二人が和解したきっかけとして一番大きいのは、海鳴温泉だらう。

ミイラが死にかけて、ヒロイン一人が死に、そしてアルフとユーノが内蔵にトラウマになった事件。

あれが二人の距離を縮めた一番の要因である。

つまり何が言いたいのかというと…

「どうすれば友達になれるか分からなければ、友達になつて、くれますか。」

見事に原作は崩壊した。決闘がする必要が無くなつた。

フェイトの申し出を聞き、なのはは感極まつていた。

もし、空から葵井元樹が落ちてこなければ、さつきまでの暗い表情のフェイトならば辛うじて原作崩壊はありえなかつた。

だから、このまま原作崩壊してハッピーエンドで終わる可能性もあつた。

ただ、変な場所に飛ばされたのウェーブの言つとおり人生は楽しくて素晴らしい物だつた。

海上上空の雲行きが怪しくなり、辺りが暗くなつてきた。

「艦長！海上とアースラに向けて高魔力反応、直撃します！！」

「何ですって！？」

その直後、アースラに雷が直撃した。その衝撃は艦全体を揺るがした。

「かつ、母さん？」

雷はファイトに直撃した。あまりの威力の余波になのばは吹き飛ばされた。

しかし、口は悲鳴を叫ねながら、扇の方へとさして悲鳴を上げる間もなく氣を失った。

「…せひアーハン…」

卷之三

なのはとアルフが同時に叫んだ。アルフは落ちていくフェイトに全速力で向かい、なんとか海に落ちる前に抱き留めた。
そして、アルフは鬼気迫る表情で空中に浮かぶ六つのジュエルシー
ドに向かい六つすべてのジュエルシードを取りフェイトを抱きかか
え逃げた。

「な、なん、これ、これが。」

葵井元樹はモニターの様子を呆然として見ていた。

次第に状況を理解していくにつれて、怒りと悔しさが心を満たして
いった。

少年の慟哭は、ただただ響き渡るだけだった。

「『）ふつう、この体もそろそろ限界になつてきたつてのよ。』」「

プレシアの体を乗つ取つた奴は玉座に座りながら吐血した。

「もう少しの辛抱ですよドールマスター。それよりも先ほどの雷の一撃は原作よりも強すぎたのではないですか。原作保守派としてはいただけない展開ですぞ。」

傍らの紺色のスーツを着崩した初老の男性が表情を変えずに非難の言葉を述べた。

「分かつてゐるつてのよ。だがまだこの体は馴染めてないつてのと予想以上にプレシアの意識の抵抗が強いことで力を制御しきれてないんだ。これくらい大目に見てもらいたいつてのよ。」

つまらなそうに咳くプレシアの体を乗つ取つたドールマスターを一瞥して紺色のスーツの男は文句を口にする。

「原作崩壊派には些細な事かもしけませんが保守派にとつては気になつてしまふがないんですよ。」

「んな事を言つたつてこれからやるのは原作を大きくぶつ壊すものだつての。お前も分かつてゐるだろ。」

その言葉に紺色のスーツの男はそうだつたと思いだしこれからの方針を口にする。

「大部隊を使い時の庭園に来たアースラを落とし管理局に宣戦布告をする。そして管理局が管理している世界を次々奪い取り次元間の霸権を手に入れる。」

「その過程で妨害してくる奴らはぶつ壊すつていう予定だつたが、その中で私怨も含めて潰すはずだつた葬儀屋は仕留めたつての。」

そう言つと、ミイラを仕留めた時を思いだしドールマスターは醜く笑つた。

「アルハザードへ行けば家族に会える。その後に家族を蘇らせて世界征服、面白いつてのよ。」

一人愉快に笑うドールマスターを特に何も思わず警告の言葉だけを言つ。

「面白くてもいいので足元をすくわれないようにしてもらいたいも

のです。奴隸国家の王様。^{ドールマスター}「

『？？？』

『情報屋、俺もお前には世話になつていい。だからお前に協力をしてやります。』

『御協力ありがとうございます。』

情報屋は畏まつた状態で礼の言葉を述べた。その様子がおかしいのかモニターの向こうの男は笑つた。

『まったく世の中は金以上に分からん。あの【災厄流出】と言われた史上最悪最強のゲスの転生者が今じゃ偽善に走つてるので。一つ質問するが今回の件は自分で解決した方が早いと思わんか？』

『ルシフィさんの悪口は言わないでください。これ以上侮辱するのなら許しませんよ・・・』

ルシフィの傍にいた山猫が剣呑な声でモニターの向こうの男に威圧する。

『山猫、怒らなくていい。俺は今は【災厄伝承】だ、役立たずの平和ボケの俺には遠い過去過ぎてとつぶに断ち切つた過去だ。』

何ともなげに情報屋は言った。その様子を見てモニターの向こうの男は興味深げに情報屋を見た。

『本当に変わつたな、だが気を付けたほうが多いぞ。表向きはロストロギアの暴走として処理された旧暦462年の次元断層による複数の平行世界の消滅事件も証拠を固められればすぐに懸賞金の上乗せで再び指名手配されるぞ。』

『主に裏社会の賞金稼ぎにですよね。責任は全て自分にあるとはいえない昔の事件を根に持つとは管理局も黒いことだ。』

『お前も昔は黒かつただろ。』

モニターの向こうの男は昔の情報屋を思い出し、懐かしむ。

『あまりにも悲惨すぎて管理局などが民衆が恐怖で恐慌状態にならないために隠し通した災厄。裏世界の賞金稼ぎに頼むしかできない、まったく俺が協力者だとばれたら殺される。頼むからこちらの組織に逃げ込んでくるなよ、確実にウチのボスはお前を匿つて全面戦争をしそうだからな。そうなつたらお前を管理局に突き出して俺は逃げるからな。』

山猫はモニターの向こうの男を睨むがモニターの男は気にすることなくいる。その様子に情報屋はハハハと苦笑にするしかできなかつた。

「肝に銘じておきます。それでは貴方の軍隊に幸運があることを。『災厄から幸運を願われるとはな。では、こいつは国家攻めが一つあるんだ、この辺でお開きにしよつ。』

その言葉と共にモニターはぶつりと切れた。

「はあ～ひやひやした。山猫、よくもまああの男にたてついたな。『ルシフィイさんがそばにいてくれれば怖い物なんてないですよ。』

屈託なく言われた言葉に情報屋は後頭部を搔く。

「そうだな、お前のことはずつと守つてやるよ。そのためならいくらでも強くなるし偽善も積み重ねる。すべてはお前のためにな。『ルシフィイさん・・・』

その言葉を聞き、山猫は頬を赤くした。なんとも甘い空間になつたある部屋の中に扉が開く音が聞こえた。

「パパ、ママ、お客様がきた・・・よ。」

シニスが扉を開け、閉めた。

「空気、読まれましたね・・・」

「そ、そうだな・・・」

「まずい空気が流れる。すゞく、『気まずい』

「お客様が来たみたいですね。」

「そ、そうみたいだな。」

固まつっていても仕方がないので一人して部屋から出ると、廊下には

シースが立っていた。

「パパ、ママ、邪魔しちゃってごめんなさい。」

「いや、気にしなくていいから。それでお客様はどんな感じなんだ。」

情報屋の質問にシースはお客様の特徴を思いだしながら口にする。

「翼が生えた女の子とメイド服の女人だった。」

明らかに奇妙すぎる特徴に情報屋は厄介な客が来たなと思つ。どうやら山猫も同じ思いらしい。

「どうしたのパパ、ママ。」

不思議そうに首をかしげる娘に対して『何でもないです』と笑顔で言う山猫。

その様子を見ながら情報屋は心中で思つ。

（さつきの誓いは少し訂正だな。山猫やシース、大切な家族のために頑張らないとな。）

そう誓いながらお客様の注文を聞き歩いていく。

打てる手は打つた。あとは新たな打てる手が増えるのを待つだけだ。全てはお客様のために。

ミイラ不在の物語進行（後書き）

妖氣「今日は情報屋の裏の頑張りの一部が入っています。」

ミイラ「それと管理局に拘束された葵井の待遇だな。」

妖氣「あれは拘束というのか？」

ミイラ「いや、アースラ内を自由に動いてるみたいだし拘束とは呼べないとと思う。」

妖氣「そうだな、そして本編でミイラが不在になってしまったがそれよりも重要なことがある。」

ミイラ「なんだ？」

妖氣「高校の二期末考査の英語ライティングで25点を取つてしまつた。」

ミイラ「・・・次回に続く。」

妖氣「スルーしないで！――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7065r/>

StrangeVampire's Journey

2011年11月27日20時49分発行